東洋美術大觀

五

Hoff
55

東洋美術大觀第五册

目次

第一編　德川時代

第一章　狩野派

幕府の流行—東山御物の播布—文化財富の普及—佛教との沒交渉—理想形式の自在—畫苑の盛況—諸派の分敍……三百二十九頁

小圖第卅九　休白等の誓書……三百二十九—三百四十二

木挽町家—古右近孝信—主馬尙信—養朴常信—如川周信—榮川古信—受川玄信—榮川院典信—妙性尼—養川院惟信—白川恭信—伊川院榮信—……三百四十二—三百六十二

晴川院養信—朝岡興禎—勝川院雅信……

鍛冶橋家—探幽守信—探幽守定—探牛守睦—道信—探信守政—探船章信—探常守寅—探林守美—探牧守邦—探信守道—探淵守興—探原守經—探……三百六十二—三百七十九

美守貴—探岳守節……

小圖第四十　桃田柳榮筆探幽像……三百六十七

濱町家—隨川岑信—隨川市信—常川幸信—岡川昆信—融川寬信—舜川章信—友川助信—蓋川中信—春川友信……三百七十九—三百八十三

表繪師—駿河台家—洞雲益信—洞春義信—元仙方信—洞春美信—洞白愛信—洞益春信—洞白陳信—洞春陽信—洞榮秀信……三百八十三—三百八十七

山下家—眞笑秀政—了不了承秀之—伊織—式部—元俊秀信—春雪信之—春笑亮信—春水命信—春笑宣信—春仙意信—春貞與信—眞笑意信—春……三百八十七—三百九十

笑且信—春貞—春雪……

深川水場家—梅榮知信—梅春旭信—梅笑師信—了承賢信—梅榮一信—梅榮—梅春貞信—勝玉昭信……三百九十—三百九十五

御徒士町家—休白長信—休白昌信—休碪友信—休宅里信—玉燕季信—休伯壽信—玉榮在信—休伯瀟信—玉圓永信—玉泉應信—綠町家—長盛……三百九十五—三百九十九

麻布一本松家—休圓淸信—休山是信—松林惇信—休山德信—休圓爲信—松林喜信……三百九十九—四百

松永町家—友益氏信—伯圓方信—榮仙成信—伯淸因信—榮澤雪信—伯圓敬信—友益致信—盛川盈信……四百—四百一

愛宕下家—即譽稱信—舟川令信—周譽觀信—探榮守安—探圓守胤—即譽守春—探玄守明—探龍守玉……四百一—四百二

根岸御行松家—一溪重良—丹靑若水祭—織部重賴—三五郎—內膳良信—安仙春信—友市安信—良信榮信—安仙自信—祐市梅信—良信寬淸—安川

貴信—勝英祐信—良信勝一……四百二—四百六

明治 42 10 5 內交

小田原町家—宗心種永—内匠種信—左近種次—大學氏信—柳雪秀信—柳伯定信—柳溪邑信—柳雪中信—柳溪共信—溪雲來信—柳雪匡信—雪溪

俊信—溪雲久信……四百六—四百十六

金杉片町家—梅雲爲信—梅軒富信—梅雨—梅舟民信—梅有—梅春胤信—梅軒員信—梅雲行信—梅俊厚信—梅軒則信—梅香芳信……四百十六—四百十七

猿屋町代地家—素川信政—信秀—春石敦信—伯春武信—春石賢信—素川章信—春石圭信—伯春行信—素川春信……四百十八—四百二十一

猿屋町代地分家—洞元邦信—洞琳波信—洞春克信—洞庭興信—洞琳由信—洞春米信—洞庭敎信—廣光……四百二十一—四百二十三

稻荷橋家—春湖元珍—春賀理信……四百二十三—四百二十四

勝田家—沖之丞—佐兵衛貞寬……四百二十四—四百二十五

奥繪師狩野諸家の格式—觸頭としての木挽町家—繪所の官奬—筆順—觸頭としての中橋家—狩野氏及信字の免許—鍛冶橋家の守字、探字—身裝、乘輿及幕府の待遇—奥繪師の勤務—江戸城障壁畫—禁裏障壁畫—朝鮮屏風—奥向御用の諸品—將軍畫像製作例—御本丸以外の席畫及廊畫の製作—古畫の鑒定—奥繪師の家道—門人及その敎授法—奥繪師起請文—法眼、法印の被敍及官物—御繪本途—江戸向御座飾御繪本途—禁裏御繪本途—朝鮮屏風本途—屏風本途—繪卷物本途—本途割增—佛殿彩色本途—表繪師の勤務—御席畫—參向公家兼帶應席畫—表繪師の製作—御出入……四百二十五—四百四十八

小圖第四十一　年始、月次御禮席……四百三十

小圖第四十二　五節句御禮席……四百三十一

小圖第四十三　表席繪……四百四十七

幕府繪師以外の狩野派—京狩野—山雪—永納—本朝畫史—乘信—常貞—永敬—永榊—永雪—永伯—畫巧潛覽—永良—永貞—永隆—永常—永俊—永岳—永信……四百四十九—四百五十一

小圖第四十四　狩野永納筆祭禮圖屏風……四百五十一

山樂門人—松花堂—松花堂の末流—山雪門人—信力家—永納の門人—山口雪溪—永敬の門人—高田敬輔……四百五十一—四百五十三

松榮門下の末流—松伯の後—宗泉の後……四百五十三—四百五十四

古右京門人—狩野興以—狩野了桂、了之—狩野永雪……四百五十四—四百五十五

貞信門人—狩野昌庵—昌運—昌運筆記—一信以下……四百五十五—四百五十八

永眞門人—英派—狩野常眞……四百五十八

探幽門人—久隅守景—半幽—神足守周—雪信—桃田柳榮—尾形家—書答—鶴澤家—鶴澤門人—爾餘探幽門人……四百五十八—四百六十四

小圖第四十五　石田幽汀筆風雨花卉圖屏風……四百六十二

狩野派の遺作……四百六十四
第一二百二　狩野興以筆山水圖屏風（一帖及その一部分）
第一二百三　同筆繫舟圖御杉戸
第一二百四　狩野山雪筆水禽圖屏風
第一二百五　狩野探幽筆宮殿人物圖壁畫
第一二百六　同筆巨松鷲鳥圖障壁畫（其一、其二）
第一二百七　同筆鍾馗圖
第一二百八　同筆紫式部圖
第一二百九　狩野尚信筆泊舟雨鷺圖
第一二百十　狩野常信筆地藏圖
第二二百十一　同筆桐鳳圖屏風
第二二百十二　久隅守景筆農家圖
第二二百十三　同筆觀瀑及耕田圖（六曲屏風一雙中の二扇）
第二二百十四　同筆春稼秋穡圖屏風一雙（全圖二及一部分）
第二二百十五　同筆勿來關圖
第二二百十六　同筆獼猴捉月圖
第二二百十七　清原雪信筆王昭君圖
第二二百十八　英一蝶筆蟬丸圖
第二二百十九　同筆驟雨圖
第二二百二十　同筆活達風流圖卷（一部分）

第二百二十一　松花堂筆商山四皓圖

第二章　海北、雲谷、長谷川及曾我派

海北派—友雪……四百七十一

第二百二十二　海北友雪筆樓閣山水圖雙幅

傳故—友竹—友賢—友泉—友徳—宮本二天……四百七十一—四百七十二

第二百二十三　宮本二天筆鵜圖

第二百二十四　同筆布袋鬪鷄圖

雲谷派諸家……四百七十二—四百七十五

小圖第四十六　雲谷等益筆竹林七賢圖屏風

長谷川派諸家……四百七十五—四百七十六

曾我派—二直庵……四百七十六

第二百二十五　曾我二直庵筆鷹圖屏風

三直庵—紹與—紹叔—蕭白……四百七十六—四百七十八

第二百二十六　曾我蕭白筆山水圖屏風（一雙二圖及その一部分）

第二百二十七　同筆牡丹鷹圖

第二百二十八　同筆黃石公張良圖

第三章　土佐派

土佐家—光起……四百七十九—四百八十

第二百二十九　土佐光起筆粟鶉圖屏風（二圖及その一部分）

第二百三十　同筆桐鳳圖

光成—光祐—光芳—光淳—光時—光祿—光文—光章—光一—光貞—光孚—光清—光武……四百八十—四百八十四

住吉家—如慶廣通—具慶廣澄—鶴洲—廣保—廣守—廣行—廣尙—弘定—廣一—住吉家の門人……四百八十四—四百九十六

板谷家—桂舟廣當—桂意廣長—桂舟廣隆—桂意廣春—桂舟弘延—桂意廣春—桂舟廣永……四百九十六—五百五

粟田口家……五百五
復古土佐派—田中訥言……五百五—五百六
第二百三十一　田中訥言筆養老瀧圖
宇喜多一蕙……五百六—五百十
第二百三十二　宇喜多一蕙筆婚怪草子一部分
宇喜多松庵—渡邊清—大石眞虎—岡田爲恭……五百十—五百十六
第二百三十三　岡田爲恭筆高津聖詠圖
第四章　光琳派
光琳派の名稱—光琳派の性質—本阿彌光悅……五百十七—五百十八
第二百三十四　本阿彌光悅筆萩兎圖扇畫
第二百三十五　同筆草花圖屏風
本阿彌光甫—野々村宗達……五百十八—五百十九
第二百三十六　野々村宗達筆源氏物語關屋圖屏風全圖及一部分
第二百三十七　同筆源氏物語澪標及關屋圖屏風二圖及澪標圖の一部分
第二百三十八　同筆風神、雷神圖屏風一雙二圖
第二百三十九　同筆歌卷下繪群鹿圖一分部
喜多川宗說—野々村道正—北川正五—順定宗仙—俵屋宗雪—長谷川左近—尾形光琳……五百十九—五百二十二
第二百四十　尾形光琳筆伊勢物語東下圖
第二百四十一　同筆伊勢物語八橋圖
第二百四十二　同筆小督圖
第二百四十三　同筆紫式部圖
第二百四十四　同筆秋草圖屏風一雙二圖及その一部分
第二百四十五　同筆雄鷄圖

第二百四十六　同筆山水圖
尾形方泉—尾形光是—尾形乾山……五百二十二—五百二十三
第二百四十七　尾形乾山筆八哥鳥圖
第二百四十八　同筆草籃圖
小川破笠……五百二十四
第二百四十九　小川破笠筆六歌仙圖扇畫
立林何帛—渡邊始興……五百二十四—五百二十五
第二百五十　渡邊始興筆六歌仙圖
俵屋宗理—宗達光琳の末流諸家—抱一……五百二十五—五百二十九
第二百五十一　抱一筆秋草圖屏風
第二百五十二　同筆紅梅圖屏風
第二百五十三　同筆高津聖詠圖
鶯浦—鶯一—卜酒井道一—鈴木蠣潭—鈴木其一……五百二十九—五百三十
第二百五十四　鈴木其一筆熟柿圖屏風一雙
池田弧村……五百三十一

東洋美術大觀

第七編　德川時代（慶長八年より慶應三年まで）

繪畫の流行

足利時代に當り、支那畫の鑒賞盛に行はれしより、禪僧の將來及將軍家輸入の外、中國、九州の諸侯亦みづから輸入せるものありしかば、その船載品頗る富み、從ひて宋元風繪畫大いに勃興し、終に雪舟、狩野の二大流派を出しゝが、豐臣時代に至り、製作の一面に於いて、前者は雲谷長谷川の二派と爲り、後者は金壁障屏の大作に絢爛陸離の新趣を發し、更に他の一面に於いては、前代に於ける支那畫贈答の流行と、足利家の滅亡に由りて、謂はゆる東山御物が諸國の侯伯、士夫及泉州堺等の茶事を好める富人の間に播布せられしとの爲にや、繪畫の鑒賞は天下に弘まり、漸く民間にも普及し始めきかくて、天正の擾亂に繼ぐに、慶長八年江戸幕府の創立を以てし、寛永十六年以降鎖國の制を嚴にして、專ら偃武修文の治を施しゝかば、太平の德澤忽ち民間の財富と文化とを高めつ、由來古代の文化、財富は、殆ど貴族の專有に屬し、庶民開明の度は尙甚低かりしが爲、美術の受用も從ひて上流人士に局しゝかど、近世に至りては、漸く中流以下の民にも頒たれぬ。これ即ち社會自然の發達なりと雖も、應仁亂後殊に著き豪族割據の小分權は、蓋し頗るこの傾向を助けしなるべく、而も足利時代の間、亂離の爲に抑へられしもの、端なくも、獨り自治市の體を爲して外國貿易に繁華殷富を肆にしたる堺に於いて勃發し、延いて平和の復せられし京都に及び、本時代に入りては、更に新開の江戸に及びて、以て終に宇內に通被す。啻に然るのみならず、足利時代に於いて、たゝひ尙禪味の瀰漫せざる所とす。美術史上に於ける二百六十四年德川氏文治の績、豈復偉ならずや。左に流派に依りて章を分ち、以てその沿革を叙すべし。

東山御物の擴布

文化財富の普及

佛教との關係

道釋形式の自在

畫苑の概況

畫派の分叙

第一章　狩野派

狩野の宗族及支家

狩野派は足利時代に起り、豐臣時代を通じて、以て現代に及べる我が國最大最盛の流派にして、本時代の間、幕府及諸侯の御繪師は、大抵皆この派の占むる所と爲り、謂はゆる町繪師を睥睨して、久しく覇權を畫壇に揮へり、されば、その宗族、支家門葉甚繁く、その門より出でし作

者極めて多し。而して徳川幕府の狩野家御繪師は、奥繪師四家、（中橋、木挽町、鍛冶橋、浜町）表繪師十二家にして、奥繪師は即ち狩野家の宗族たり。表繪師の中には血脈の支家（養子の分家なし含む）七、（駿河臺、山下、深川永代、御徒士町、麻布一本松、新田松永町、愛宕下）門人の狩野氏を冒せるもの五（根岸御行松、鶴地小田原町、金杉片町、猿屋町代地、同分家）あり。その餘長く續かざりし稻荷橋家門及勝田家（門人にして狩野氏なし冒すあり）あり。奥繪師中の木挽町家は、一時二家に分れ、その一は幾もなくして絶えたり。されば本末別に說けば、勝田をも合せて、都べて十九家と爲る。左にまづ宗族の四家を叙し、以て爾餘の諸家に及ばむ。

中橋家

狩野の宗家は即ち後の謂はゆる中橋家（家之紋丸之内三ツ矢、替紋五三桐、同紋花菱、幕之紋丸之内三ツ矢（含心齋筆記））なり。狩野永徳の子に光信、孝信、圓藏院及祐信あり。（この四人豐臣時代に屬し、前期に叙すべきなれど、狩野家の畫人にして德川氏の繪事を勤めたる最初は光信なるが故に、連絡上便宜本期に叙す）嫡光信（宗家第六代、母は宗丘（永徳先祖書））幼名は四郎次郎、後右京進（又右京、右京亮）と稱す。時信（後に出づ）に對して世に古右京と云ふ。或は幕商

右京光信

と號せしことは名公畫譜に見えたり。永祿某年十一月八日山城に生る。（含心齋筆記、邦信書上系圖、幕門畫家譜及古畫備考等は永祿四年とし、土佐狩野附家系圖には「永祿八年乙丑生」と記せり）初め織田信長に仕へ、土佐光茂の女を娶り、（永祿先祖書、狩野忠信、狩野右京亮信、及邦信寄上系圖、亦同じ）に曰く、「光信儀天正十八（庚寅）年九月十四日、父永德病死仕候に付、父遺領無相違、太閤秀吉より被下候。同年同月廿五日、知行高百石朱印、太閤秀吉より頂戴仕、代々所持罷在候處、先年類燒之節燒失仕、右寫所持仕候。（含心齋筆記に太閤秀吉朱印寫あり、「山城國大原内百石宛、如父永徳令扶助畫、全可領知由被仰出候也、天正十八年九月廿五日、朱印、狩野右京進」）光信儀太閤秀吉に相勤申候。（中略）太閤秀吉より知行高百石、山城國大原郡に而拜領之、舊領其儘に無相違被下置候。（大原郷の内戸寺村なり、永禄に至るまでこれを領せり）其節京都元誓願寺通に而屋鋪拜領仕候。當時京都に而狩野辻と唱申候」「御ゆゑのゝ上の日記」慶長三年十月六日の條に曰く、「かのうきやうしんに、御びやうぶおほせ付られ、大かたいできより候て、御目にかけ候」。太閤記（卷十三、名譽屋族館御作事衆の條）に「山里書院（五間、六間、中畳）、座敷何も狩野右京亮畫之、畫工相勤申候。（中略）太閤秀吉より頂戴仕、代々所持罷在候處、先年類燒之節燒失仕、右寫所持仕候。（含心齋筆記に太閤秀吉朱印寫あり、「山城國大原内百石宛、如父永徳令扶助畫、全可領知由被仰出候也、天正十八年九月廿五日、朱印、狩野右京進」）光信儀太閤秀吉に相勤申候。（中略）太閤秀吉より知行高百石、山城國大原郡に而拜領之、舊領其儘に無相違被下置候。（大原郷の内戸寺村なり、永禄に至るまでこれを領せり）其節京都元誓願寺通に而屋鋪拜領仕候。當時京都に而狩野辻と唱申候」「御ゆゑのゝ上の日記」慶長三年十月六日の條に曰く、「かのうきやうしんに、御びやうぶおほせ付られ、大かたいできより候て、御目にかけ候」。太閤記（卷十三、名譽屋族館御作事衆の條）に「山里書院（五間、六間、中畳）、座敷何も言舌の及ぶべきなし、其次之間、耕作之繪有、其次之間、花鳥之色繪有、其外は不及記之」、松浦記集成（卷四、名古屋族館作事衆の條）に「同（山里丸）次ノ間、耕作の繪、右京亮畫ク、三ノ間、花鳥の繪、同人筆、山里局六間、梁十三間、（中畳）右間毎に華鳥の繪、右京亮畫」など見え、丹青若木集にも「豐臣秀吉公殿中畫花草、蝴蝶來畫花遊戯、見之人皆感稱矣」と曰へり。先に宗秀の條に掲げたる光信の書中に、「我等事、伏見、大坂に而之御用相調候へば、京都に居申候事も稀に候」などあれば、慶長六七年頃、盛に豐臣家の畫事を勤めしなり。慶長八年德川家康の幕府を江戸に創むるや、光信を召し下してその殿舍に畫かしむ。これ即ち狩野家の大いに德川氏に用ゐられて、久しく畫壇の覇權を握るに至りし濫觴なりけり。言繼卿記慶長八年八月十七日の條に曰く、「狩野右京進、扇子墨繪壹本、田舍中折五束、倉部ニ扇子一本持參了。江戸大納言殿御座敷繪ニ上京并大内裏ヲ書也云々。將軍ヨリ可談合之由被仰候間、來談合了。拾芥抄中卷借用遣了。入麺ニテ勸酒了」。同月廿二日の條に曰く、「狩野右京進サシ樽一荷兩種、倉部ニ短册繪十枚等持參了。繪圖之事種々談合了。サウメンニテ勸酒了」。想ふに、光信の德川氏に徵さるゝは、言繼卿の斡旋に由りしものか。永德先祖書に曰く、「慶長十一（丙午）年三月五日、御畫御用ニ付、江戸ゟ罷下、相勤申候。道中人馬朱印（この朱印狩野忠信藏せり、「人足拾人、駄馬八疋、京都より江戸まで可相立者也、仍如件、慶長拾壹年三月五日、右宿中」、包紙に曰く、「被下狩野右京」）

項戴仕、御畫御用相濟、同年八月、日不知、歸洛仕候。慶長十一丙午年十月十日被爲召、江戸罷下、御畫御用相勤申候。同十三戊申年六月、日不知、御畫御用相濟、歸洛之節、道中ニ而相煩、同月四日勢州於桑名宿ニ病死仕候。年四十四。同所壽量寺ニ葬。法名常順院日圓」。（會心齋筆記、邦信卷上系圖、古畫備考等皆略同じ）その歿年、享壽、諸書傳を同うせず（畫工錄は慶長十三年四十六歲、畫工候覽は同九年四十六歲、本朝畫史及名公畫譜は同七年四十二歲、畫事備考は同年四十三歲とす、生年を永祿四年とし、歿年を慶長十三年とすれば、四十八歲なり、慶長七年又は九年歿の說は、同十一年の人馬朱印あるにて、非なること明けし）と雖も、永祿八年生れ、慶長十三年四十四歲にて歿するとするを、最も正しと爲すべし。本朝畫史に曰く、「畫樣不知、如父意、故未得家法、永德沒後、從家族及諸門生、孜々得家法、爲花草禽蟲、倭畫風情、輕柔可愛、又倣玉澗之山水、雖不及父、凡中畫今洛下相國寺法堂天井蟠龍圖、乃光信之墨痕也」。丹青若木集に曰く、「人物手足爲小、兼長于花禽矣、豐臣關白秀吉公殿中畫花草、胡蝶來畫花、遊戲見之人皆感稱矣。展閱目錄に、誓願寺所藏右京亮筆八島屏風一雙を錄せり。その畫傳世多からず。御室御所大御殿御間附（備考）に上段、中段、下段之間、古右京筆とあれど、今存せず。高臺寺の松之畫（同書）も亦然り。

四郎院貞信

光信の弟孝信は即ち木挽町家の祖なり。（後に出づ）その弟と云へる圓藏院は永德先祖書、會心齋筆記等に見えず。たゞ丹青若木集に出で、古畫備考に、「妙覺寺畫ヲ書、雪閑齋、布袋ヲ見ル」とあるのみ。祐信（古畫備考一に祐信に作れり）には通稱を源七郎と云ふ。丹青若木集には「源七（肥後而死、三十一、丹青若有器德）」と記し、古畫備考に曰へり。古畫備考には更に狩野置信を擧げ、「探幽叔父、在京シテ北野ニ

左近貞信

光信の子に貞信及一女（古畫備考、辨玉集を引いて、狩野新右衛門妻と記せり、隔蓂記に、同書系圖又貞信の女と爲せるは誤なりとあり）。貞信（畫事備考又畫信と記せり）幼名竹千代、（畫工錄覽）通稱初め四郎次郎、後左近（畫事備考には左京、畫工錄覽及邦信卷上系圖は又右京進と稱すと曰ひ、畫工錄覽は「號左近將監」と記せり）と改む。慶長二年四月七日（邦信卷上系圖及會心齋筆記に依る、土佐狩野閑家系圖は、天正十五年生れと爲せり）京都に生る。永德先祖書に曰く、「貞信儀、台德院樣ゟ御目見仕、慶長十三戊申年、月日不知、父右京進跡式無相違被下置候段被仰付候。同十九甲寅年八月、日不知、尾州名古屋御城御畫之間御畫御用被仰付、相勤申候。（狩野出信、系傳馬朱印、「傳馬貳拾七疋、從京都尾州名古屋迄、寛永九年八月四日、右宿中」とあり）年、月日不知、江戸ゟ罷下り、御畫御用可相勤旨被仰付、依之江戸ゟ罷下り申候。元和九癸亥年九月廿日病死仕候。年二十七。（土佐狩野閑家系圖は三十七と爲せり）池上本門寺ニ葬。法名安心院日理」。（會心齋筆記、邦信卷上系圖、畫工錄覽及寛永五年と爲せり）貞信の歿する前一日、休白、探幽、眞說、尙信、新右衛門、光信門人）元俊及興以を、右衛門、光信門人）元俊及興以を、

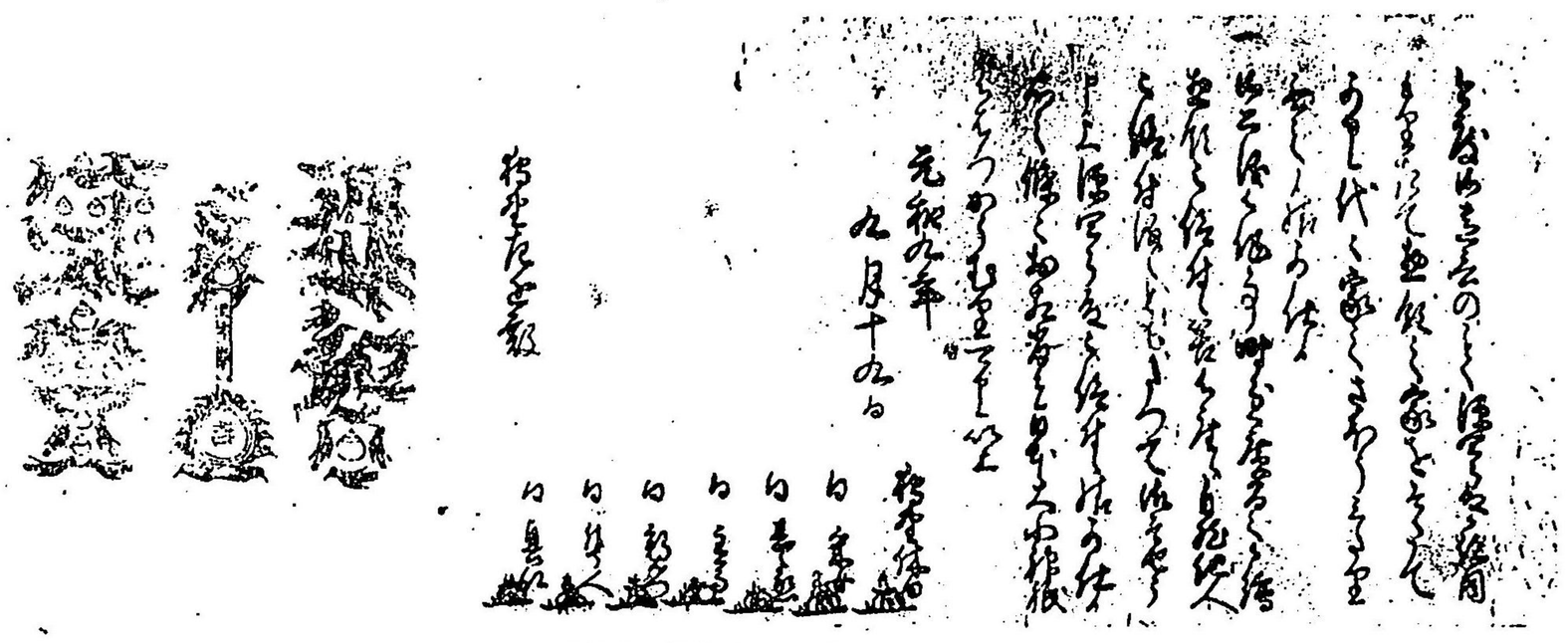
今度御遺言のとく、源四郎殿御跡目もりたて、惣領之家を御たて可申候。代々家之さほうみだり無之候樣可仕候。

一。御公儀御作事時分、御廣間之御檜、惣領被仰付候。依之御座候。自然他人被仰付儀候とも、たつて御そせう申上、源四郎殿被仰付候樣可仕候。

右之條々於相背者、日本大小神祇、御ばつかうむり可申候。以上。

元和九年九月十九日

蓋し、貞信己の死後に於ける源四郎（安信）の身を思ひ、本家の格を損せざらしめむの意に出でたるならむ。寛永中江戸城御本丸の障壁を畫かしめらるゝ時、源四郎が大廣間松鶴、雪柳圖及その他最も重要の部分に揮毫せしは、即ちこの誓書に依りしなるべし。貞信の肖像（安信畫）尙存



小國郡三十九　休白等の書書

す。（狩野忠信）その遺作世に傳ふるもの稀なり。嚴島神社に神馬の額ある由、嚴島繪馬鑑に見ゆ。古畫備考に、狩野四郎二郎の署名に元信の印を捺せる款識を載せたり。

貞信子なきを以て、門人昌運の計らひにて、孝信の第三子安信を養ひて嗣と爲す。（中條、古畫備考に見ゆ）安信幼名雄丸、（系圖一本雄大に作る）通稱源四郎又右京進、（會心齋筆記には「初四郎二郎」とあり）牧心齋、永眞と號す。慶長十八年十二月朔日京都に生る。畫を光信の門人興以（後出つ）に學べり。元和九年養父貞信の歿後、その跡式を相續す。永德先祖書に曰く、「年月日不知、台德院ゟ御目見被仰付候。寛永年月日不知、江戸於中橋ニ屋鋪拜領仕、住宅ニ仕候。大猷院御代、年月日不知、御扶持方拾五人扶持被下置候、嚴有院樣御代寛文二壬寅年法眼ニ被仰付候。（畫工傳聖には「初紋付御繪師法眼」とあり、雲川寶記寛文二年五月廿九日の條に曰く、「永眞安信畫工の長子にて、年も長じたれば、法眼に叙せらるべしとなり」、狩野法印に叙せられしと同時）同三癸卯年正月五日、於御城書初被仰付、御紋付御羽織一ッ拜領仕候。夫ゟ年々書初被仰付、御紋付御羽織一ッ、御羽織一ッ拜領仕候。夫ゟ年々書初被仰付、御紋付御羽織拜領仕候」同書寛文三年の禁裡御用を遂して錄せずと雖も、現存の古文書に依りてこれを知る。（狩野忠信繪人馬朱印に曰く、「人足八人、馬五疋、從京都江戸迄可出之、是者禁中方御殿御繪師狩野永眞被下之者也、寛文三年卯九月廿八日、右御馬宿中」）同書又曰く、「延寶三乙卯年六月九日、禁裡御造營ニ付御畫御用被仰付、道中人馬御朱印（狩野忠信繪、「人足八人、馬五疋、從江戸京都迄上下可出之、是者禁中御作事付而繪師永眞參候時被下之者也、延寶三年六月九日、御馬宿中」）同書又曰く、「延寶三乙卯年六月九日、嚴有院樣御代寛文二年五月廿九日の條に曰く、「永眞安信畫工の長子にて、年も長じたれば、法眼に叙せられしと同時」）同三癸卯年正月五日、於御城書初被仰付、御紋付

五月祐清書上の古文書（狩野忠信藏）に、大鋸町中通り之方ニ而表京間拾六間、裏行四拾壹間之所、寛永年中凡百十七八年以前、先祖古永眞代拜領致候、此内表拾六間、裏行貳拾間之所、寶永元申三月借屋仕、町御奉行様御支配ニ附申度旨相願候云々」とあり。（その後の古文書（同藏）に「京間八百五十坪、内貸地三百坪餘、新道百五十坪餘、住居二百六十坪餘とあり」）

「御本丸御座敷幷御廊下繪様之次第」（狩野忠信藏 寛記原本）に依るに、安信が江戸城御本丸に畫ける障壁左の如し。

大式臺竹虎

大廣間松ニ鶴、雪ニ柳鳥、小壁牡丹、若松、上天井錦紋、惣天井桐葉唐草

御對面所上段（帝鑑、二ノ間、三ノ間天井唐草、惣縁側繊錦、小壁山水、縁側濃松之間、上段天井錦紋）

板之間 波白鷺、四季山

御座之間 二ノ間 山水、小壁山水、外ニ小壁色々、天井山水

延寶御造營禁裏の障壁畫に關し、柳菴隨筆（狩野八郎于藏寫本）禁裏御造營記略（延寶二寅年、同四辰年廢）に記する所左の如し。

「一。紫宸殿賢聖、永眞、人形高三尺五寸、但此度永眞作意にて、少々ヅヽ、高下有之。障子之縁かいき、繊紋蝶鳥、幅貳寸五分。賢聖之銘、絹五疋、中臣、持明院殿筆、人形の上に押す。筆代五十石。」

「一。賢聖之障子繪（中略）今度永眞に被仰付、本途ニ貳割增、壹坪三百匁ヅヽ也。」

古畫備考の同記錄に曰く。

「一。本途二割增、狩野水眞（下略）。」

「一。繪所夫之覺（但所ハ相國寺地中。）

五人永眞（先規之通（下略）。」

又禁裏御造營記略に依るに、この時永眞の畫けるもの左の如し。

紫宸殿賢聖、蓬萊獅子

清涼殿荒海障子

御伺之間 四幅

同上段 九老

同中段 七賢

常御殿夜御殿 四季花鳥

同御三之間 富士

同中段 吉野

小御所中段 内宴闘鶏

女御御殿上段 住吉、御朝稙四枝、梅、牡丹、菊、山茶花

女御御里御殿上段 唐子

清涼殿艮之方御杉戸 東竹虎、西梅孔雀

同御納間御杉戸 南孔雀、北王義之

同上段艮御杉戸 西水ニ山吹、東竹ニ鶴

同折廻西御杉戸 北松ニ藤水邊、南牡丹唐獅子

常御殿御三ノ間御杉戸 南採桑老、北鶴安道

同下段御杉戸 東王母、南八般飛

小御所上段艮御杉戸 西巢父許由、東鳴門

同下段巽御杉戸 東風凰、西樊噲

女御御里御殿入口東御杉戸 東四王母、西岩鶴

畫工便覽安信を評して曰く、丹青最活動而有器趣、兄守信風格學、又成一家筆力、又曰く、畫紫宸殿賢聖障子、振於名天下、于時賞之、古畫備考昌運筆記を引いて曰く、永眞畫風古今に秀で、一風を爲す、廿一歳にして日光に到、依台命、寮舍堂間十六間の天井に蟠龍を畫く、又淺草觀音堂の天井に蟠龍、天人をゑがく、中年に至り、禁裡營中の畫勤、世に畫風をもてなし、後代に至りても是をもてなす事不止、中興と是をいふ、黄檗高泉の詩に曰く、卷頭三味得眞傳、澹彩濃描總自然、一旦點開雙法眼、頓成天下畫中僊、（題住吸仕心齋永眞）文會雜記に曰へらく、「永眞ハ末ノ弟ナル故、夫程チクレテ、何卒早ク一流ヲ立タク、俄ニ自ヲ圍ヲ拔ントシタル故、タトヘバ、官女ノ面ノ彩色、生エンジニヲ仕立ルハ面白カラズトテ、黄土ノグニテ仕立タル故、替リタル繪ニナリテ、後ハ見ラレヌヤウニナリタルト也、」昌運筆記又曰へらく、「狩野永眞は、兄探幽氣に入らぬ畫を書候折見廻候得者、永眞取納、畫を見せざる由、或時御老中樣より兄弟三人御呼、繪被仰付候、三通り之硯、繪道具等、御小性衆持出置候處に、探幽より永眞へ、名人共の畫を書を見をれと申由、淺草觀音堂の天人并に龍の畫を安信書を見られ、日本の繪にて、ケ樣の座敷などをかく物にては無之由、探幽叱られ候由、三人の内にて、永眞は餘程劣候故、嫡家の養子に遣し、飯は可喰と、養子に遣候由、相撲に譬へ候て、一兩度も勝候程にて有之由、三段計も違候歟の由、京都寺方には、古法眼、永德、探幽、主馬等書候座之間、屏風等有之候、それは〳〵勝れたるもの、安信が畫き候も有之、是も餘り劣らぬ物にて候由、魏記にも「永信ハ下手ノ樣ニ云ヘドモ、左ニアラズ、出來物ニナリテハ、及バザル處アリ、是ハ探幽カ、主馬カ、繪ノ筆力ヲ見テ、迚モ及マジト思タルガ、己ガ一家一分ノ風ヲ書出シテ、形ハ少モニヌモノ也、是永信ガ器量ナリ、」（享保十三年五月四日の條）又「御挂物ドモノ虫拂ニテ數十幅拜見ス、（中略）永眞ハ兄ヲマネテハ及バザルコトヲ知リテ、己レヲ書タルモノナリ」（享保十六年六月廿五日の條）など曰へり、畫風略探幽に似て筆致多少趣を異にせりと雖も、手腕稍及ばずとは蓋し公評なるべし、遺作流傳少からず、古畫備考には隱元像及閔子騫の縮圖を載せたり、

右京時信

時信は寛永十九年六月十三日江戸に生る、（會心齋筆記、古畫備考、邦信書上系圖等）通稱源四郎、（永德先祖書等に依る、古畫備考、邦信書上系圖、會心齋筆記等は四郎大郎と爲せり）後右京（永德先祖書は右京進に作る）と改む、永德先祖書に曰く、時信儀、寛文（延寶の誤なること朱印に照して明なり）三癸卯年六月、日不知、父安信禁裡御造營御畫御用被仰付候に付、從部屋住父安信同樣、上京御畫御用可相勤旨被仰付、父安信與同樣に上京仕、御畫御用相勤申候、（狩野忠信職務覺書、「寛二巳、從江戸京都迄可出之、是者禁中御作事付而、繪師右京進儀時、被下之者也、延寶三年六月九日、傳馬宿中」）年月日不知、御本丸御座敷向御繪御用被仰付、父安信同樣に相勤申候、延寶六戊午年十月五日、部屋住之内病死仕候、年三十七、同寺に（谷中天王寺、邦信書上系圖、會心齋筆記は池上本門寺とす）葬、法名智法院日眞、（會心齋筆記、邦信書上系圖、古畫備考略）

清涼殿御伺之間下段八畳　同御手水之間花鳥
同鬼之間花鳥　常之御殿御剱置間花鳥

同夜御殿次第 源氏物語

同御三間下段 龍田

小御所上段 朝覲行幸

女御御殿上段北之間 水鳥

若宮御殿上段 競馬、御棚、四枝野鹿

清涼殿巽ノ方御杉戸 南林和靖、北納曾利

同折廻御杉戸 東陵王、西西王母

常御殿上段乾御杉戸 東山谷、北岩鹿

同御三ノ間下段長御杉戸 東布袋、西鶴鶴琴風

御學問所上段長御杉戸 南李白、北鹿水鳥

同中段御杉戸 西鶴亀て独打拂ふ、東張瓦

貞享四年の武鑑に「右京時信（中院ヵ）」と記せり。その畫印尚存す。（狩野忠信職）時信二子、一女あり。長子は早世し、（永雄先祖書）次子主信祖父を承けて家を嗣ぎ、女子（系圖一本主信の姉とす）は探雪守定に嫁せり。（古齒備考曰、「早世」）

水叔主信

主信通稱は七三郎、（會心齋筆記は四郎次郎とす、又古齒備考增補に幼名敏信又明信とあり）瑞翅齋（狩野忠信職系圖）澹然居士（古齒備考）永叔と號す。延寶三年四月十三日江戸に生る。（會心齋筆記）永德先祖書に曰く、「天和三癸亥年、月日不知、常憲院樣ゟ御目見仕、御畫御用相勤申候。貞享二乙丑年九月四日、祖父永眞安信病死仕、嫡孫承祖ニ而祖父跡式無相違被下置候。寶永六乙丑年十二月十六日、禁裡御繪御用被仰付、爲御褒美金三枚頂戴仕候。正德辛卯年月日不知、朝鮮國王ゟ被遣候御屏風御畫（伶人唐樂、和樂一雙、蹴鞠戸之波一雙、備考）御用相勤、爲御褒美銀拾枚頂戴仕候。享保元丙申年七月、日不知、有德院樣於御前ニ御畫御用被仰付、思召ヲ以、御帷子貳ッ、御單物一ッ爲御褒美頂戴仕候。同乙酉年二月廿三日法眼ニ被仰付。（古齒備考には「叔大願繪注眼」とあり、又會心齋筆記には「同年朝鮮人來朝ニ付右御畫御用相勤申候」とあり同日法橋に叙し、又法眼に叙せし口宣案、狩野忠信所藏に存す）年月日不知、御本丸、西丸御殿向御畫之間御畫御用被仰付相勤申候。（享保四年朝鮮屏風、鶴虎一雙、鶴谷敦盛、むしろ高松一雙、近江八景一雙を畫けり、備考）同九甲辰年六月七日病死仕候。年五十。池上本門寺ニ葬。法名松岸院日長。」（會心齋筆記、古齒備考略同じ）二子憲信、英信及一女（女子は狩野忠信譜系圖のみに出づ）あり。主信が寶永六年禁裏の障壁に畫きたるもの左の如し。（狩高仙洞院御所御繪樣附）

紫宸殿長角廊下取付一間ノ御杉戸二枚折 東鳳凰、西鳳凰

清涼殿御帳之間 孔雀、惣金

同御上殿 曲水、惣金

同御後間 琴碁書畫、惣金

小御所上段乾御杉戸 東羅武、西蓬萊

同西間御杉戸 北白鷺、南鶴亀陽

同下段折廻西ノ方御杉戸 東梁、西蘇香

同御廊下取付御杉戸 北紅葉八ッ鳥、南荘子

女御御殿下段巽御杉戸 東嵯ニ見、西孟宗

同北縁座敷西御杉戸 東牡丹ニ鶴、西唐松ニいんこ

姫宮御殿南縁西方御杉戸 東梅ニ鶯、西うづら

新院御所御書院坤御杉戸 東武者繪、西花鳥

同御次御杉戸 西松鶴、東仙人

同廣御所乾御杉戸 南紅葉鹿、北熊笹

同廊下御杉戸 南雪木ニ山鳥、北竹

同東庇長角間牢杉戸貳枚折 南鶴、北牡丹

小御所御中段 大禹戒酒防微

常御殿夜御殿 吉野、雲龍砂子

長橋車寄東一ノ間御床アリ、牡丹蝶、惣金

同二ノ間水杜若繪、同
同三ノ間秋野小鳥、同
御詰番所一ノ間近江八景、雲霞砂子
仙洞御所弘御所上段錦花鳥、惣金
同中段右同断、同
同下段松紅葉、同
同御後襖、同
同弘御所御縁座敷北ノ方杉戸二間四枚折南八仙人、北蘆鷺
同所東折廻杉戸一間二枚折四蘆鷺、東賢聖
同所北側御縁座敷杉戸一間二枚折東李白、西牡丹
同小御所上段幽水、雲霞砂子
同所南御縁座敷巽角杉戸一間半二枚折西清少納言、蘆鷺、東鳥居鷺
女院御所小御所ノ前御鏡臺正面松、切戸口竹

この禁裏御絵御用の爲永叔、永眞、探信、洞春、柳雪等が各〻門人を率ゐて上京し、宮殿障壁の彩繪に從事するや、同年九月六日特に仙洞御所に於いて御繪仰せ付けられ、永叔は六枚屏風一雙、柏使、嵯山、四景、水、彩色、淡引二枚屏風押物四枚、八景、二景、宛、繪、及三幅對壹通、押物五枚、右名印、仰付候を畫き、更に同月十八日獨り院御所に召されて、六枚屏風一雙、象、岸、水、貳枚屏風一雙、柳、燕、松、鷺、蘆、水、鶴、雪、檜、鳥、三幅對左鶴、中東、境、右流、及横物二山、水、梅、を畫けり、同書、嚴島繪馬鑑に「正德癸巳九月穀旦」

永眞探信

の記ある永叔が田植圖扁額あり、永叔の畫印は尚存す、詩野忠信印、元祿十七年の武鑑には「二百石二十人フチ」永叔主信、寶永五年の武鑑には「永叔明信」とあり、

探信幼名四郎次郎、年信、系圖一本探信、又力信に作る、又祐盛と云ひ、古畫備考、後憲信に改め、永眞と號す、元祿五年十一月二日江戸に生る、會心齋筆記、備考、永德先祖書に曰く、

「享保九甲辰年九月三日、父永叔跡式無相違被下置候旨、於躑躅之間、松平左近將監殿被仰渡候、同年十一月十五日、有德院樣ゟ御目見仕、會心齋筆記、日記、家書、御通、御目見、自畫卷物獻上仕候、同十六辛亥年九月十七日病死仕候、年四十、同寺ニ葬、法名得解院日經、」會心齋筆記、略同、畫事備考に曰く、「畫風父に似たり、享保十六年下野國日光山東照權現宮の御社御營作に付ていたり、四月より相勤、九月に仕舞、同月四日に江戸へ發足、同九日に著、道中より病氣付、九月十七日に、生年三十七歲にて卒す、」曾て享保四年朝鮮屏風賀茂祭一雙を畫き、備考、寶永六年の禁裏御造營には、憲信も亦父に伴ひて彩繪に從事せり、その畫ける所左の如し、紫宸、仙洞院、御所、御繪、樣、附

清涼殿鬼間錦花鳥、惣金

一　同東廂南端巽角間半杉戸貳枚折南殿之、北許由

院御所御後繪竹梅雲、惣金
同攝家休息所南一間半貳枚折杉戸東鶴鶴、西松ニ鶴
同常御所北間、後、赤壁、霞、霞砂子、御棚戸、拾貳枚、李、鶴、高松、鶴、天王寺、巴れら、首、鶴、谷、鶴、一谷、扇、落、鶴、川、夜、打、みなのや、景、清、水、曾、根、舍、奈、須、與、市、越、中、前、司、橋、押、渡、時、宗、朝、比、奈、以上、拾貳、枚、何、茂、霞、霞砂子、線、地、泥、引、極、彩色
同御盃之間上段富士、霞、霞砂子、小壁張付共ニ
同下段松島、宮島、小壁張付、四隅座敷襖共ニ、霞、霞砂子
同南御縁座敷一間二枚折杉戸東蘆、西王昭君
同御學問所東御縁座敷一間二枚折杉戸北蘆紅葉、南舟鷺
同攝家衆休息所二ノ間四幅、霞、霞砂子
同中宮御盃間三間襖子、霞、霞砂子、御棚入枚、上、柏、村、雀、下、萩ニ月、泥引
同南御縁座敷西方二枚折杉戸、參、東、南、流、アシ、ヲイ、四、龍、門、鯉、伊、勢
仙洞御所ヨリ公卿之間ゟ之廊下御杉戸四龍、鯉、鶴、首、東、野、苔、書、繪

同折廻西ノ方間半杉戸貳枚折東端父、西孔明

常御殿夜御殿東二ノ間大井川遠江三般、砂子泥引

又父と共に、同年九月六日仙洞御所に召されて、御簾外に於いて、竪物、李白横物鳥及押物五枚山水、鶴、鶴、梅、菊子を畫けり。憲信の畫印尚存ず。狩野忠信その一

仙洞御所小御所御座之間西側一之間梅、雲箔砂子

女院御所御盃之間上段奈良八景、雲箔砂子

永羽貴信：子永羽貴信（會心齋筆記曰永信叔父）あり。先祖書に曰く、「病身に付家業相續難仕、寛政七乙卯年七月廿二日病死仕候」憲信の弟英信後を嗣ぐ。

貼紙英信　英信幼名源四郎（永德先祖書に曰、系圖一本、又知遠に作る）祐清と號す。享保二年五月十三日（墓誌九月二日とす）江戸に生る。（會心齋筆記）永德先祖書に曰く。

享保十乙巳年十月十六日　兄永眞惣信男子無御座候に付、弟之儀故、養子奉願候處、願之通養子被仰付候に付、同年十二月六日、大久保佐渡守殿於御宅に被仰渡候（墓誌に曰く、「十年悖廟患疽、法印幼侍床下」）。

同十一丙午年十二月十五日　有德院様御目見仕、部屋住に而御繪御用相勤申候。

同十六辛亥年九月十七日　養父永眞病死仕、同年十二月二日、養父永眞跡式無相違被下置候旨、於御踏之間に松平伊豆守殿被仰渡候。

同年十二月廿八日　家督御禮御目見仕、自畜宿物献上仕候。夫より御繪御用度々相勤申候。

同十九寅年月日不知　御鷹野、御猪狩御供度々被仰付、奥向に罷出相勤申候。

年月日不知　二之丸御殿向御書御用相勤申候。

延享三丙寅年十二月廿一日　法眼に被仰付候（墓誌に曰く、「叙法眼、稱大藏卿、且許乘輿、古畫備考に曰く、「叙法眼大藏卿、同日法橋に叙し又法眼に叙せし口宣案、及狩野祐清藤原英信法橋法眼成御官物之事（延享四年二月）の古文書、狩野忠信所藏に存す）。

同四卯年八月　朝鮮人來貢に付、國王より被遣候御屏風（墨繪龍虎一雙、清水石山之景一雙、美尾谷景清兜引、那須與市扇子的（古法眼ノ圖寫）一雙、備考）御繪相勤申候。

寶暦二壬午年六月三日　有德院様御畫像并御靈屋御廟向御繪御用相勤候に付、爲御褒美銀五拾枚被下置候旨、於焚火之間、宮内少輔殿被仰渡候（この事尚後に精し）。

同三甲申年　日光御宮并御靈屋惣御修復御繪御用相勤候に付、於御同席に宮内少輔殿被仰渡、爲御褒美銀貳拾枚、別段爲御褒美銀拾枚頂戴仕候。

同六丙子年四月日不知　禁裏御進献御用御小屏風御畫御用相勤申候。

同九卯年三月廿九日　西丸奥御用被仰付候旨、水野壹岐守殿於御宅に被仰渡候。

年月日不知　浚明院様御畫御稽古御定日相極、其節々罷出、御畫御用相勤申候。

寶暦十辰年　御本丸より御移徙以後共、御稽古御定日西丸に被爲入候通相勤申候。

同十一辛巳年八月日不知　惇信院様御畫像并御靈屋御廟向御繪御用相勤候に付、爲御褒美銀五拾枚被下置候に付、於焚火之間に攝津守殿被仰渡候。

同十二壬午年二月十六日　法印に被仰付候（口宣案及狩野祐清様法印成御官物銀包上注文（同年三月）狩野忠信所藏に存す。墓誌に曰く、「叙法印、猶稱

大藏卿、且命廟法眼官醫之班、明年元日奉劍馬、賜御暇、領時服、五節朔望、亦列其班。

同十三癸未年六月廿一日　病死仕候。年四十七。同寺ニ葬。法名如心院日淨（會心齋筆記に曰く「廿一日夜四時死御屋」）

明和元年朝鮮國王に贈る屏風（繪板、倭歌、源氏、紀三井寺之景一雙、鯨濤一雙）及新屏風（眞山水、繪丹人狩）は、殁する前畫きけむこと、これに關する舊記（朝鮮御用御譯風御入用等書付に祐清の名を錄せるしの狩野忠信藏）に曰く「廿一日夜四時死御屋」

桂壁高泉、克於始終、丹青之妙、稱豪稱雄、縑素之粲、謂達謂通、五彩信手、六法得躬、十世才秀、三朝名隆、碑存不朽、銘傳無窮、孝子慟哭、號泣高穹。（寶曆十三甲申年正月廿八日　日光御供ニ罷越候ニ付、水野出羽守殿御書附ヲ以被仰渡、銀三拾枚頂戴仕候。尤御傳馬幷御扶持方頂戴仕候。）

宗秀明信（早逝、享保十月三日、國子祭酒朝散大夫林鳳子志父跡）

宗泉良信

歴代

享保二十年の武鑑に「日石十五人フチ、中ばしおが丁、父永眞」祐清英信」とあり。その畫印尚存ず（狩野忠信藏）高家畠山下總守義里の女を娶り、五男三女（嘉時三男）

二女とす

を擧ぐ。高信、明信、女子二人、舍人、直次郎（早世）秀之助（早世）及女子（早世）これなり。高信長を以て家を嗣ぐ。明信は宗秀と號す。永德先祖書に曰く「明信儀永德高信厄介ニ仕差置候所、與詰被仰付、相勤申候。寛政九巳丁年十一月五日病死仕（古畫備考曰「五十四」）」當時家筋無御座候」。明信の子宗泉良信あり。文化十年の武鑑に「父宗秀、祐清同居」宗泉良信、天保七年の武鑑に同上「宗泉晏川」とある外、その傳記を明にせず。明信の妹は名を屋代と云ふ。先祖書に曰く「御城ゟ御奉公仕、天明六丙午年八月九日病死仕候」古畫備考に曰く「繪を善くす。御奥へ御奉公いたし、浚廟はもと此女より初め御稽古被遊候由といふ。」その妹は井戸市十郎に嫁せり。古畫備考に「狩野氏女屋さ筆」の落款を錄して、「中橋の女にや可尋」と記せるもの、或はこれか。舍人は先祖書に「右衛門督殿小十人見習相勤」とあり。

永德高信

高信幼名四郎次郎、成文齋（古畫備考）永德と號す。元文五年九月十九日江戸に生る。（會心齋筆記）先祖書に曰く、

寶曆六丙子年三月朔日　部屋住ニ而惇信院樣ゟ御目見仕候。

同九乙卯年三月廿九日　西丸御用被仰付候旨、水野壹岐守殿於御宅ニ被仰渡、即日誓紙被仰付候。

年月日不知　浚明院樣御書御稽古御定日相極、父祐清同樣罷出、御用向相勤申候。御本丸御移徙後も引續御用相勤申候。

同十三癸未年九月四日　父祐清跡式無相違被下置候旨、於御蹴鞠之間ニ秋元但馬守殿被仰渡候。（寶曆十三年六月廿二日、昨夜四時祐清病死、跡目願左之通、一高百石、拾五人扶持、狩野祐清、未四拾七歳、實子惣領狩野永德、右祐清儀病氣養生不相叶、昨夜四時死去仕候、跡式之義、伴永德ゟ被下置候樣奉願候旨申置候、以上、未六月廿二日、狩野榮川、會心齋筆記）

同年月日不知　家督御禮、浚明院樣ゟ御目見仕、自畫之卷物獻上仕候。

（明和元年　朝鮮屏風川狩、麝狩一雙を畫きしこと、朝鮮御用御屏風御入用等書付に見ゆ）

安永二癸巳年十月廿五日　奥御繪御用出精相勤候ニ付、格別之以思召、金五拾兩年々被下置候旨、因幡守殿被仰渡候。

同年十一月十七日　法眼ニ被仰付候旨、御祐筆部屋於椽側ニ、松平右近將監殿被仰渡候（口宣案は法橋、法眼共に廿五日付「狩野永德樣法橋法眼成御官物銀注文」安永三年二月付、共に狩野忠信所藏に存す）。

同年四月　日光御供仕候。
同年十一月十五日　浚明院様御四十御賀御祝儀ニ付、献上御品之内、御小道具五品、於奥ニ拜領仕候。
同年十二月十四日　御小性頭取水野備前守殿被達、浚明院御筆山水之御書、於奥ニ拜領仕候、今ニ所持仕候(狩野忠信藏古文書に曰く「安永五年十二月十四日、御本丸奥於御廣座敷、家治公御筆之御書被下之(中略)紙地横物之御墨繪(破墨)山水之御筆也」一幅同家に現存す)。
同七戌年七月十日　御休息御次之間御張付御繪御用相勤候ニ付、爲御褒美、於表新部屋ニ、酒井石見守殿被仰渡、銀拾五枚頂戴仕候。
同九庚子年　御轉任爲御祝儀三幅對自書献上仕候様被仰付、相認奉献上候。則右爲御祝儀白銀頂戴仕候。
天明五乙巳年七月五日　御目見以上ニ被仰付、御同朋頭格被仰付候旨、御祐筆部屋於椽側ニ、御老中御列座、若年寄衆侍座、田沼主殿頭殿被仰渡候。
同六午年二月廿五日　浚明院様御五十御賀御祝儀ニ付、三幅對自書献上仕、則御賀御祝儀相濟候以後(會心齋筆記「御用掛御側衆御通ニ而)御綿拜領仕、且又格別之以思召、御紋付御小柄於奥ニ拜領仕、今ニ所持仕候。文恭院様西丸ニ御移徙後も、引續奥御用相勤申候。其外(會心齋筆記曰「其外於大廣間御轉任御規式、於御白書院餘興、於御座之間鶴庖丁、井奥御能等之節ニ者、見物被仰付、御廣野先、吹上御庭、都而御延氣御成之節、御供相勤申候。
年月日不知　上野御本坊御書御用相勤申候。
寛政六甲寅年十二月廿三日(會心齋筆記は廿九日)　病死仕候。年五十六。同寺ニ葬。法名聰受院日意。

天明七年の武鑑には「日石十五人フチ、中ばしお が丁、父貼清御同朋頭格」永德法眼高信とあり。その畫印尚存ず。(狩野忠信藏)

小普請組森川織部支配井戸伊織の女を娶り、一子泰信及二女(長は御小納戸瀬戸瀬太郎に嫁し、次女は早世せり)を生めり。

永賢泰信

泰信幼名源四郎又四郎次郎、又初め利信。(或曰明信)寛政九年四月九日(古書備考)泰信に改む。牧羊齋(系圖一本)永賢と號す。明和四年六月七日江戸に生る。(會心齋筆記)

安永十辛丑年三月廿六日　奥御用ニ罷出候様、父永德ゟ被仰渡、則部屋住ニ而奥御用相勤罷在。
同年四月廿八日　浚明院様御表ゟ出御之節、初而御目見仕候。
天明五巳年七月五日　父永德御同朋頭格ニ被仰付。
同六丙午年　御五十御賀御祝儀ニ付、父永德同様ニ三幅對自書献上仕、拜領物茂父同様ニ御綿、御紋付御小柄、於奥ニ拜領仕、今ニ所持仕候。文恭院様西丸ゟ被爲入候節ゟ西丸ゟ奥御用ニ罷出、御本丸ゟ御移徙後茂引續奥御用相勤、其外御見物事、御城内外御供等茂、父永德同様ニ罷出申候。
寛政七乙卯年三月四日　父永德跡式無相違被下置候旨、於菊之間ニ安藤對馬守殿被仰渡、同日御祐筆部屋於御椽側ニ御同朋格被仰付候段、御同人被仰渡候。同五日小金御鹿狩御供相勤申候。

同八丙辰年四月九日　西丸御修覆ニ付、張付御絵御請可仕様、堀田摂津守殿被仰渡候。右御修覆御用相勤候ニ付、御祐筆部屋於椽側ニ銀拾枚為御褒美被下置候旨、采女正殿被仰渡候。

同年六月　上野御宮御修覆御用相勤候ニ付、御祐筆部屋於椽側ニ松平伊豆守殿被仰渡、銀拾五枚為御褒美頂戴仕候。

同十午年六月廿九日　淑姫君様御入輿御用御屏風壁襖御絵相認申候。

寶政十戊午年九月十一日　病死仕候。年三十二。同寺ニ葬。法名秋巧院日徹。(會心齋筆記稍畧)。

泰信御目見醫師山田宗益元定の女を娶り、二女(共に早世)を生めり。男子なきを以て探朴守邦の次子邦信を養ひて嗣と爲す。

邦信幼名萬吉(銀冶橋家弘化三年書上には万五郎)探秀と號し、(永錦先祖書、會心齋筆記)後祐清と號す。天明六年十二月十三日江戸に生る。(會心齋筆記、同書載する所の中橋家の由緒書は、寛政十一年十二月貼清書上の寫しなり、名書條等引く所の邦信書上と同じかるべし)に曰く、「私儀(邦信なづから言ふ)養父永賢實子無御座候ニ付奉願、寛政十戊午年十二月廿七日願之通翌養子被仰付、永德先祖書に曰く。

寛政十戊午年十二月廿七日　養父永賢跡式無相違被下置候旨、於御腰掛之間ニ、御老中列座、太田備中守殿被仰渡、同時日御祐筆部屋於椽側ニ御同朋格被仰付候旨、御老中太田備中守殿被仰渡。

同十一未年四月日不知　御白書院御張付御絵、狩野養川院ゟ被仰付、右手傳被仰付。

同年十二月廿三日　御祐筆部屋於椽側、京極備前守殿被仰渡、白銀三枚頂戴仕候。

享和元酉年四月日不知　上野中堂裏之間御絵御絵御用相勤候ニ付、於御腰掛之間ニ、白銀五枚頂戴仕候。

文化二丑年月日不知　虎之間、殿上之間御絵御絵御用被仰付相勤申候。右ニ付、同年十二月廿八日於御腰掛之間ニ白銀拾枚頂戴仕候。

同四卯年五月六日　朝鮮國王ゟ被遣候御屏風御絵御用相勤申候。

同六巳年四月日不知　根岸御隠殿御修覆ニ付、御絵御用被仰付相勤申候。右ニ付、於御同席ニ白銀五枚頂戴仕候。

同十二寅年十二月廿六日　上野御本坊御装束所御絵御用相勤候ニ付、於御同席ニ銀拾枚頂戴仕候。

文政五午年八月日不知　直七郎殿御引移御用御掛物相認候ニ付、於御腰掛之間ニ銀五枚頂戴仕候。

同年九月　德之助殿御引移御用御掛物相認候ニ付、右於御同所ニ銀三枚頂戴仕候。

同六未年十二月廿七日　上野御宮御絵御用相勤候ニ付、右於御同所ニ銀貳拾枚頂戴仕候。

同十一子年九月　周丸殿御引移御掛物御絵相認候ニ付、右於御同所ニ銀五枚頂戴仕候。

同十二丑年十一月七日　増上寺台德院様御靈屋向御修覆ニ付、御絵御用相勤候ニ付、右於御同席ニ銀拾枚頂戴仕候。

天保二卯年十二月十五日　於御祐筆部屋椽側ニ大久保加賀守殿被仰渡、家筋ニ茂有之、家業出精致候ニ付、法眼ニ被仰付候。(同日法橋法眼の口宣案、狩野忠信これを藏せり)。

同六未年五月四日　於右御同席ニ御同人被仰渡、御同朋頭格被仰付。

同九戊年十二月廿六日　禁裡御進献御屏風(狩野忠信殿文書に「大宮ゟ被進候御屏風」とあり)御絵相認候ニ付、於右御同席ニ太田備後守殿被仰渡、金貳枚頂戴仕候。別段爲御手當、金拾兩頂戴仕候。

同年十月十六日　西丸御普請ニ付、御舞臺御羽目之絵被仰付相勤候ニ付、銀拾枚、別段銀拾枚頂戴仕候。

同年十二月廿六日　西丸表之間御絵新規認候ニ付、於焚火之間ニ林肥後守殿被仰渡、金貳枚頂戴仕候。右同断御用相勤候ニ付、西丸於御同席ニ水野壹岐守殿被仰渡、金貳枚頂戴仕候。

同十一庚子年二月廿日　病死仕候。年五十四。同寺ニ葬。法名孝行院殿大藏卿祐清法眼牧羊齋邦信日義大居士。

邦信町醫師伊藤元意の女を娶り、一女、一子を擧げしが、共に早世せしを以て、伊川院六男立信を養ひて嗣とす。文化十年の武鑑には「百石十五人フチ、御同朋頭格、父永賢、中ばし御かゝり」祐清邦信、天保七年の武鑑にも「同上」祐清法眼邦信とあり。その肖像（永徳畫）尚家に存ず。（狩野忠信殿）

立信幼名熊五郎、晴雪と稱し、後晴雪齋永徳と號す。（古事備考天保十五年十二月の事とす、後絵師を嘉に改む）文化十一年十二月十五日生る。永徳先祖書（弘化四年十一月書上）に曰く。

天保六乙未年十二月十四日　堀大和守殿御宅ニ而、養父祐清願之通、舞養子被仰付、養子ニ罷成候。

同七申年六月朔日　文恭院様ゟ御目見仕。

同九戊年十二月廿三日　西丸御表御普請御絵御用相勤候ニ付、同十亥年十二月廿六日爲御褒美銀五拾枚被下置候旨、於焚火之間、林肥後守殿被仰渡、頂戴仕。西丸大奥御對面所御杉戸壹口御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美銀七枚被下置旨、於焚火之間ニ林肥後守殿被仰渡、頂戴仕。右同断御用相勤候ニ付、銀七枚西丸ゟ被下置旨、西丸於御同席ニ水野壹岐守殿被仰渡、頂戴仕。

同九戊年十一月十六日　御本丸奥御用御聞御用、晴川院を以被仰付、爲御褒美、同十二月廿六日御文庫壹ヶ頂戴仕候。

同拾一子年六月四日　養父祐清跡式無相違被下置旨、於菊之間、土井大炊頭殿被仰渡、同日於御祐筆部屋椽側ニ、御同人被仰渡、御同朋格被仰付。

同年十一月廿七日　於林肥後守殿御宅ニ御本丸、西丸奥御用被仰付旨被仰渡候。

同十二丑年十二月廿六日　文恭院様御在世中御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美銀拾五枚被下置旨、於御祐筆部屋椽側ニ、真田信濃守殿被仰渡、頂戴仕。

同廿八日　松之御殿御模様替御修復御絵用相勤候ニ付、爲御褒美銀拾枚被下置旨、於御同席ニ水野越前守殿被仰渡、頂戴仕。右同断御用相勤候ニ付、銀拾五枚被下置旨、御座之間於溜御廊下ニ、白須甲斐守殿御通詞。

同月廿九日　西丸奥御用被仰付旨、西丸於時計之間ニ本多越中守殿被仰渡。

同十三寅年三月七日　有章院様、惇信院様御靈屋御廟御修復御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美銀七枚被下置候旨、於時計間ニ堀田備中守殿被仰渡、頂戴仕候。

弘化元辰年十二月廿七日　永徳ニ改名仕候。

同九戌年十二月廿六日　禁裡御進献御屏風(狩野忠信殿文書に「大宮ゟ被進候御屏風」とあり)御絵相認候ニ付、於右御同席ニ太田備後守殿被仰渡、金貳枚頂戴仕候。別段爲御手當、金拾兩頂戴仕候。

同年十月十六日　西九御普請ニ付、御舞臺御羽目之絵被仰付相勤候ニ付、銀拾枚、別段銀拾枚頂戴仕候。

同年十二月廿六日　西九表之間御絵新規認候ニ付、於焚火之間ニ林肥後守殿被仰渡、金貳枚頂戴仕候。右同断御用相勤候ニ付、西九於御同席ニ水野豊岐守殿被仰渡、金貳枚頂戴仕候。

同十一庚子年二月廿日　病死仕候。年五十四。同寺ニ葬。法名孝行院殿大蔵卿祐清法眼牧羊斎邦信日義大居士。

邦信町醫師伊藤元意の女を娶り、一女、一子を擧げしが、共に早世せしを以て、伊川院六男立信を養ひて嗣とす。文化十年の武鑑には「日石十五人フチ御」

（同朋頭格、父永賢、中ばしおがわ丁）祐清邦信、天保七年の武鑑にも「同上」祐清法眼邦信とあり。その肖像（永徳筆）狩野忠信殿尚家に存ず。

立信幼名熊五郎、晴雪と稱し、後晴雪齋永徳と號す。（古事類考天保十五年十二月の事とす、後論ずる所に改む）文化十一年十二月十五日生る。永徳先祖書（弘化四年十一月奇上）に曰く。

永徳立信

天保六乙未年十二月十四日　堀大和守殿御宅ニ而、養父祐清願之通、養子被仰付、養子ニ罷成候。

同七申年六月朔日　文恭院様ゟ御目見仕。

同九戌年十二月廿三日　西九御表御普請御絵御用相勤候ニ付、同十亥年十二月廿六日爲御褒美銀五拾枚被下置候旨、於焚火之間、林肥後守殿被仰渡頂戴仕。西九大奥御對面所御杉戸豊口御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美銀七枚被下置旨、於焚火之間ニ林肥後守殿被仰渡、頂戴仕。右同断御用相勤候ニ付、銀七枚西九ゟ被下置旨、西九於御同席ニ水野豊岐守殿被仰渡頂戴仕。

同九戌年十一月十六日　御本丸奥御用御聞御用、晴川院を以被仰付、爲御褒美、同十二月廿六日御文庫豊ゟ頂戴仕候。

同拾一子年六月四日　養父祐清跡式無相違被下置旨、於菊之間、土井大炊頭殿被仰渡、同日於御祐筆部屋椽側ニ、御同人被仰渡、御同朋格被仰付。

同年十一月廿七日　於林肥後守殿御宅ニ御本丸、西九奥御用被仰付旨被仰渡候。

同十二丑年十二月廿六日　文恭院様御在世中御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美銀拾五枚被下置旨、於御祐筆部屋椽側ニ、真田信濃守殿被仰渡頂戴仕。

同廿八日　松之御殿御模様替御修覆御絵用相勤候ニ付、爲御褒美銀拾枚被下置旨、於御同席ニ水野越前守殿被仰渡頂戴仕。右同断御用相勤候ニ付、銀拾五枚被下置旨、御座之間於溜御廊下ニ、白須甲斐守殿御通同。

同月廿九日　西九奥御用被仰付旨、西九於時計之間ニ本多越中守殿被仰渡。

同十三寅年三月七日　有章院様、惇信院様御靈屋御廟御修覆御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美銀七枚被下置候旨、於時計間ニ堀田備中守殿被仰渡頂戴仕候。

弘化元辰年十二月廿七日　永徳ニ改名仕候。

同二巳年三月十六日　御本丸御普請御繪御用相勤候ニ付、爲御褒美金三枚、別段金貳枚、被下置候旨、於時計間ニ脊山下野守殿被仰渡頂戴仕。

同年五月四日　御本丸御表御普請御繪御用相勤候ニ付、爲御褒美金貳枚、別段壹枚被下置之旨、於御同席、戸田山城守殿被仰渡頂戴仕候。

嘉永元戊申年十月廿六日　御祐筆部屋縁側ニおゐて、牧野備前守殿被仰渡、御醫師並被仰付候。

安政四年十二月十六日法橋に敍し、又法眼に敍せられ、（口宣案、狩野忠信の家に在り、翌五年二月廿日、狩野忠信法橋、法眼成御官位之事」の文書亦存せり、口宣案にし「永悳」とあり）第二回内國繪畫共進會出品人略譜に曰く、「維新以降師範學校、商務局、博物局等ノ雇ヲ勤メ、又屢外務省御用ヲ勤ム。明治十五年内國繪畫共進會審査ヲ命セラル」。同十七年の第二回繪畫共進會にも、亦その審査官たり。（會事務報告）明治廿三年十月十一日帝室技藝員仰せ付けらる。同年十二月病に罹り、翌廿四年一月廿九日享年七十八にして歿す。池上本門寺に葬り、法名を永悳院殿晴雪齋立信日善大居士と云ふ。その嗣祐正忠信（幼名力三郎、實は川合貼右衛門三男、養子となる、元治元年十二月四日生る）畫を業とせり。（永悳以來牛込天神町八十八番地に住す）

忠信

木挽町家（家之紋丸之内三ツ矢（矢羽に根笹あり）、以て他家には分つ）、替紋三結銀、國創花菱、寄之紋丸之内三ツ矢）は永德の次子孝信を祖とす。孝信通稱は與次、又右近と云ふ。常信、周信に對して世に古右近と稱す。會心齋筆記（寛政十年養川院收めたり）に曰く、「元龜二辛未年十一月廿五日、山城國ニ而出生仕候。年月日相知不申候、土佐家宗族無之ニ付、禁中繪所を預り申候。依而被任右近將監、禁裏仙洞之繪事を相勤申候。元和四戊午年八月晦日病死仕候。歳四十八。法名圓大院孝信日養。京都妙覺寺ニ葬申候」。（若水集、畫工傳覽等四十七歳とし、狩野中興系圖四十五歳とし、畫工譜略四十四歳とす）西洞院時慶卿記（文錄二年七月廿六日の條）に曰く、「繪書與次所へ、横根藥ヲ持セヲ遣候」。新編鎌倉誌には、鶴岡八幡宮に孝信の畫ける歌仙の額ある由見えたり。畫工便覽に曰く、「畫最有士氣、然丹青不多」。本朝畫史に曰く、「永德沒、光信死後、禁裏、仙洞、營中、孝信皆勤繪事、其技雖不及父兄、然亦能守規矩、而有雅趣、今洛泉涌寺賢聖、南禪寺法堂天井蟠龍、乃孝信之作也」。古畫備考にはその款印（畫形「孝文」朱文）を載せたり。孝信佐々成政の女を娶り、探幽、尚信、安信（尚信の養子爲る、前出）及三女（二女は探幽の妻、尚信の妹、長は素川の妻たり、安信の妹は名を鶴と云ひ、神足善右衛門入道常菴の妻たり）を生む。探幽別に家を成せるを以て、次子尚信後を嗣げり。

主馬尚信

尚信幼名三位、通稱主馬（或曰主馬助）。初め一信（土佐狩野兩家系圖曰、「一信家信」）と云へり。剃髮して（武藝圖解成）自適齋と號す。會心齋筆記に曰く、「慶長十二丁未年十月六日、山城國ニ而出生仕候。年月日相知不申候、十七歳之時、大猷院樣御上洛之節、於京都御目見仕候。直ニ御畫御用被仰付相勤申候。寛永七庚午年江戸ヘ（寛永九年江戸城成）被召寄、月日相知不申候、台德院樣ヘ御目見仕候。直ニ御畫御用相勤申候。同年月日相知不申候、御繪師被仰付、竹川町ニ而屋鋪拜領仕候。（延寶九年江戸屋敷に「一水慶長八年生、とあり」）慶安三庚寅年四月七日病死仕候。歳四十四。法名圓心院實諦日德。池上本門寺ニ葬申候」。（土佐狩野兩家系圖に「一水慶長八年生、慶安二年三月四日卒、年四十七とあり」）尚信眞說の女を娶りて常信を生む。而して尚信實は失踪して終る所を知らざるなり。慶安三年四月七日はその家を出でし日なり。或は支那に行かむと

せしにか、又は平生釣魚を好みしが故に溺死せしか、終に明ならず。（狩野探幽）その肖像（元探幽の画けるなり融川の寫しいしの）は中橋家に存ぜり。古畫備考收むる所の大阪城案内之記（△印名物、御城繪元和六申年二之丸、寛永元子年御本丸）に見えたる尙信の所作左の如し。

雁之間蘆雁之繪
雪之間、溜之間とも云、松梅雪之繪
大廣間二三之間、下段共松梅孔雀
御上段松竹茨之繪、御帳臺桃之繪
同御縁側杉戸麝香猫之繪
御成廊下牡丹唐之小鳥之繪
御白書院下段、次之間松櫻槇椿松柳之繪
△鳴鳩、御上段松椿山鳩、御床之内雪松梅鳩
御連歌之間牡丹
御床之間、奥州武陵之松寫之由
御祐筆部屋竹茨之繪

又同書に依るに、尙信の障壁畫左の如し。

泉涌寺景福殿襖畫
同將軍家御位牌所南之畫
西本願寺御對面所松牡丹山鳥、松ニ鳩、天井影物右ノ方鳩、左ノ方松鶴、内ノ鶴蘆
同上段之間唐土人物
（現今同寺の傳說には尙信の畫と稱するものなし）
花頂山智恩山院大方丈襖之間居直リン畫アリ
同二之間墨畫

この餘二條離宮大廣間の杉戸、（ねれ鼠の杉戸と稱して名物あり）及桂離宮の竹林七賢圖等も亦尙信の筆と傳稱す。寛永十八年尙信若一王子權現緣起三卷を畫く。（飼道春潤、飼狩御貼筆鈴木權兵衛筆、紙本著色泥引、古畫備考曰、「畫之精妙世の知る所、先世みな感伏す」跋の末に曰く、「寛永十八年七月十七日兵部卿法印道春敬書」）寛永二十年朝鮮使朴安期が尙信の畫を見て贈れる詩は、「見狩野御畫、短律贈之、畫手日東妙、天機豈等生、西方達磨像、南極老人精、同月騎仙鶴、携兒士部行、華堂對盤礴、不覺到深更、突未孟耿、蟠山蹲」載せて皇朝名畫拾彙に在り。蓋し朴安期の爲に達磨、壽老人、李白等を畫きしならむ。正保三年尙信が京都に觀

御時計之間菊石竹之繪
燒火之間蘆鶴之繪
御對面所牡丹之繪、三之間御襖水くゝりの梅
御上段山茶花鶴之繪、東方杉戸鳴鶉鳴鶴
右柳之御廊下
松之御廊下松小鳥
櫻楓之間しゆろ之繪
檜木御廊下檜木棋木之繪
玄猪之間惣体唐之木繪
伺公之間柳鷺蘆鴨
六番御多門之内

（現今智恩院にては鶴之間、松之間、今上御幸之間、親王得度之間を尙信の畫と稱す）
金地院鶴之間
同上段之間松梅
（現今上段之間を探幽の畫と稱す）
黑谷羅漢之圖佛間

光せしことは、古畫備考收むる所の大德寺宗因がト隱の詩及序（洛陽狩野氏自藏、頃侯大相國鈞命、寓東武、今茲正保三年之冬、銀光之大、枕予請立口號、（中略）近抑ト隱二守詩畫又各自藏、嘗有詩、卷下曰、雲祈生斷口、虛空、瓦象機、雖一字中、離却塵緣、無逗事、岩扉靜、壁間眠、鶴、同書卷中有）に依りて知らる。ト隱の號は果して用ゐしにや。

三曉菴談話に曰く、「主馬の畫、御書院に段々有之候得共、目利別而難及、どうやらはなれ候樣筆勢ニ而見分がたきよし申候得ば、尙信の繪、不出來は引やぶり捨候て、出來繪計世上へ被出候よし」。その用意頗る賞ずべし。畫風探幽と略同じと雖も、障壁の大作は技巧の健實寧ろ探幽に過ぎ、尋常挂幅の諸作は探幽よりも一層輭雅簡淨なりとす。されば三曉菴も「探幽などゝ違ひ、別而筆ずくなに畫候畫に而候」と曰ひ、畫乘要略には、「觀尙信金屏畫猛虎越懸泉圖、形似甚疎、然覺腥風颯々拂席而起、古人所謂求神韻於形似外者歟」、畫工便覽には「臻丹青妙、器趣活動而有士氣、頗似探幽風格」と評し、近衛豫樂院家凞公の如きは深く尙信を賞せり。槐記（享保十二年正月廿八日の條）に曰く、「イツモ云コト也、主馬ガ筆跡コソ古今ニ超絕シタル物ナレ。只畫ノ見事ト云コトニアラズ。筆意ヲ得タルコト、書ニ於テハ、中々尊圓、尊朝ナドノ場ニテハナシ。佐理、行成ナド幷ニ觀音ノ像アリ。コノ輪光ヲ書タル所、探幽ハ二筆ナリ。主馬ハ一筆ニアラズ。一筆ニシテ其初ルトコロヲシラズ。尤探幽ガフタ筆モ、其墨次目見ユル所ニアラズ。シカシ二筆ハ一筆ト見エ、主馬ハ一筆トシテ其始ル處、終ル處ヲ見ズ。コノ細工、凡夫ノ及ブ所ニ非ズ」。家凞公が新殿の違棚の上の袋戸四枚は、渡邊始興をして大德寺孤蓬菴の直入菴に在りし尙信の琴碁書畫を寫さしめられし（享保十二年四月九日の條）のみならず、その餘多く尙信の畫幅を鑒賞せられしこと、又同記に見えたり。文會雜記に曰く、「探幽、主馬、永眞兄弟三人、同ジク興意ト云人ノ門人ニヲ畫ヲ書タリ。探幽一番ニ圍ヲヌケヲ上手ニナリ、主馬ハ一風ヲ立テ、雪舟ヲ蹈ヘテ、一流ヲ書出シタリ」。畫事備考に曰く、「畫風の情、兄弟の隨一、古今の名畫といはむ」。その世に重ぜられしこと、寧ろ探幽に過ぎたるを知るべし。尙信をしてその壽若し長からしめば、探幽獨り盛名を擅にすることを得ざりしならむ。

狩野常信

常信幼名三位、（畫工總畧曰「又宮內」）通稱右近、中務卿法印、養朴又古川（古川屋）と號す。耕寬齋、靑白齋、紫薇翁、碧雲子、朴齋、弄毫軒、潛屋、篁渚散人等の別號あり。左にその傳記を掲ぐ。

寬永十三（丙子）年三月十三日　山城國ニ而出生仕候。
慶安三（庚寅）年四月七日　父狩野主馬病死仕、父遺跡相續仕候。
同年十一月十五日　剃髮仕、養朴與改名仕候。
同年十二月十五日　大猷院樣ゟ御目見仕候。
殿有院樣御前ゟ度々被召出、御畫御用相勤申候。
年月日相知不申候、殿有院樣御筆御畫七枚拜領仕候。今以所持仕候。右御筆枯木鳩壹枚、岩ニ鵲鴿貳枚、鷄貳枚、鍾馗壹枚、渡唐天神壹枚。

嚴有院様御筆御繪様書壹通、御手自拜領仕候、今以所持仕候

年月日相知不申候、御城御殿向御書相認申候(會心齋筆記)。

狩野忠信蔵書記「御本丸御座敷并御廊下繪様之次第」に依るに、左の如し。

一御玄關遠侍 鶴子、牡丹　　狩野右近

一殿上間上段七賢、上壁山吹、二ノ間九老、上段小紋　　右同人

一遠歌之間松樹、小壁雲のほせ、繪側小壁滝　　狩野右近

延寶二年乃至四年　禁裏御造營の時、上京仰せ付けられ、御學問所唐名所、同御表四枚四季山、同中段人形禽獸抑書を書く(狩野八重蔵潤菴隨筆二禁裏御造營記略に依る)。

古書備考禁裏御造營部類には、この時常信本途に一割五分增の書料を給せられし由見えたり。

延寶九年　「上野御佛殿相勤繪師共、御褒美金八百兩被下。(中略)幾ト(下略)」(甘露寺延寶九年十二月廿五日の條)。

天和二壬戌年　月日相知不申候、御扶持貳拾人扶持拜領仕候。

同年　朝鮮人來貢ニ付、朝鮮國王ヨリ被遣候御屏風御書相認申候(會心齋筆記)。

古書備考に依るに、この時常信の書きしは、七騎落、橋辨慶一雙、初瀬切渡之景一雙なり。又同書に依るに、この時朝鮮の使人書を常信に寄せて、十幅の書を求む。その書左の如し。

雖未承接、奉使貴國、飽聞盛華、亦想誠信情若書面、敢將所欲、仰申一書、幸乞勿咎、願得拾幅筆蹟、歸於我國、仍爲篋裡、傳于後世、則不留寶中之寶也、亦子孫之所不忘矣、望須特施如何、不宣。壬戌九月七日、朴同知、卞僉知、洪僉知、狩野養朴公足下。

又使者の一人洪世泰が常信の書の粘尾に書せし題語あり。左の如し。

余聞嘗國、因古今書多矣、稱意者絶少、今見常信公真跡、絶代奇筆也、觀其運筆如飛、頓挫之間、千里之駒振鬣而出、竦然有飛騰之勢、一叢之竹、動色而立、颯然有清籟之音、若非心通三昧、筆奪天機者、何能若此、是不獨名一邦擅一代而止、必將颯聲中國、流芳後世而無窮焉、奇哉々々、余仍求其筆跡、且題數語于帖尾云。壬戌仲秋、朝鮮國滄浪子題。

この時、常信又滄浪子の爲に肖像を畫けり。古書備考收むる所の幕府の儒員人見友元の題賛左の如し。

侃々滄浪子、朝鮮萬里人、衆心無鄙吝、下筆有精神、高潔玉壺月、温良碧海東、百年知己友、遊別兩情親。天和壬戌之秋、朝鮮聘使來、洪世泰字來叔、號滄浪、馮、其稱將與余屢結眉、時酒相酬、恰如舊識之親、及其歸、不堪別情、畫工餐朴寫其眞、因漫書其上云。竹洞。

元祿十五壬午年正月元日　嚴島繪馬鑑に、この日の記ある常信筆楓鹿圖及三福神圖の扁額あり。

寶永元甲申年十二月十二日　法眼被仰付候。

同六己丑年十一月三日　法印被仰付候。

同年十二月十六日　恭裏紫宸殿賢聖御障子御書御用幷仙洞御所向御書御用、於江戸相勤候ニ付、御褒美金五枚拜領仕候(會心齋筆記)。

この時常信の書きし障壁左の如し(狩野忠信藏恭裏仙洞院御所御繪樣附に出ヅ)。

紫宸殿賢障子人形三拾貳人、人形大キサ冠下ヨリ三尺貳寸

同中之間蓬來御子、鶴大

常御殿御小座敷一之間御床アリ、三體詩絶句繪燭狀先、砂子撒引

同二之間月宮島崎、同斷

同三之間紅葉、同斷

仙洞御所常御所南御座之間御床、御違棚、十體、雲龍砂子、小壁扇

同御次之間眞山水、同斷、小壁扇

院御所御學文所上間小壁張付共ニ、幷御繪座敷、雲龍砂子、御床、違棚アリ、帝鑑大禹治水圖

同御次小壁張付共ニ、雲龍砂子、同斷、湯王解網進仁

同御小書院上段御床、御違棚、小壁張付共ニ、蘆雁草山水

同御次南御繪座敷幷御次同東横張付共、小壁張付共ニ同前、御棚小横張付共ニ、右墨繪草山水

この賢聖障子の題銘は、舞政近衛家熙公の書する所たり。こゝを以て常信更に公の需に應じて、副本三幅を作る。古書備考收むる所の舞政家奉書左の如し。

追申、賢聖圖像三幅、共ニ如別紙、傍書有之樣ニ被成度思召候。以上。

依舞政殿仰申入候、賢聖御障子之繪御覽、筆意高妙、衣紋彩色等、比類無之、今度造營之奇觀不過之、珍重思食候、御障子之題書、舞政殿御染筆ニ候、依之、賢聖圖像之中、蘆何、太公望、房玄齡之像、今度之圖之通、彩色等迄、少茂相違無之、三人三幅ニ被書、當年中出來被差上候樣ニ頼思召候、爲後鑒、題書之御草案ニ被相認、御文庫ニ珍藏被成度之旨、仰ニ候、恐々謹言。七月廿三日、今大路治部大輔(花押)、近藤刑部大輔(花押)、狩野養朴爲、別紙「右依南殿障子之圖像、寶永六年己丑秋八月、法眼古川更謹書、不及申候得共、年號者、右之字ヨリ二字上リニ御認可被成由ニ候。

槐記享保十四年二月八日の條に曰く、「御床ノ掛物、養朴ガ南殿ノ賢聖ノ屏風ノ寫シナリ。」

同七庚寅年閏八月五日　紅葉山御靈屋向御書御用相勤候ニ付、爲御褒美、時服三拜領仕候。

同年九月廿五日　琉球國中山王ヨリ被下之御書相認候ニ付、爲御褒美、時服二拜領仕候(會心齋筆記)。

この時、常信薩州侯の邸にて、琉球使人の爲に揮毫せり。古書備考收むる所、琉球人贈養朴書三通あり。左にこれを掲ぐ。

「向於薩州亭、幸得一醉、忻慰無倫、且看大筆揮、墨痕奇妙、眞使吾輩快々然而參疾也、所呪之數幅、欣而珍之、命使申謝、十二月十七日、豐見城王子、呈狩野法印大書史」(紅唐紙)。

「前日薩陽館初晤、幸看神通之妙筆、欣慰々々、所呪皆奇絶、最感咫尺之內、而隔萬里之遠、方寸之中、乃排千尋之峻、眞吾國之至寶也、茲專伴以申謝。十二月十七日、呈狩野法印大書史、美里王子」(紅牋行書)。

「天錫良緣、幸接芝眉、眞千秋一會者也、時拙筆所寫之書、寒汚尊覽、先生辱賜嘉言、遂許以爲門下、即自揮大筆、亟敎、又嗣聚翰敎、嗚呼是僕何幸、而歡喜至如今日耶、感佩々々、不知所謝、秪恨歌曜之在近、再不得侍敎旌、徒爲嘆息而已、茲走筆倏尺楮、謹拜謝、高明照察、不備。寶永漆年庚寅臘月十七日、琉球晚

生宮城親雲上千仁(花押)、蹬上大日本名畜狩野法印養朴老先生座下」。

古畜備考に「朝鮮人某、有丹青之譽、見養朴畜廬曰、畜則妙矣、奈非廬何、人求其畜廬、示於養朴、朴曰、是眞廬也、畜則拙矣(芳洲口授、雨森氏)とあり。若はこの琉球人にや。

同年十二月十九日　御加増貳百石被下置候。都合高貳百石貳拾人扶持ニ罷成候。御加増貳百石、武藏國大里郡沼黒村、和田村ニ而知行所拜領仕候。

同年十二月廿四日　御畜御用出精相勤候ニ付、爲御褒美、白銀百枚拜領仕候(會心齋筆記)。

正德元年　朝鮮屏風富士三穗一雙、大井川御幸、安樂寺一雙、巴軍、はんがく女一雙を畜く(古畜備考に依る)。

常信この時も特に朝鮮人の爲に畜を作りき。古畜備考に左の三詩を錄せり。

「寄古川法印清案」好在江關老畜師、別來猶憶弄奎時、生綃一幅蘆邊雁、那得卿畜寄遠思、曾以蘆雁圖見惠、故落句及之。辛卯臘月上浣、南岡老人奎(李邦彥字英伯、通信從事)。

「寄古川老叟清案」傳神何用倩長康、自識生來貌不揚、願借寶齋圖一幅、葉舟容易到吾鄕、曾有寫眞遠寄之約、故起句云然。平泉(趙泰億、字大年、正使)。

「寄古川老師」知君能事雪盈顚、游戲丹青七十年、寫出龍媒跡遠客、贈行全勝繞朝鞭、曾以畜馬見惠、故下句及之。靖菴稿(任守幹、字用譽、副使)。

正德三戊辰年正月廿七日、病死仕候。歲七十八。法名常心院道雲日觀。池上本門寺ニ葬申候(會心齋筆記)。法名常心院道雲日觀。

貞享四年の武鑑に「狩野養朴」、元祿十七年の武鑑に「たけ川町、廿人フチ、養朴常信」、寶永五年の武鑑に「養朴法眼常信」とあり、その肖像尙家に存ず。常信永眞安信の女を娶り、周信、岑信、甫信及女子(探信守政の妻)を生む。周信後を嗣ぎ、岑信は別に家を成し、甫信これを嗣げり。(預町家、後に出づ)傳へ曰ふ、常信更に一女子あり、門人と通ず。常信怒りてこれを斬れり。その遺言に依り、本門寺南之院の堂側に葬る。(狩野隊新談、常信の遺言に依り、近年まで展墓せずと云ふ)以てその嚴格なる氣風を察すべし。常信中院內大臣通茂公に學びて、頗る和歌及連歌を能くす。古畜備考に收めたる詠草の抄錄に依りて、その文藻を見ることを得べし。(その三十首和歌貼者の跋記に曰く、「島三十首和歌、法眼壁之筆、予侍玉鈎下、使有可下筆色、染黃毫、寛文四年九月十四日(花押)」、その餘詩歌等多く貼者の評語あり)幼にして畜を父尙信に學ぶ。牛馬問に曰く、「常信若年の時、竹の繪を稽古す。清書數十度に及ぶといへども、皆尙信の心に叶はず。常信も精つきて茫然として坐し居たるに、月は限なくさへわたり、庭竹の影障子にうつり、甚おのづからなる風情有ければ、大に悅び、其すがたを寫すに、尤筆力を得たり。翌日父尙信に觀せけるに、尙信大に賞美し、此間、かくの如く似たるもなし、是こそ畜といふべし、なれども此竹畜の竹にはあらず、葉みな陰形なれば、夜の竹ならば斯こそ然るべきものをといへり。誠に神に入といふべし」。(古畜備考、雜錄物語を引く、略同じ)この餘常信の畜に關することの諸書に散見せるもの數條あり。左の如し。

「養朴常信を召て師とし玉ひけり。養朴も叔父(探幽)に劣らざる堪能にて、しかも中院內大臣通茂公に從ひ、常に和歌を學び、それをもて畜のたすけとなしければ、雅趣高致たぐひなくかきあらはしけるとぞ」(有德院殿御實紀附錄)。

「御家の名物(中略)細川越中守方ニアル雪舟ガ唐土ニテ畜タル富士ノ圖モ、養朴ニ寫セタリ。コレモ表具トモトテ御見セナサル。雪舟ガ朝陽、夕陽ノ圖ハ古今ニ超絕スト謂フベシ。夕陽ハ加賀ニアリトヤ。朝陽ハ陸奥守ニアリテ、常信ニ寫サセタリトテ御見セナサル。表具ハワケモナキモノ故、不寫

ト仰也。言語ニ絶シタルモノ也(槐記享保十一年四月廿一日の條)。

「御造棚ニ大手筋アリ。是ハ昔漢ノ上筆ノ名高キ圖ヲ、養朴ニ殘ラズウツサセタリ。拜見スベシトテ鵜サル。高然然ガ山水、日觀ガ葡萄ヲ始トシテ、世々ノ名筆ノ圖式イト見事也(同記享保十二年十一月朔日の條)。

「養朴ハ又探幽已後ノ上手也。目ノツケ所ガチガヒタルモノ也。□□ナド近代七十ヲ越テ、專ラ神筆ニテアラク、畫ハ探幽ナド行年ガキニナリテ、アノ格ニテアリシヲ覺テ畫ナルベシ。養朴ハ老後ニ至ルホド畫ガクハシウナリテ、死スル一年前ニカヽセタル三幅對ナドハ、至極クハシキモノナリ。トテモ探幽ニハ及ブマジキト思タルガ、探幽ト云ヘドモ、老後ノ筆力ハ不快ニ思ヒタルガ、何ニモセヨ似セモノニハ非ズト仰ラル」(同記同十三年五月五日の條)。

「白石は我の强き人歟。文廣のいまだ甲府殿と申せし時、繪物の繪に贊あり。御吟味にて、白石の考に明畫なりとせり。養朴の極は宋畫也。白石それを不快に思はれたり。廿餘年の後、朝鮮來聘の時、養朴屏風を畫きたるに、一條院の御前にて、清少納言簾を捲く所を畫たるに、雪降りつゞみたる軒の所、雪すくなしと、白石評判なり。養朴いふ。いかにも左樣なれども、軒の所にて禁裏としらせ申事、畫の古傳也といふ。白石、それは傳授なるべけれども、異國へ渡すに傳授の沙汰はいはれまじ、人の笑をうくべしとて、畫直させて、廿餘年の不快をはらしたりと云れし由(古畫備考、洞齋談)。

「常信は自分の印章多く拵へ用ひ候也。茶人山田宗遍は懇意にて、其印を悉く押て貰ひ候。其數百五十箇程あり」(古畫備考、洞齋談)。

「狩野養朴因余之需、寫寒江獨釣圖、致投示之、其精妙不可以言盡之、聊綴一絶以謝之。筆力眞成造化工、清波飛雪入神通、慇懃更喚漁舟去、欲逐寒江萬里風。竹洞野郎」(古畫備考、同畫又竹洞の「謝古川翁惠手栽茄子」詩あり)。

探幽、尚信の後狩野家の妙手は獨り常信あるのみ。探幽の世を去りて後、元祿、寶永の間、尚狩野家の聲望を盛ならしめたるは、實に常信の力なりと謂ふべし。

如川周信

周信初名右近、中務卿法眼、如川、泰寓齋と號す。含心齋筆記に曰く、「万治三庚子年七月二日武州ニ而出生仕候。延寶六戊午年月日相知不申候、部屋住ニ而御畫相認申候。寶永七庚寅年十二月十九日、部屋住ニ而御住ニ而嚴有院樣ゟ御目見仕候。年月日相知不申候、部屋住ニ而養朴同樣ニ御城御殿向御畫相認申候。寶永七庚寅年十二月十九日、部屋住ニ而御扶持拾人扶持被下置候。正德三癸巳年三月廿四日、父養朴跡式無相違被下置候旨、於鄰躅之間、阿部豐後守殿被仰渡候。同年四月廿八日、繼目御禮申上候。亡父養朴爲遺物、夏明遠筆山水之畫一幅、幷自畫卷物一軸獻上仕候。享保四己亥年二月廿三日、法眼被仰付候。同年朝鮮人來貢ニ付、朝鮮國王ゟ被遣候御屏風(富士三幅一雙、佐々木綱厚、島山れい一雙、鎌倉鶴風一雙、古畫備考)御畫相認申候。同十三戊申年正月六日病死仕候。歳六十九。法名晃曜院雖雲日治。池上本門寺ニ葬申候」。有德院殿御實記附錄に曰く、「養朴うせぬる後は、其子如川周信を召して、常にとひはからせ玉ひしが、如川も世を早うしければ云々」。

寶永六年の禁裏御造營に周信が小御所西方取付廊下之間柳鷺(畫師砂子)常御殿夜御殿中段龍田、(同斷)女院御所御幸間御床御違棚伊勢物語、(同斷)院御所秀宮御殿常御殿奥御物置(御棚有)藤棚、(總金)等を畫きしことは、禁裏仙洞院御所御繪樣附にて知られ、正德元年の朝鮮屏風も犬追物一雙を

畫きしこと、古畫備考に見え、同三年（四月六日被仰渡）文昭院の御影、（繪）享保元年（七月十八日被仰渡、同廿日畫）有章院の御影（彩色）を畫きしことは、御代々御影例書扣（狩野忠信覺）に見えたり。寶永七年琉球人來朝の時は、父常信と同じく畫を贈りきと見え、古畫備考に琉球人の書簡二を出せり。（「昭德祠記、嘗見眞影、奇姿妙畫、生意尤精、吾眼觀之、眞有不耐賞歎者也、乡閭」）

榮川古信

文會雜記に曰く、「近頃周信ガ畫崩シテ、埒モナキ繪ニナリタルハ、最早我ヲ壓ス繪ハナキト云ヒ誇ル心ヨリ、大事ノ戒ヲ忘レテ、散々ノコトニナリタルト也。」元祿十七年の武鑑に「養朴（子）如川周信」、寶永五年の武鑑に「如川周信」とあり。周信御醫師平井省菴（法眼正興）の女を娶り、一子古信あり。

古信（ひ）初名庄三郎、榮川と號す。會心齋筆記に曰く、「元祿九（丙子）年八月十六日、武州ニ而出生仕候。寶永八（辛卯）年三月十五日、部屋住ニ而文昭院樣ゟ御目見仕候。正德三（癸巳）年七月廿五日部屋住ニ而初而御畫御用被仰付、相勤申候。享保四年朝鮮評風四學畫遊一雙を畫きしこと古畫備考に見えたり享保八（癸卯）年六月廿四日、面々所持之古畫罷越、所望仕、入上覽候樣被仰付候。（古畫備考に「御舟大幅山水圖卷、古信率敬廟寫進之、于時享保乙巳冬十二月（御物）」とあるは、この時の模寫の一ならじ）依之、諸家ゟ所望仕、入上覽候古畫之寫被仰付、相勤候ニ付、白銀五枚年々拜領仕候。同年十一月十六日、小松川筋遠御成御供仕、御拳之鴨拜領仕候。其後度々遠御成御供仕候。同年十二月十四日、鷹生寫被仰付、認方工夫仕、下繪伺仕候樣被仰付、右下畫認差上候處、有德院御筆ニ而一紙ゟ御直シ、御好等有之候、右御筆拜領仕候。同十一（丙午）年三月廿七日、小金野御鹿狩御供仕、鹿一匹拜領仕候。右御鹿狩之圖取御屏風御畫被仰付、相認申候。同十三（戊申）年五月廿五日、父狩野如川跡式無相違被下置之旨、於鄭躅之間、松平左近將監殿被仰渡候。同十六（辛亥）年正月、病氣之處、本復之程難計、若シ相果候ハヾ、實子狩野庄三郎儀、當年二歳ニ罷成、家業相續難仕御座候間、父方從弟違松本隨川惣領松本受川儀、養子ニ奉願置、同月九日病死仕候。歳三十六、法名法性院古信日是。池上本門寺ニ葬申候。有德院殿御實紀附錄に曰く、「如川も世を早うしければ、其子榮川、古信まだいとけなかりしを、名家の末なりとて、めしまつはし玉ふ事かぎりなし。殊に其畫材をすゝめ玉はんとて、御みづから養朴以來傳へさせ玉ひし畫法を、懇に御敎諭あり。放鷹の時も御供にめし加へられて、景勝の地に至れば、かならず眞圖を作らしめらる。既に小金原御狩ありしにも陪從して、其さまを圖せしめ、後に屏風に押れけるとぞ。ことさら鷹の圖は御敎を加へられしにより、詳密にいたりしとなむ。」古信水戸家中岡部忠平以誠の女を娶り、一子典信（庄三郎）あり。

受川玄信

遺旨に依りて受川玄信家を嗣ぐ。

玄（はる）信受川と號す。實は松本隨川甫信の子なり。會心齋筆記に曰く、「享保元（丙申）年十二月十日武州ニ而出生仕候。享保十六（辛亥）年正月、養父狩野榮川願之通、跡式無相違被下置之旨、於鄭躅之間、松平左近將監殿被仰渡候。同年四月廿八日、繼目御禮申上候。有德院樣ゟ御目見仕、自畫卷物一軸獻上仕候。同年十月病氣之處、本復之程難計、若シ相果候ハヾ、養弟狩野庄三郎儀養子ニ奉願置、同月十四日病死仕候。歳十七、法名植種院玄信日治。池上本門寺ニ葬申候。」未だ娶らず、子なし。古信の子典信後を嗣ぐ。

典信幼名庄三郎、榮川院と稱し、白玉齋と號す。享保十五年十一月十一日江戸に生る。二歳にして父古信歿し、專ら賢母妙性尼の鞠育に人と成れり。傳へ曰ふ。典信實は仙臺侯の落胤なり。妙性尼曾て一子を芝の毘沙門天祠に祈り、一日歸路これを拾へり。故を以て、竹に雀の紋つきたる衣服と短刀とは、近き頃までその家に傳はり、仙臺侯より時々問安の使者來りきゝぞ。（狩野良信）本門寺南之院に典信の建てし妙性尼の母德碑あり。その文左の如し。

本是院太孺人者、姓橘氏、榮川院法印白玉齋狩野先生之母也、少適法性院狩野君、以生先生、生僅二歳、君病歿、革、遺言於太孺人曰、予家丹青之業、世々未墜、兒也幼冲、未知才與能、它日堂構之美、一在母圖、慎勿爲宗之羞也、乃世傳之筆意、齋家之所秘、盡授之太孺人、而卒焉、太孺人性貞幹整莊、蓋然奉遺言、日夜經紀家事、因勞弗倦、加之、先生幼而多病、太孺人自執藥餌、數遠曉不寢、至有起色、則嬉戲、常摸粉本、教以丹青之業、漸口授世傳之筆意、每至二十二日、輒沐浴齋戒、夜獨立庭中、踵罷以及夜半、穿月誓曰、兒也若不幸不能成業乎、則天先救予矣、如斯有年、盛暑無息、其它教誡之厚、無所不至焉、是先生才德與年長、遂業大成、其名遂被海內、乃今給事中、官澁法印、門地比官醫、數奉特命之恩寵也、蓋乃先生才德之所致、即太孺人之功亦大矣哉、孫玄之齋養川君、亦給事中、官叙法眼、名譽日高、亦太孺人餘敎之所致也、太孺人學和歌於亞相冷泉卿、終身所詠、蓋及數千首云、銘曰、有母如斯、有子不可、如斯乎、世業與盛、母德惟賁、嗟乎綱々子孫、介福屢宜哉。天明二年壬寅秋九月、平安貞撰。榮川院法印藤原典信建。

妙性尼の自筆の遺文二卷（狩野良信）今に存ぜり。左にその一を掲ぐ。（他の一卷は遺誡と辭世の歌となり）

典信が父、やまひの床にふし侍りしころ、君よりも有がたきみけしきども侍りしに、ほどなくみまかりなんとせし時、かゝるめぐみもほうじ奉らで、はかなくなり侍らんと、かへす〳〵くちおしきわざなれば、おさなきものに、よく〳〵いひをくべきとながら、いまだよはひもむげにたらねば、なき跡にて申傳へよ、我が身にかはりて家の道を勤、代〻の名をもくだし侍るまじきよしを、いひふくめよとて、一子の傳をのこしおき侍りぬ。たのむかげなきいとけなきものを、代〻の名にをとらず、父にかはりてつとむべきほどには、いかでか育したてんや。たゞ神のたすけならでは、と、身にかへて、あけくれいのりそだてしに、古年のふゆ齋中にめして、御まへにて、典信が筆の跡を高覽に入ぬるとの有がたさは、父のねがひもかなひ、家に絶にしとの立かへりぬるも、誠に神と君とのめぐみならずやと、有がたさのあまりに、

あふぐぞよ神と君とのへだてなく、おなじめぐみにかゝるちかひを。

因みに言ふ。母德碑中言ふ所の廿二日は、毘沙門天の日なり。同家過去帳妙性尼の下に廿二夜元祖とあり。古書備考に曰く、「御休息御膳物、服紗紙大堅物、鶴二羽、榮川院法印筆、鍾馗羽養川院法眼筆、竹榮二郎（伊川院也）和歌一首典信母。立さかふ緑もふかき呉竹に、千代をならべてすめる友鶴。典信母、年八十」。又曰く、「妙性尼齋世に傳ふることなし。木挽町の家に、その所齋菊竪幅、草花小禽雙幅ありし。妙性筆、あるひは橘氏女筆と題せり。印はなかりしと覺えし。いづれも薄彩色、筆意たゞしく、よくその所天を學ぶもの。今皆烏有となれり。可惜」。

典信母

今主として會心齋筆記等に依りて、典信の傳記を尋ね、これを左に列叙す。

享保十六辛亥年十月　養父狩野受川養弟之續ヲ以、養子ニ專願寺、同月十四日病死仕候。同年十二月廿七日、養父狩野受川願之通、跡式無相違被下置

之旨、於御踏返之間、松平伊豆守殿被仰渡候。

寛保元辛酉年十一月十五日　有徳院ゟ御目見仕、自書巻物一軸献上仕候(會心齋筆記)。

寛延元年　朝鮮屏風壹隻、松ヶ浦島一雙、源氏初音、藤の裏葉一雙(探幽ノ圖寫)を畫く(古書備考)。

寶暦十二壬午年二月十六日　法眼被仰付候旨、於御右筆部屋樣類、秋元但馬守殿被仰渡候(口宣案、狩野謙柄藏)。

同十三癸未年七月朔日　奥御用被仰付候旨、松平播磨守殿被仰渡候。

同十四甲申年二月　朝鮮人來貢ニ付、朝鮮國王ゟ被遣候御屏風御書被仰付、相認申候。朝鮮人書官ゟ爲相認入上覽候樣被仰付、東本願寺ゟ日々罷越、右御用相勤申候(會心齋筆記)。この時典信の書きし朝鮮屏風は、武者繪樣仗助衆早業、腰瀧口季賢武勇一雙、初瀬、高雄一雙、桜花物語之内、月見、田植一雙及新御屏風歸去來、赤壁一雙、四愛堂一雙なり(狩野忠信蹤文書)。

安永二癸巳年二月九日　御醫師並被仰付候旨、於御右筆部屋樣類、御老中御列座、田沼主殿頭被仰渡候。

同四乙未年閏十二月廿五日　淀明院樣於御前、御召御紋御羽織拜領仕候。

同五丙申年正月廿七日　日光御供ニ付支度銀六拾枚拜領仕候。

同年四月　日光御社參御供仕、於日光山、强飯之節出席被仰付、相勤申候。

同年十一月十五日　淀明院樣御四十御賀御祝儀ニ付、献上之御品之内、御小道具品々、於奥拜領仕候。

同年十二月十四日　淀明院樣御筆山水之御書一幅、於奥拜領仕候。

同六丁酉年　竹川町拜領町屋敷奥、當時之武士地御引替奉願候處、願之通御引替被下置、右町屋敷之儀者、先祖ゟ年久敷持傳候屋敷ニ付、格別之思召ヲ以、差上ニ不及、其儘被下置候旨、米倉丹後守殿御書付ヲ以、被仰渡候(會心齋筆記)。

只今迄之拜領屋敷、竹川町

貳百坪　狩野榮川

右町屋敷差上、武士地引替、先達而願之通被仰付候得共、先祖ゟ持來候屋敷之儀、其上、奥御用出情相勤候付、格別之思召を以、右町屋敷其儘被下候。尤町奉行可被談候(同書末尾收載文書)。

この武士地は即ち木挽町五丁目(元田沼意次の邸を分與せられしもの)にして、今の農商務省前なり。當時田沼の邸と隣にて、奥信と意次とは互に裏門より相往來し、意次の密議は常に典信の家にて凝らされきと云ふ(狩野友信翁談)されば、典信のこの家にて始めて奥醫師格と爲りて、寵遇殊に高く、立身甚目ざましかりしも、屋敷引替を願ひて許され、而も竹川町舊邸は返上に及ばず、更に新邸に廣大なる繪所を官築せられ、延いて後年に至るまで、狩野諸家中家道、畫塾共に最も榮えしは、德川家治將軍の深く畫を好みて、これを寵せられしに由るとは言へ、多少意次の執成に基けるものありしならむ。されば賤のをだ卷に曰く、「畫家は餘り世に鳴たるもの見えざりしが、近來に至りて、狩野榮川が法印になりて、殊の外世に鳴たり。是もわざ〳〵田沼家の隣に屋敷を拜領したる位なれば、こゝろあるものには、底澄はせず。尤畫もよかりけり。」塵塚談(下)に曰く、「狩野榮川院畫の事。現在にして絹地三幅對書放しにて、價拾両位也。扇面墨繪にて金一歩宛の賣買なり。我等草書山水の扇を持ける所、骨董傾來り、一歩に拂くれ

ろと望けり。しかるに、死後は實既する人さらになく、骨董舗にかけありて、至賤價なれど、求る人なし。書畫とも、死後には高價なるに、榮川院書に限り、あちらこちらなり。其由來を尋るに、榮川院、千賀道隆兩人は、田沼侯の側さらず、晝夜出入せしにより、青雲の志ある人々は、此兩人を珍重せし事也。書上手にての價にあらず。田沼の光りにての價也。」

同年九月晦日　慈十郎町ゟ出火ニ而住宅類燒仕候。

同年十月三日　此度類燒仕候ニ付、格別之思召ヲ以、金貳百兩於奥拜領仕候。

同七戊戌年閏七月十日　御休息之間張替御書御用相勤候ニ付、爲御褒美、時服二被下置候旨、於土圭之間、御老中御列座、田沼主殿頭殿被仰渡候。

同八己亥年十二月十二日　御黒書院竹之御廊下御書御用相勤候ニ付、爲御褒美、時服二被下置候旨、於土圭之間、御老中御列座、松平周防守殿被仰渡候。

同九庚子年七月廿七日　孝恭院樣御書像井御靈屋御廟向御書御用相勤候ニ付、爲御褒美、金五枚、時服二被下置候旨、於土圭之間、御老中御列座、田沼主殿頭殿被仰渡候。

同年十二月十八日　法印被仰付候旨、於芙蓉之間、御老中御列座、松平右京大夫殿被仰渡候。

天明元辛丑年七月十三日　西丸奥御用可相勤旨、西丸於土圭之間、太田備後守殿被仰渡候。即日奥ゟ相廻り、御書御用相勤申候。

同四甲辰年十二月廿六日　八代須河岸ゟ出火ニ而住宅類燒仕候。

同五乙巳年正月九日　舊冬類燒ニ付、格別之思召ヲ以、金貳百兩於奥拜領仕候。

同六丙午年二月廿五日　淀明院樣御五十御賀御祝儀ニ付、御紋付御小柄於奥拜領仕候。淀明院樣薨去以後、同年十月十日、淀明院樣御平生被遊御書候節之御書硯箱、於奥拜領仕候(會心齋筆記)。

同七年　「大鹿令齋藤安先、善御、其屈父安盛、嘗過紅毛人、而得學奔馬跳阻之驗、世々傳之、天明七年丁未五月九日、安先爲其歳於上苑、殆奇絶之觀也、奥信恭奉敕命、謹圖于此、榮川院法印藤原奥信御像(古書備考)。

同七丁未年十月七日　淀明院樣御書像井御靈屋御廟向御書御用相勤候ニ付、爲御褒美、金五枚、時服二被下置候旨、於土圭之間、御老中御列座、太田備後守殿被仰渡候。

寛政二庚戌年二月五日　禁裡御造營ニ付、紫宸殿賢聖御障子御書被仰付候旨、於土圭之間、松平越中守殿被仰渡候。右賢聖御障子下書全部出來、京都ゟ伺相濟候處、同年八月十六日、右御用中病死仕候。歳六十一。法名法壽院奥信日妙。池上本門寺ニ葬申候(會心齋筆記)。

賢聖障子名臣冠服考證(紫邦產、古書備考に出づ)に曰く、「奥大學頭臣林信敬等、雜義該定、授畫員臣狩野奥信、新立圖者凡十有九、並舊圖十有一、旁取圖二名、通計三十二名、彩繪備焉。奥信は下書のみにて歿し、住吉內記これを畫けり。されど、寛政二年八月禁裡御殿廻御書樣筆者姓名(古書備考)の中には、奥信儀、奥御能等之節々、見物被仰付候。御鷹野、吹上御庭、都而御延氣御成等之節、奥向ニ而御供相勤申候」(會心齋筆記)。

典信の墓側に「白玉齋先生筆塚之碑」あり、傳記を補ふに足るを以て、左にその文を掲ぐ。

是榮川院狩野先生筆塚也、沒後門弟子聚其禿者、以瘞于先生墳塋之南旁、建碑以識之、便安貞文焉、安貞交友于先生四十年、是以得悉其爲人也、先生諱典信、藤原爲姓、狩野爲氏、以畫爲祖業、歷世未嘗聚其美、先生幼而嗣焉、勵志丹青、遂極其妙、聲名高于天下也、嘗有一黃雀、飛入于堂、啣小白玉盞之畫硯中而去焉、人以爲嘉瑞、因號白玉齋云、後遵明廟之好、畫也、親以先生筆法爲模範、於是乎、旦夕侍畫事於中、恩遇日渥、拜法眼、門地比官醫、又賜以御畫、永藏於家、又賜第地於江都城東采女原而住焉、覺遍法印、准許榮川院號、其它特恩異來也、然生先性恬靜寡言、未嘗有營世利之心、嘗語嗣子養川君曰、我世以丹青、奉職於朝廷、所志在一毛顯而富貴何爲、夫榮遇乎勳、志損于富、女侍易哉、愼勿顧利焉、清哉先生可謂德言之美乎哉、今茲西京宮闕新成、先生奉紫宸殿賢聖新圖之命、時有疾、未全愈、王事靡盬、雖死何辭、廼日援筆至夜半、勉弗息、稿既成矣、忽焉病革、須臾卒矣、可謂勤而不厭、鞠躬乎止者焉耳矣、嗚呼不啻有畫之美也、君實天休對揚、宜文丹青、守志弗忘、勤哉其業、胡以弗滅、是彼禿者、寇參從、遂得手應心、神妙冠乎世、不朽匪啻石、盛名襲千歲、寬政二年庚戌二月、嶺南金澤安貞撰、榮川院門人温古齋小峯與稟謹書。

古畫備考に典信の相中道之記拔萃あり、年曆は詳ならねど、その母妙性尼（天明二年六月廿九日歿）の尙世に在りし頃なれば、天明二年以前なること明なり、典信が傳記の異聞を廣め、又その文藻を考ふるに宜しきが故に、左にこれを掲ぐ。

ちかき年比、夏となれば、少いたはる事有しに、出湯などあみなば、よかるべしといふ人もあれど、上のつとめ繁き身のことゝ、しく願侍らんもいかゞなりゝる折しも願侍らば叶もやせんと、十八日の朝、相州宮の下へ願率りければ、其夕つかた、御暇下し給はりぬ。御慰にもなるべし、よく見て歸るべしなどゝ、かたらふ人もありければ、涼風もたゝぬ先といそぎて、旅の調度なども取あへず。廿日あまり三日とさだめ、卯剌比宿を立ぬ。時金澤に入て、こゝかしこ見めぐりけるに、金岡が筆捨松と聞しより、ひろひうつして家つどにせん。

金岡の筆捨松と聞しより、ひろひうつして家つどにせん。

母のもとよりは、此程の長雨、旅のやどりいかにぞと。

おもふぞよなれぬ旅ねのあさ夕に、露のやどりをさぞなわぶらん。

住なれし宿だに雨のわびしきに、たびねの枕つゆけかるらん。

返し。

むすびぬる草の枕の露のまも、かけてぞしたふ故郷のゆめ。

古郷も雨の軒ばともりきけば、猶ぬれまさる旅の衣手。

けふもあるじ湯治場の來り、さまゝの物語しけるに、此邊いづかた見るべしと問へば、みやぎのよかるべし、御父のわたらせ給ひし時も、あないいたし侍りぬといふ。いとめづらし、よそぢあまりのとなれば、此やどりに來り給ふことはしる人もあらじと思へば、此ほどのうさもわすれて、よくぞ此

所へ來にけると思ひぬ。そのをりは、誰かれ供たるよし名のるも、皆おぼえある古人ども也ければ、ゆかしきに、まして父はおもかげもしらねば、此あたりにやよりそひ給ふらんと、ひねのみふさがりぬ。

おもかげもしらぬぞかなしよりそひし、横の柱は猶のこる世に。

七月十八日略戌の刻ばかりに、江府のやどに着ぬ。

爲村卿奥書

一帖しづかに見侍りぬ。あるはいぶせきを思ひては、事なきをよろこび、又おもしろさを思ひては、やしなひならんとよろこぶことの葉ども、いづれもよくとゝのひ、君をたふとみ、母をうやまひ、子をいつくしむの心、おのづからにこもりて、感吟し、おくられし自書實景をそのまゝに、都ながら見る事、心ざしの淺からぬことゝ、

箱根路に見しをそのまゝうつし繪は、猶めづらしくむかふふじのね。

十月廿六日夜、ともし火のもと、目錢にてかきつくれば、たど〳〵し。(花押)

享保二十年の武鑑には「三百石廿人フチ、新橋島屋丁、父榮川」庄三郎、天明七年の武鑑には「三百石廿人フチ、父榮川、御醫師格、木びき丁」榮川院法印典信こあり。典信子女多し。惟信、恭信、雄生、新右衛門、初名三郎四郎、天野豐三郎、安永五年十二月廿五日、西丸御小性組、天野彌兵衛養子、後御先手相勤、相果二女子、長は御醫師狩野洞春妻、次は早世熊鐵、早世芳直、江木武者五郎、松平周防守家來、江木庄左衛門芳英養子これなり。惟信家を嗣ぐ。

榮川院惟信

惟信初名榮二郎、養川院、玄之齋と號す。その傳記を尋ぬるに、略左の如し。

寶暦三癸酉年十月十五日　武州に而出生仕候。

明和元甲申年十二月廿八日　部屋住に而被召出、奥御用可相勤旨、小出信濃守殿被仰渡候。

同八辛卯年十月九日　部屋住に而新規貳拾人扶持被下置候旨、於焚火之間、水野豐岐守殿被仰渡候。

安永二癸巳年二月九日　父榮川院御醫師並被仰付候に付、私儀御醫師子共並に可相心得旨、於新部屋、加納遠江守殿被仰渡候。

同五丙申年正月廿七日　日光御供に罷越候に付、支度銀三拾五枚拜領仕候。

同年四月　日光御社參之節御供仕候。

同年十一月十五日　淩明院様御四十御賀祝儀に付、献上之御品之内、御小道具品々、於奥拜領仕候。

同年十二月廿四日　淩明院様御筆野馬之御書一幅、於奥拜領仕候。

同六丁酉年九月晦日　熊十郎町ヵ出火に而住宅類燒仕候。同年十月三日、此度類燒仕候に付、部屋住に而金百両於奥拜領仕候。

同七戊戌年閏七月十日　御休息之間張替御書御用相勤候に付、爲御褒美、時服二被下置候旨、於土圭之間、松平右近將監殿被仰渡候。

同九庚子年十二月四日　隨宜樂院宮御隱居所御繪認候に付、時服二被下置候旨、於土圭之間、松平右京大夫殿被仰渡候。

天明元辛丑年七月十三日　父榮川院同横、西丸奥御用可相勤旨、西丸於土圭之間、太田備後守殿被仰渡候。即日奥ゟ相廻り、御書御用相勤申候。

同年十二月十六日　法眼被仰付候旨、於御右筆部屋樣、御老中御列座、松平周防守殿被仰渡候。

同三癸卯年十二月十八日　御書御用出精相勤候ニ付、部屋住ニ而弐百俵高ニ被成下候旨、於御右筆部屋様類、御老中御列座、久世大和守殿被仰渡候。

同年十二月廿六日　八代須河岸ヶ出火ニ而住宅類焼仕候。

同五乙巳年正月九日　舊冬類焼仕候ニ付、格別之思召ヲ以、部屋住ニ而金百両於奥拜領仕候。

同六丙午年二月廿五日　浚明院様御五十御賀御祝儀ニ付、御紋付御小柄於奥拜領仕候。浚明院様薨御以後、同年十月十日、浚明院様御平生被遊御書

候節之御書硯箱、於奥拜領仕候。

寛政二庚戌年十一月三日　父狩野榮川院跡式無相違私ヲ被下置候旨、於菊之間、御老中御列座、松平伊豆守殿被仰渡候(高弐百石、武蔵國、弐拾人扶持、

拜領屋敷木挽町橋通)

同五癸丑年正月廿九日　禁裡御好御屏風御書相認候ニ付、爲御褒美時服二被下置候旨、於土圭之間、御老中御列座、松平伊豆守殿被仰渡候。

同六甲寅年十二月十六日　法印被仰付候旨、於芙蓉之間、御老中御列座、太田備中守殿被仰付候。

同七乙卯年三月五日　小金野御鹿狩御供被仰付、奥向ニ而御供相勤申候。於奥猪拜領仕候(會心齋筆記)。

會心齋筆記は寛政十年養川齋上げの系譜を收めたるものなるが故に、惟信の自記の傳こゝに終れり。されど同記卷末別に文書類の寫しを載せたり。これに依りて左に爾後の傳記を補ふ。

文化二年三月十四日より、紅葉山御靈屋御用寫かゝり、六月廿七日取掛り、廿八日より彩色取掛り、閏八月八日御給仕立迄出來。

文化三年　五日。狩野養川院。

同年十二月五日より、御道献御屏風四愛堂彩色掛る。

同年同月　西丸御休息御檜認ニ付、拜領物、銀五拾枚、白羽二重三疋、弟子御手當金四拾五両。

同四年　「二雙狩野養川院、一雙同伊川、來々巳年朝鮮國王ヘ被遣候御屏風之給、右之通可被相調候。養川院儀老、右之給頭取仕、下繪調差出候樣可被致候」。

同年　「私不快段々快方ニ御座候間、歩行仕候樣、多紀安長申聞候間、一類共抔ヘ歩行仕度奉存候。右之段奉願候。以上。十月十五日。狩野養川院」「可爲願之通」候」。

「私儀來年始御禮例年之通元日罷出候樣申上置候處、今以不快ニ御座候ニ付、右御禮ニ罷出不申候。依之此段申上候。以上。十二月。狩野養川院」。

「私儀先達而御屆申上置候通、今以不快ニ御座候ニ付、來正月元日、御流頂戴ニ罷出不申候、依之、此段御屆申上候。以上。卯十二月。狩野養川院。」

「私儀不快ニ御座候ニ付、堅目錄之儀、以使者献上可仕哉、此段奉伺候。以上。十二月晦日。狩野養川院」「可爲窺之通」候」。

同五年　「覺。一、對州御屏風御用、私ヘ頭取被仰付、井御屏風貳雙認方、被仰付置候處、此節大病ニ御座候間、若萬一之儀も御座候節者、如何可仕候哉、奉伺候。以上。正月、狩野養川院」(以上會心齋筆記に依る)。

「文化五年正月九日病死、年五十六、法名養川院惟信日詔、葬本門寺に(古書備考)。

惟信の傳記を補ふべきもの、古書備考に左の一事あり。

鬼童丸絵詞一卷、狩野養川藤原惟信十五歳筆(印)見惟信圖往昔鎌州源公兄弟、誅市原鬼童之狀、既成卷矣、而請阿母親書其記事於圖間、阿母辭以老拙不堪、後賞惟信固請、乃含怡之愛、不能復拒之、終親筆焉、此卷也、孫與祖母相成、其父豊徒已歿、與信乃跋以此焉、明和四年丁亥秋八月也(印)。

故畫院法印養川先生筆冢銘と題したる碑、本門寺の墓側にあり。前出の傳記と重複する所なきに非ずと雖も、更にこれを詳にするに足るものあるを以て、左にその全文を掲ぐ。

惟故畫院法印養川先生既歿之後、其子伊川泣告曰、先人幸備畫院員、恩寵隆盛、而墓碑至今無銘、門生弟子不忘其德、密遂筆于墓側、而又立石其上、請予銘之、勝雄與先生、歴仕二朝、相國二十餘年、知其功行最詳、乃不敢辭、惟先生諱惟信、稱養川、姓藤原、氏狩野、遠祖發朴以後、世以繪事、事仕幕府、考法印榮川院與信、擅淮畫員、先生亟聲、服勤家訓、既有跨竈之目、當時浚明大君、耽嗜丹青、先生隨侍、班亞畫員、常侍左右、勤勞有年、僅二十九、擢叙法眼、狩野氏歴世、未有夙齡擢階如斯也、安永中車駕詣日光大廟、先生陪焉、得賞製、遊里山川圖數卷、爾後廟堂大禮、郊野豫遊、莫不陪侍、皆製圖獻之、賞賜許多、一時成榮、嘉瑞、今大君立而三年、榮川院卒、襲其遺封、是歳蒙命書龍虎屏風、以進星大内、而又進位法印、得許稱養川院、年市四十二、蓋特恩云、寛政中、世子詣山王祠、大君狩小金原、皆命製圖、又製三國志圖十數卷、文化中書聖賢故事于西城内殿、國家有賜屏風朝鮮國、命諸畫員畫之、先生總裁焉、未果而病沒、享年五十六、先生内謹外温、一家修睦、出接衆人、曲盡欵洽、其於畫事、卓越一世、名滿海内、山水平淡圖、最其所長、雲霧縹渺、茶榊村落、人物舟車、出沒有無、清遠之致、超神入妙、於是、王侯士庶、以繪素請者、踵瀉戸外、負笈問業者無虛日、一時朝聘會同、饋送投贈、必得其一筆片幅、以壯行色、輝同人、且鑑古畫最精審、海内賞鑑家、仰如山斗、雖有一二異議者、遂斂襟服之、其精研勤苦、老益激勵、乘燭達旦、揮灑不倦、嘗戒子弟曰、蓋天命也、汝等莫以閑畫爲貫、惟業是勉、何以宴安、荒墜世業乎、其敎導之嚴、皆是類也、以故名手多出其門、嗚呼先生可謂畫家倫魁矣、子弟以其遺物、不忍廢而棄之、相與爲不朽之計、余奚爲不可、乃銘曰、終始謹嚴、小心翼々、統承家業、精研勤職、名在丹青、遠達異域、育英養才、桃李惟馥、賞鑑稱密、與贈必得、筆法深造、世所法則、官念其勞、恩寵隆盛、惟茲遺筆、密其墓側、復銘功行、表其遺德、文化五年歳次戊辰十一月、西城侍醫成島勝雄撰。彰考館生員大關廉德書。

惟信又往々和歌を詠じき。古畫備考その數首を載せたり。然れども常信の如く巧ならず。天明七年の武鑑には「三百表、父榮川、養川法眼惟信」とあり。

惟信の妻は田沼侯の子山城守の妾の妹(狩野友信妻)にして、御醫師千賀道隆(法眼久頼)の養女なり。榮信、庄之助(早世)の二子及三女(長女は榮信の妹、御小納戸安藤筑後守定規に嫁し、庄之助の妹、一は御小姓組近藤元五郎信敬に、一は奥御右筆組頭大前能次郎勝明に嫁せり)を生めり。榮信後を嗣ぐ。

白川榮信

惟信の弟榮信は初名岡七郎、白川と號す。會心齋筆記に曰く。

「安永七戊戌年六月廿一日　狩野白川儀、奥御書御用ニ差出候樣可被致旨、於土圭之間、父榮川院ゟ米倉丹後守殿御書付ヲ以被仰渡候。同日白川儀儲嗣、御目見以上之通被仰付候。順之儀者、養川次與相心得候樣、水野出羽守殿被仰渡候。

同年九月十三日　無足部屋住ニ而相勤候ニ付、御金五拾兩年々於奥被下置候。

同年九月廿六日　御衝立御書相認候ニ付、白銀五枚、於奥拜領仕候。
同年十二月廿二日　御書御用相勤候ニ付、白銀三拾枚於奥拜領仕候。
同八己亥年十二月廿四日　御書御用相勤候ニ付、白銀三拾枚、別段白銀貳拾枚、於奥拜領仕候。
同九庚子年十月三日　俊明院様御轉任被爲濟候爲御祝儀、白銀五枚於奥拜領仕候。
同年十一月十二日　病死仕候。歳二十七。法名知信院即沐日行。池上本門寺ニ葬申候。
右恭信儀侍登人御座候。(古書備考曰、銀次郎)寛政二庚戌年六月六日、新御番小池重蔵義綿養子ニ罷成候」。

伊川院榮信

榮信初名榮二郎、伊川院と稱し、玄賞齋と號す。その傳記を尋ぬるに、會心齋筆記收むる所の養川院書上げは、寛政十年以後の事に及ばず、爾後の書上げの會心齋筆記の如く詳密なるものなきを以て、今同筆記錄する所の文書等を參へ、これを編すること左の如し。

安永四乙未年八月晦日　武州ニ而出生仕候。
寛政三辛亥年十二月廿二日　公方様ゟ御目見仕候。
同五癸丑年十一月七日　父養川院勤方之通、見習可相勤旨、於御右筆部屋様類、御老中御列座、松平伊豆守殿被仰渡候(古書備考に「天明五年從部屋住奥御用相勤」とあるは誤ならむ)。
同七乙卯年三月五日　小金野御鹿狩御供被仰付、奥向ニ而御供相勤申候。於奥猪拜領仕候」(以上會心齋筆記、養川院書上本文)。
同十二年　「書山水諸名勝于内殿障壁」(筆冢銘)。
享和二年十二月十六日　敍法眼(古書備考)。
文化二年三月十四日　「於御右筆部屋縁側、御老中御列座、若年寄侍座、貳百俵高ニ被成下、戸田采女正殿被仰渡」。
同三年十二月　「西丸御休息御繪認ニ付、拜領物、銀三拾枚、白羽二重三疋」(會心齋筆記)。
筆冢銘曰「文化三年書畫賢故事於西城」
同五年「正月二日　御小納戸頭取ゟ申來り、罷出候處、御小性頭取安房守申達、父養川院通、三國志并大阪御陣御屏風相認候樣被仰付、且三番ニ罷出候樣達之、笹之間ニ而御用掛衆ゟ御禮申上候」。
同年　「養川院病死御屆、正月十三日差出候處、同月廿三日御免、被仰付出勤」。
同年「正月廿八日　備中守殿御引ニ付、攝津守殿、於時計之間御達、朝鮮國王ゟ被遣候御屏風御用之儀、養川院之通、頭取相勤候樣、御書付ヲ以、被仰渡(中略)夫々備前守殿、備中守殿、攝津守殿ゟ御禮ニ罷越、奥ニ而者笹之間にて御用掛衆ゟ御禮申上候」。
同年「四月三日　五時過登城、於菊之間、御老中御列座、若年寄侍座、牧野備前守殿被仰渡、養川院家督不殘伊川ゟ被下、右之通被仰渡、奥ゟ相廻候所、吹上御成ニ付、御前御禮御序之節ニ相成、本日ハ御側衆ゟ計御禮申上退出」。

「文化七 戊午年九月、九日、十日之内トアリ、於時計図、植村駿河守殿御逝、上野御本坊御學問所御張付御繪致仰付、伊川、真山水、中彩色砂子撒引、御杉戸一仕切、表裏共緞子、右御褒美、十二月、日限書留無之、牧野備前守殿致仰渡、時服貳ツ、上野ヶ別段白銀五枚、縮緬貳反被下、進藤日向守ヶ文通」(以上會心齋筆記)。

同七年 「猪寫緑山大猷大君所畫架廉」(筆冢銘)。

同八年 朝鮮屏風「二雙伊川」(古畫備考)。

同年 「畫殿之久能山廟」(筆冢銘)。

文化十二乙亥年五月廿四日 「上野御本坊御學問所御張付御繪致仰付、伊川、真山水、中彩色砂子撒引、御遠棚御袋戸、上四枚四季草花、下二枚唐子遊、御杉戸九尺二枚、表日出ニ鳳凰、裏緞子、午年トハ御好ミ替ル、一、御内佛御壇御繪四枚獅子」(會心齋筆記)。

「文化十三年十二月十六日 敍法印」(古畫備考)。

「文政十一年七月四日 病死、年五十四、法名伊川院榮信日宜、葬本門寺」(同前)。

文化十年の武鑑に「奥見書、二百石廿人ヲ、父養川院、水戸ヲ伊川法眼榮信」とあり、曾て武藏野繪詞一卷及武藏野十勝手鑑を畫く。古畫備考錄する所左の如し。

武藏野繪詞一卷、詞堀田攝津守正敎撰、畫屋代太郎、日下部鉦之助清書、繪伊川院、清川院兩筆、跋大學頭林衡作、林述齋、塗唐紙著色。

跋 文化乙亥臣、我烈祖上僊二百年、天朝特發皇華、有事日光山、東都亦於楓山殷祭焉、王人竣事來都、有諸各奏長技、事成罕遊、洵稱雍熙之盛典矣、堅田侯爲紀其顚末、又使書博圖之、此足以併觀其盛也、丁丑季春月、大學頭林衡拜跋。

武藏十勝手鑑、文政十一年任太政大臣之後、被進京都、御手鑑、伊川院筆、霞ヶ關、三吉野、角田川、竹芝浦、向岡、小山田關、荒間崎、堀兼井、玉川、武藏野、紺色紙形、砂子撒引、彩色。

本門寺榮信墓側に一碑あり、題して筆冢銘と云ふ。その文亦傳記を補ふに足るを以て、多少の重復を顧みず、左にこれを掲ぐ。

甘棠不伐者、不忘所憩也、羊衆不食者、不忍所嗜也、禮云、父沒而不能讀父之書、憲其在斯歟、文政戊子七月四日、畫院法印伊川先生卒、其葬在城西本門寺後山、襄事之後、子弟聾視其退筆累々於几案間、不忍廢棄、齊之于墓道之側、而請余勒銘其上、余父祖、與先生祖考、同歷事二朝、寬政之季、余以祖蔭、承乏內班、而先生既先在焉、兩後余與先生相親、殆垂四十年、常談論古今、莫逆於心、而其赴之至、哀側其可如何、先生諱榮信、號玄賞齋(中略)其祖榮川君諱典信、考養川君諱惟信、明安之交、父子相並爲畫院冠冕、拔擢亞大醫院、先生幼岐嶷、有跨竈之目、考養川君曰、吾兒筆力遒勁、大存古韻、吾遊不及、年甫十一、襲召、同父祖侍燕間作畫、今大君嗣緒、復召於內院作畫、其名益鳴、寬政三年十一月、執贄拜謁、蒙旨常侍內院、先是高祖妣岡部氏喜齡八十、善和歌、大君使祖考及先生同畫一大幅、而又命考妣、題和歌、獻之、朝野榮焉(中略)享和二年十二月敍法眼(中略)五年正月養川君卒、四月襲家祿、先是、養川君新製三國志畫傳、未完而卒、命先生補成、是年韓使來聘、國家例賜畫屏風於其國王、先生總裁之、亦畫其二雙(中略)文化十三年、陞班敍法印、凡奉旨所製、長篠、長欽戰場、金原遊獵、舞樂蹴踘諸圖、其他天朝進御、及親王大臣諸侯恩賜、蓋莫不出於其手矣、故宗室貴胄、得其殘毫剩楮、爭蓄稱寶、其於密定、燭照龜卜、皐陶父祖、海內賞鑑家、仰之爲山斗、文政十一年六月晦、退朝、其夜病發、七月四日易簀、得年五十四、其妣千賀氏、配松尾氏、繼配齋藤氏、其男五、長法眼晴川養信、次與禎、信章、信固、信光、女二猶幼、先生體骨豐偉、人望而畏之、然其接人和暢、談笑不倦、待遇門人、殆有骨肉之愛、惟嗜摸寫、達旦不倦、余嘗慮其精苦他日成病、爲諫數四、先生曰、吾以此爲樂、一朝

殞命於筆硯間、吾分也、奚疑焉、余以是登知北神韻高尚也(銘 略)文政十一年歳次戊子南至、侍讀成島司直撰文、備後守從五位下平朝臣直恒書并篆額。

この碑文にも見えたる如く、榮信初め稻葉丹後守家來松尾多宮直常の女を娶り、後黑田備前守家來齋藤某の女を娶り、六男、四女を擧ぐ。長子養信、その妹某、(三好長十郎妻)その弟興禎、(朝岡氏を嗣ぐ、後に出つ)千之丞、千之亟の妹加受、(以上母松尾氏)その弟信章、(嗣之亟、舒顯、奈美、鹿嶋某、文政十一年十月晦日病死、年廿一)蕃川、(中條、狩野、友川養子)晴雪(立花、中條家を嗣ぐ)及晴雪の二妹(一は狩野嗣白妻、以上母齋藤氏、一は早世)これなり。養信後を嗣ぐ。

晴川院養信

養信幼名庄三郎、初め玉川と稱し、後晴川院と云ひ、會心齋と號す。寛政八年七月廿六日生る。文化十年の武鑑に「見習、父伊川」玉川」とあり。狩野勝川先祖書(狩野探幽)に曰く、文恭院樣御代文化七午年十一月廿八日、父勤方之通見習被仰付、月次、五節句御禮罷出、同十一戌年十二月十日、部屋住高貳拾人扶持被下置、文政二卯年十二月十六日、法眼被仰付、同五午年正月廿五日、部屋住高貳百俵被成下、同十一子年七月八日、父伊川院病死仕、同年十月四日跡式無相違被下置、(古畫備考曰、同十二年類焼、傳來之古書畫多器焼失)天保五午年十二月十六日法印被仰付、(古畫備考に曰く、同九年、西丸新殿御畫御用頭取、同十二年文恭院樣御畫像相認、同十四年日光御參詣御供相勤、同十五年、御本丸新殿御畫御用頭取、弘化三年五月十九日(勝川先祖書は廿三日とあれど、過去帳は十九日に記載せり)病死、年五十一、法名晴川院養信日叡、葬本門寺、(天保七年の武鑑には「二百石廿人フチ、義法眼列、御畫御堂、父伊川院、木挽丁」晴川院法印養信」とあり。新營大城畫壁筆者人名(左之通大岡主勝正殿御書取ヲ以テ晴川院(御筆備考)相成候旨、同人申聞申候、古畫備考)に依るに、養信が天保新營江戸城に畫ける障壁左の如し。

御休息御上段、御下段
御座之間
御白書院御上段、御下段
大廣間、鶴溜
御座之間御小襖上四枚四季折枝、中二枚琵琶枇杷折枝、下四枚入櫛社若
御座之間西御縁御杉戸九尺、桐鳳凰、紹鷗寫
御同所南御入側御杉戸二間、許由、雪声筆
同御杉戸二間、林和靖、鶴子
同御杉戸二間、陶淵明、白鷺
御成廊下御杉戸九尺、太公望、兎
大奥御對面所
同御化粧之間御小座敷名所松壺ノ
同蔦之間祝引、蔦ニ小鳥
同御對面所御違棚御小襖上四枚奈良八景、下四枚梅ニ鶯
同上御鈴御小座敷御違棚御小襖上四枚朝鮮持渡鷹
同於定の方部屋小襖上四枚春ノ富士
同於美津の方部屋小襖上四枚嵐山櫻
同御對面所御入側御杉戸九尺、孔雀牡丹、猫ニ鹿
御同所御杉戸九尺、花鳥、海棠ニいんこ
同御下段御二之間境御杉戸九尺、四王母、波ニ千鳥
同御二ノ間、御三ノ間境御杉戸九尺、菊慈童、經巻登リ
同溜御杉戸九尺、蘆見字白、波ニ兎

養信の傳記を補ふに足るもの、本門寺の會心齋先生筆冢銘(二城留守成島源蔵文、備後守岡村恒郎銘、井奇弘化三年秋八月)あり。その文に曰く。

(上畧)君年市十五、以文化七年、奉朝請、給繪事、當時恭廟好畫、機餘出畫題、以試諸工優劣、君最少、所製多稱旨、(中畧)十一年(文政)丁巳考槃、悲慕罔極、爲製道經圖、

以資冥養(中略)天保四年稲葉縁山猷廟親書架廉(中略)君夙荷恭廟眷顧、上自九重進御、下至宗室諸侯頒賜、揮灑殆無虚日、以故前後恩賚、亦不勝枚舉云、及先朝遷職、今大君承統、恩遇如故、九年西城災、命書新殿、十二年恭廟寅天、特賞御容、又賜親製竹篤(中略)十五年大城災、諸工分書隔壁、其明瞭處、皆出於君手、若大殿巨於、蟠根二丈餘、庶工視之卻走、君提椽筆立祝、一揮而成、森然有飛舞之勢、觀者靡不驚嘆、凡國初以來、畫員未有如君一人併書兩殿者、世以爲榮、而其期程之峻、殫思之勞、君亦殆率矣、壬寅之秋、以病洛乎熱海温泉、少痊、至弘化三年春再發、往其不起、竟以五月十九日卒、得年五十一、臨危猶寫不輟、可謂篤矣(中略)君性温雅饒才致、其秀韵時溢乎縑素間、又以博涉圖書、其書確有依據、最愛土佐氏古圖、若藤澤寺縁起法然上人書傳等、曆摹以傳于家(下略)

文中言ふ所の蓮經圖は、古畫備考にその跋を錄せり、即ち左の如し。

右皆門品圖一卷、先考玄賞齋法印日宣府君喪制恋慕之餘、酒敎行之涕淚、終成書寫之完功、永納于長榮山本門精舍、伏冀、冥福增進、速歸寂光、文政十一年歲次戊子秋七月、法眼藤原養信薰沐拜書(印)

天地畫龍　故伊川院二男藤原興禎朝岡氏嗣、三十郎

經線散花　故伊川院三男藤原信章狩野氏、嗣五

故伊川院四男藤原信固狩野氏、童四郎

故伊川院五男藤原信光狩野氏、嗣五郎

晴川院繼子榮二郎子時六歲

朝岡興禎

養信安藤筑後守の女を娶り、雅信、女子早世及泰善二郎、嗣朝岡氏を擧ぐ。雅信家を嗣ぐ。

養信の弟興禎は、文政三年九月朔日出でゝ朝岡興邦の嗣たり、初名信義、通稱初め三之助、又三十郎、三次郎と云ひ、平洲と號す、天保元年十二月十二日、將軍家慶公に召出されて御小納戸と爲り、尋いで御繪番掛と爲り、公の寵遇を受く、同四年三月廿八日父興邦病死し、六月三日家督を相續し、武藏國都筑郡の内にて五百五十石を領し、裏六番町に住す、弘化元年大城再營の時、雁之間御小襖、上四枚朝鮮持渡唐下二枚波二千鳥及御同所御張付墨繪鷹、御小納戸朝岡三次郎、古畫備考に出づを畫く、嘉永五年八月十四日病を以て退勤して寄合と爲り、同六年三月廿七日、願ひて致仕し、隱居料として高三百俵を賜はり、同月廿九日剃髮して三樂と號す、安政三年四月廿七日病死せり、享年五十七、四谷全勝寺に葬り、法名を白峰院幽水三樂居士と云ふ。

男重三郎家を嗣ぐ、女子二人あり、弘化、嘉永の頃、古畫備考五十六册を著す、第一卷に「庚戌八月十二日起筆」、「朝鮮書畫傳の上に「弘化二年三月三日起筆」などあり二、二ノ廿七起筆」下に「弘化二年三月三日起筆」などあり その編述に從事するや、陽春三月尚家門を閉ぢて出でず、或は徹宵筆を擱かざることあり、家人諫むれども聽かず、死に臨みて重三郎に遺言し、その稿を勝川院の家に致さしむ、この書後東京美術學校の藏に歸し、轉寫して學者に賞用せられしが、太田謹これを增補して、明治三十七年六月これを刊行せり、我が國畫傳諸書の中、堀直格の著せる扶桑名畫傳と相並びて、洪澣その右に出づるものなし、同書首卷に狩野友信翁の寫せる興禎の肖像と興禎の畫ける梅月圖巾宣博物館藏を載せたり、本傳は主として片野貞郎子の同書解題に依れり

勝川院雅信

雅信は木挽町家最終の畫家なり、幼名榮次郎、勝川院と稱し、素尚齋と號す、その自記の履歷書寫、狩野謙桐藏左の如し。

文恭院樣御代天保六乙未年十一月朔日　父勤方之通り見習被仰附、冒、於御右筆部屋縁類、御老中御列座、大久保加賀守殿被仰渡。

同八丁酉年十一月十二日　奥御用出精相勤、家業宜候ニ付、新規御扶持方貳拾人扶持被下置候旨、於御右筆部屋縁頰、御老中御列座、松平和泉守殿被仰渡」。

弘化元年甲辰十二月十六日　法眼被仰附候旨、於桔梗之間、御老中御列座、阿部伊勢守殿被仰渡(この時同日法橋、法眼に叙せられし口宜案、狩野讃柄藏せり)。

同三丙午年五月廿三日　父晴川院病死仕候ニ付同年七月四日、晴川院願置候通り、跡式無相違私へ被下置候旨、於菊之間、御老中御列座、阿部伊勢守殿被仰渡」。

其後嘉永五壬子年十二月廿八日　度々重々御用向相勤候ニ付、出格之譯ヲ以テ勤中御増扶持拾人扶持被下置候旨、於御右筆部屋縁頰、御老中御列座、松平和泉守殿被仰渡」。

萬延元年庚申十二月十六日　法印被仰付候旨、於芙蓉之間、御老中御列座、久世大和守殿被仰渡候。

榎本武揚の五稜廓に在るや、書を惟信に寄せて江戸脱走を勸めしかども從はず。榎本降伏の後、その書を焼けりと云ふ 明治維新の後舊幕府の繪師及木挽町家の門人中畵技稍勝れたる者、多く海陸軍の製圖に從事して以て口を餬し、雅信にもこれを勸めけれど、苟も畵家たる者何ぞ製圖を事とせむやとて從はざりき。狩野謙 されど爾後官府の辭令書を見るに左の如き履歴もあり。

明治十年二月廿八日　雇申付、日給金五拾錢、出頭日數ニ應じ給與候事。米國博覽會事務局。

同年七月二日　同上。内國勸業博覽會事務局。

同十一年一月卅一日　内國勸業博覽會事務繁劇之際格別勉勵ニ付、爲其賞金貳拾圓下賜候事。同上。

同十二年一月七日　御雇申付。月給金貳拾圓下賜候事。大藏省。

同年三月卅一日　佛國博覽會事務格別勉勵ニ付、爲手當金拾五圓給與候事。佛國博覽會事務局。

木挽町の邸は明治五年上地となり、妻いの實家鍋島直茂の家（今の赤十字社の門の左）に寓し、明治十二年八月八日、歳五十七にしてこゝに歿す。弘化元年勝川が江戸城の障壁に畵きたるもの左の如し。（備考）

御休息御入頰水車
竹之御廊下
櫻之間
御舞臺
御玄關遠侍
萩御廊下御杉戸九尺、横ニ鶴、狩野鍋
御成廊下御杉戸九尺、太公望、兎
御三之間御杉戸九尺、張子房、芦雁
牡丹之間
松之御殿御休息御入側御杉戸九尺、布袋唐子、若松雉子
下御鈴口御杉戸九尺、松ニ鶴、布袋唐子
御同所溜境御杉戸九尺、柳ニ鷺、蜀葵

御客座敷後御廊下御杉戸一間、書松畫上馬上、梅ニ鶯　御同所脇御杉戸九尺、夕顔、書木畫

嘉永五年にも西丸の御休息、大奥御新座敷（徳川院殿之後貞御用ひに相成候間記載）及大廣間（御杉戸、御天井共）を畫けり。（備考）その曾て幕命を奉じて畫稿を草し、又は畫の半ば成りし長篠、長久手合戰屏風等ありしが明治十九年七月廿九日、その嗣狩野謙柄、（慶應元丑年十一月廿一日生、畫を業とせず）これを博物館に獻納せり。雅信の肖像は友信翁の家に存ぜり。

（鍛冶橋家、後藤家、守信）

鍛冶橋家（家之紋丸之内三ツ矢、同替紋五七桐、葵之紋丸之内三ツ矢）は探幽を祖とす。探幽は孝信の長子なれど、別に家を成し、尚信父の後を嗣げり。探幽幼名を宰相（十歳のとき改めり）と云ひ、後妥女（十三歳のとき改むる。）を祖父の門人興以に學べり。法眼に叙せらるゝに及び、三代將軍の旨を承けて剃髪し、諱を守信と云ひ、探幽（又探畫）と稱す。別に白蓮子の號あり。筆峰大居士生明の號は、後水尾法皇の賜ふ所とす。法印に叙せらるゝに及び、宮内卿法印と稱す。左に編年體を以てその傳記を叙す。

「慶長七壬寅年正月十四日　山城國ニ而出生仕候」（會心齋筆記）。

同八年　「三歳時、孝信戯授筆、其泣忽止、屢試之、每々皆然、見者異之」（筆峰文集碑誌）。

同十年　「四歳自執筆抹墨、其圖殆如習熟者云」（同前）。

「慶長十七年正月　十一歳之時、於駿府、權現樣ゟ初而御目見仕、於御前、御繪御用度々被仰付相勤、御紋付御小袖拜領仕候」（狩野探淵先祖書狩野探岳藏原本）。

幡大菩薩ト被遊候御書、權現樣ゟ御直ニ拜領仕、今ニ所持仕候」（狩野探淵先祖書狩野探岳藏原本）。

「同十九寅年、大阪冬御陣之節御供被仰付、十三歳之時江戸ゟ下り、台德院樣ゟ御目見仕、御席書被仰付、御好ニ付、海棠之花下ニ猫を畫き候處、祖父永德之再生也與上意有之、御褒美頂戴仕、引續き奥勤被仰付相勤。台德院樣御筆御詠御連歌三首幷金地扇面ゟ歌之御筆拜領仕、今ニ所持仕候。御席畫之儀此以前迄畫家ニ無之、於御前諸家寄合之節、御席畫御免被仰付、依之、御召御羽織頂戴仕候。右ニ付御席畫之儀者、家ニ重々相心得申候、繪事後素與申印（この印今狩野探岳藏せり）拜領仕候。乍併、用候儀恐多候ニ付、右之通之印一通爲別相用、二通共今ニ所持仕候」（同上）。

「元和二辰年　十五歳之時、紅葉山御宮ゟ龍を畫き候。日光山陽明御門ゟ龍幷天人之繪、其外御繪御用相勤、東叡山、三緣山御宮御廟所ニ龍を畫き申候。依之、龍を畫き候事、家之例與相成申候」（同前）。

同三丁巳年　月日相知不申、御新規被召出、御繪師被仰付」（會心齋筆記）。

同六年　「天澤寺納候春日局畫像者、蒙上意、於御前相認、御褒美頂戴仕候」（探淵先祖書）。

元和七年　「台德公御覽御畫工所圖、守信筆勢殊勝旨、爲官物、時十六歳、既得拔群之譽」（碑誌）。

「同七酉年、月日不知　於鍛冶橋御門外、千三拾三坪餘屋敷拜領仕候」（探淵先祖書）。

會心齋筆記はこれを元和三年の事とし、「惣領ニ御座候得共、父孝信遺跡相續不仕、別家ニ罷成候」と記せり。別家の事は信ずべしと雖も、屋敷拜領の

年次は、探淵先祖書を憑るべしと爲す。狩野探岳所藏舊記にも「右拜領屋舗、元和辛酉年、祖父探幽拜領仕候、月日之儀者、年久敷儀ニ御座候ニ付、疑無覺候者も無御座候」とあり。又同舊記に曰く「探幽拜領以後、代々不相替住宅仕、只今孫探船住居仕候。町家ニ被仰付候儀者、元祿拾二年卯三月御願申上、河岸通り間口京間拾三間三尺七寸、裏行五間半、町屋ニ被仰付候。中通り間口京間拾七間、裏行拾五間、享保元年申五月御願申上、町屋ニ被仰付候神田松永町、坪數九拾坪被下置、鍛冶橋門外の邸地は即ち今の京橋區五郎兵衛町廿一番地これなり。狩野探岳所藏に地圖及住家の圖あり。

「同九亥年　大阪御城御殿向御繪御用相勤」（同前）「夫ゟ御本丸、西丸御殿向御書相認申候」（會心齋筆記）。

「大阪御城案内之記△印名簿

御城築、元和六申年二之丸、寛永元子年御本丸

「御本丸御座敷井御廊下繪樣之次第」

「一御料理之間、御清之間とも云　探幽　ね羽鶴之繪（古畫備考）。

「一御城廊下　竹雀　狩野探幽」

「一御黑書院（四之四共、山水西湖、小壁押繪色々、天井鶴繪押繪）　狩野探幽」

「一同御次之間（二間共、琴海之圖、林和靖、李白、ケモノツクシ）　右貳人（探幽と右近となり）

「一御庄之間（御二間共、小壁山水、四之小壁、四季山雪山水）　狩野探幽」

「一御休息之間　狩野探幽（狩野忠信舊記）。

△御杉戸水呑の虎、△同鳴鹿龍入、北側御杉戸△雨之景之繪

一御黑書院繪樣壁繪山水耕作之繪　同

一銅御殿繪樣壁繪山　同

白土塗御襖ニぬれ鶴之繪

御襖東之方御長押上、△大猷院樣御筆とも傳、鶴、御緣類杉戸あ

「寛永三寅年　二條御城ゟ行幸之節、右御殿向御繪御用相勤」（同前）「監司小堀氏（普請奉行小堀遠州政一）爲之運設重架、故殿內不明、爾於運筆、守信乃撤其架、結約焦箸於竿頭、逕足之間、縱橫自在、假點假畫而飾之、不日丞成、僉曰、實非尋常畫者所及也、時年二十五歲、聲名籍甚」（碑誌）。

現在の二條離宮式臺之間、大廣間、老中之間等、皆探幽の筆と稱す。行幸殿は今存せず。

「同五辰年月日不知　御扶持方貳拾人扶持被下置」（探淵先祖書）。

「寛永七年　先生四十八歲秋、先生即東行、到勢州桑名、偶命酒井忠世、土井利勝、爲使价、赴洛、兩使逸鈞命、使先生相共入京、今般有即位之事、先生從兩使入禁庭、寃其儀、使畫工狩野守信圖之」（羅山年譜）。

「寛永十年　信州太守永井尙政、改野州古河、徙封城州淀城（中略）使畫工狩野探幽、圖東帶天神像」（羅山文集）。

「同十三子年　蒙上意、東照宮緣起相認、同十七辰年五月十一日、右御緣起相認候爲御褒美、御帷子二、御羽織、銀百枚被下置、頂戴仕候」（探淵先祖書）。

「同十四丑年　增上寺安國殿御繪御用相勤」（同前）。

「同十五寅年十二月廿九日　剃髮、探幽與改名、法眼被仰付、御流、時服等頂戴仕」（同前）。

「探幽繪畫候事上手ニ付、法眼被仰付候。其後上意ニ、探幽法眼に被仰付、御後悔に被思召候。繪の上手なるに御ひかされ被遊、官位被仰付まじき者に

被仰付候由(寛永小說)。

「探幽齋狩野守信、應勾命而祝髮、薦于法眼、遂閉此盛事、予亦不勝歎抃、賦一偈以賀之云、法眼拈來活氣禪、道人會得舊因緣、硯中一滴曾源水、畫出江山万里天、欠伸子宗玩(古畫備考)。

「同十八己年二月　禁裏御造營ニ付、紫宸殿賢聖之障子、其外御繪御用、上京仕相勤(探淵先祖書)。

「畫工狩野探幽守信禁中繪事命せられ上洛するにより、御前に召て面命の旨あり(德川實記、同年二月廿日の條)。

「馬拾三疋、從江戸京都迄、上下可出之、是者禁中御繪之御用ニ付、狩野法眼弟子召連上候時被下者也、寛永十八年二月十九日、傳馬宿中(狩野探岳藏文書)。

「同年九月　日光御繪御用相勤(探淵先祖書)。

「馬五疋、自江戸日光迄、上下可出之、是ハ彼御山へ御用ニ付而參候時、狩野探幽ニ被下者也、寛永十八年己九月八日、右傳馬宿中(狩野探岳藏文書)。

「同年月日不知　仙洞女院御所御繪御用相勤、御褒美頂戴仕候(探淵先祖書)。

「馬六疋、從江戸京都迄可出之、是者禁中御繪之御用ニ付、狩野法眼重而罷上候時被下候者也、寛永十八年九月廿六日、傳馬宿中(狩野探岳藏文書)。

「同十九年　朝鮮人來貢之節、國王ハ被遣候御屏風御繪御用相勤(探淵先祖書)。

「寛永二十年七月　與朝鮮通士朴安期話、先生曰、本邦畫師狩野探幽、初謁足下云爾、安期曰、異地奇遇良幸、筆端風雨、可得見乎、幸傳道之、安期曰、欲以數幅携歸故國、我當以拙詩報之、先生曰、可求畫橫、安期曰、隨其所長、何必橫爲、然山水倒毛吾所喜、安期曰、先生作我眞贊、書其上、又大幸也、此時、安期請探幽求其寫眞、探幽即座揮之(羅山文集)。

「應朝鮮通士求、題其畫像、畫者狩野探幽之所圖也(羅山詩集)。

同二十年　「寛永廿年の秋の頃より、いとおもく煩ひ給へば、大樹入齋し給ふて(中略)いますがほどのかたちをだに殘さむとて、侍臣忠秋を御つかひにて、其頃の上手にすめる狩野法眼探幽繪師に仰て、かほかたちうつさせ玉ふ。寂後にも又かゝせ給へり(慈眼大師緣起)。

「大將軍特命畫工探幽、繪其頂相、以備瞻禮(東國高僧傳)。

正保四亥年月日不知　御本丸大廣間御繪御用相勤、御褒美頂戴仕、其後西丸大廣間御座之間、御黑書院柳之間溜等、御繪御用相勤、其節々御褒美頂戴仕候。大猷院樣ゟ御繪御指南申上候ニ付、御筆鶴鴿之御畫、御直ニ拜領仕、今ニ所持仕候。殿有院樣御筆柳燕并鶏之御畫、御直ニ頂戴仕、今ニ所持仕候」(探淵先祖書)。

慶安二年　「家康公參內之圖、右洞畫妙法院二品親王筆然之染毫也、畫圖狩野法眼守信之所描也、爲後來龜鑑、加走禿兎而已、慶安二年臘月十七日、毘沙門堂大僧正公海判、小笠原遠江守殿所持、卷軸、彩色、同畫拔とし料紙金泥下繪、探幽(古畫備考)。

承應元年　「人足八人、馬五疋、自江戸日光迄、上下可出之、是者彼地御佛殿繪之御用、探幽法眼被遣候時、被下之者也、慶安五年八月六日、傳馬宿中(狩野探岳藏文書)。

明暦元年「二月日不知　禁裏御造營御繪御用被仰付、上京仕相勤、御褒美頂戴仕候」(探淵先祖書)。

「人足八人、馬拾三疋、自江戸、京都迄、上下可出之、是者禁中御作事ニ付、探幽法眼罷上候時被下之者也、承應四年二月九日、傳馬宿中」(狩野探岳藏文書)。

「賢聖之障子繪、探幽廿四年以前被仰付候節、極彩色人形繪代、本途三割增、壹坪銀三百廿五匁ッヽ」(潤菴隨筆二禁裏御造營記畧)。

同二年三月一日　「依召參內、頭辨同召、法眼探幽召、勾當內侍車寄御屏風、懸物等書之、乘燭之後退朝」(宣順卿記)。

「寛文二壬寅年　禁裏御用相勤、仙洞御肖影寫ニ付、筆墨大居士與申書印(この石印狩野探岳藏せり)并仙洞御所御宸筆御詠頂戴仕候ニ付、遂上聞、入上覽候處、大切ニ所持可仕旨蒙上意、今ニ所持仕候」(探淵先祖書)。

「後水尾院ノ御影ハ、御グシヲ妙法院ノ堯恕親王ノアソバシテ、御衣紋ヲ探幽ニカヽナレシ由、御製集ニ見エタリ。左ニテ候ヤト覽フ。仰、イカニモ左ヲ通リ也。ソレヲ永納ガ本朝書傳ニ探幽ヲ召シテ御影ヲカヽサレシコトヲ載テ、御首ヲ堯恕親王アソバセシコトハ載セザリシ。央倦ガ生テ、居パ書スベキモノヲト仰ラル」(槐記享保十三年九月十四日の條)。

「此時應太上法皇側、忝拜玉体、令探幽畫之、今所藏于般舟院之尊像是也」(本朝書史)。

「詔命して名を筆峰生明と賜ふ」(万實全書)。

「寛文二年　禁裏御造營紫宸殿賢聖障子相認」(古書備考)。

「賢聖之障子繪(中畧)十四年以前探幽新襖ニ付、四百三拾匁ッヽ、被下之」(禁裏御造營記畧)。

「同年五月廿九日　法眼被仰付」(探淵先祖書)。

「上綱四社中納言寛文二年五月廿九日宣旨、法眼探幽、宜叙法印、廉人頭右中辨藤原昭房奉」(狩野探岳藏口宣案)。

「畫工狩野探幽守信は、丹青の妙古今に秀で、節すでにかたむけり。よて、祖先の例により、法印に叙せらる。されど畫工の事たれば、坐班は法眼の次たるべし」(徳川實記寛文二年五月廿九日の條)。

「此節法印被叙候、學畫於高野山西方院春深」(古書備考)。

「探幽中年のころ、野山へ金堂の壁畫をものしに登られし時、寶龜院の春深法師に就いて、大師様の筆道を學び、併せて悉曇字法をもうけられしが、やがて壁畫も全く見事に出來せしかば、一山僧侶のよろこび一方ならず。潤筆の料として、黄金貳千兩を贈られけるに、探幽かたくいなみて其黄金をかへし、大師がかゝれし座右銘十六字を乞ひ得てかへられ、其兩端に野山と和歌浦との景色をものして一卷となし、代々祕藏しけりとなん」(日本繪畫史)。

佐竹侯藏信實三十六歌仙卷中、畫と歌と共に探幽の補筆に係るもの二幅あり。

同四年　「人足八人、馬拾三疋、從京師、江戸迄可出之、是者狩野探幽罷下候時被下之者也」寛文四年辰十一月八日、傳馬宿中」(狩野探岳藏文書)。

「同四辰年月日不知　河內國河內郡客坊村ニ而高貳百拾五石五斗九合、知行頂戴仕」(弘化三年書上先祖書)。

「河內國河內郡客坊村ニ而高貳百石拜領仕候」(探淵先祖書)。

「御知行所之儀、御願之通相叶候間、御勘定所ゟ之證文調進候、御請取可有之候。以上。四月廿一日 岡豐前守、狩野法印(狩野探岳殿文書)。

「御拜領之知行所可相渡之御勘定所證文、相違候故、一昨日返し給候。則申達、辰年物成ゟ可相渡旨、認直し參候間、只今遣候。御請取可有之候。以上。四月廿六日、岡田豐前守、狩野法印(同前)。

「覺　　河内國河内郡五條村之内　客坊村　　内　　山年貢　定納

一、高貳百石　　拾五石貳斗六升者

右之所、從去々年辰物成、狩野探幽ニ被下候間、可被相渡候、御老中御證文ハ御勘定所差出候ニ付、如此ニ候以上。　　此銀百五拾貳匁六分

寛文五年巳九月　　殿樂七左衛門　長谷川太良兵衛

寛文六年午四月廿一日　　竹村八郎兵衛　殿樂七左衛門　長谷川久兵衛

鈴木伊兵衛殿(同前)。　　鈴木儀兵衛殿(同前)。

「覺　　河州河内郡五條村之内　客坊村

一高貳百拾五石五斗九合　　知行所地圖二面、狩野探岳所藏に存す。

「權現樣、台德院樣、大猷院樣御尊影奉寫候ニ付、御褒美頂戴仕候。仙洞御所御宸筆、御代々樣御筆大切ニ所持仕度候ニ付、出火持退之節、御紋附御挑灯四張、空色白之御數幕貳張、是者途中休息之節相用度、御下ゟ切奉願候處、願之通被仰付、今ニ所持仕候。右之外御繪御用度々相勤、其節々御褒美頂戴仕候ヘ共、數度之類燒ニ而書留燒失仕、相分ヶ不申候(探淵先祖書)。

「東照宮樣御影、探幽相勤候(御座像、御冠上迄凡一尺三寸餘)(御代々御影例書扣)「大猷院樣御尊影、探幽法印相勤申候(座、一尺七寸三分餘)(同前)。

「寛文十年二月晦日　狩野探幽今度泉涌寺ノ繪畫スルニ依テ銀子五十貫目ヲ玉 フ(玉露叢)。

古畫備考宮殿筆者泉涌寺の條に見えたる探幽の畫、左の如し。

一、御座之間岩ニ松鶴　　一、景福殿次之間

一、武家之間岩ニ雪、松竹梅　　一、將軍家御位牌所左右畫

一、天子樣御位牌所襖畫

同年「六十九歳之年、中風ヲ病ニヨリ、畫モ劣リ、翌年如元本復、畫又壯也(古畫備考)。

「齡踰古希、强病、起居不快、右手痛痺、然勉强乘筆(碑誌)。

「探幽宰病手足痛、養朴縮本、有探幽奉納熊野權現之畫、自畫小引云、奉神納豫州熊野權現、日月松島之繪畫幅、爲壽命長遠、手足之痛本復也者、於諸願成就、重而又可奉神納者也、宮内卿法印狩野探幽廟原守信、享年七十一歳筆(古畫備考)。

「延寶二寅年十月七日　病死仕候、年七十三、池上本門寺塋、法名玄德院日進」(探淵先祖書)。

同三年十月七日　男探信墓碑を本門寺南之院に建つ。幕府の儒官林春齋宣峰爲に碑誌を作る。

探幽の肖像(小圖第四十七)は門人桃田柳榮の畫けるもの存ぜり。その畫印も亦大抵現存す。(同圖)探幽間〻和歌を詠ぜり。古畫備考に曰く、「或縮圖ニ、正月二日駿河國にいたりて筆こゝろみるとて、時しあればけふかきそむる白妙の、富士の高根の春のあけぼの。法眼探幽畫之。」(同書又「游見安(中略)長中爲鎮宗、客殿御于社者」とあるはこの時の作か)平生林道春、明僧隱元、松花堂昭乘、(羅山文集曰「一日昭乘與守信相過、佐久間君觀衛校閱」)小堀遠州(探幽の印に遠洲の意匠に成れりと云ふものあり)等と交る。隱元禪師語錄中探幽に與ふる詩あり。隱元曾て曰く、「中朝亦如斯藝者可稀乎」。羅山集中探幽の畫に題したる賛(松花堂との合作、花卉鳥獸卷軸、寛永十六年作、風詩圖賛、同二十年作、朴安朝畫像賛等)あり。道春曾て探幽を推稱して曰く、「跨龍于父、寒氷于師」。有德院殿御實記附錄に曰く、「公の御父光貞卿には、狩野探幽守信が畫法を學び、世にすぐれたまひければ、公にも御幼稚より畫を學び玉ひける。常に探幽が畫をば南無妙法蓮華經の境にいれりと御賞歎ありける。」その當時に重んぜられしこと知るべきなり。探幽が天才を研磨するに、更に修養の篤きを以てせしことは、今に傳ふる縮圖及粉本(古畫備考に曰く、「此小縮圖本探幽法印ノ家ニ有リ出テ、書ノ世ニ歎レリ、常ニ其小圖ヲ見ル毎ニ、探幽書ノ筑紫ヲ思ズ、草本ニ寓ス所ト云ヘドモ見ツヘシ」又曰く、「探牧持傳への探幽地取を與ふといふ、又其外洞巷に沽却せし探幽狩本の頗わまた洞巷力に入るとなん」。今帝室博物館及東京美術學校に存するしの少からず)を見ても、思半に過ぐるのみならず、その收藏の古畫も頗る多かりき。(古畫備考に曰く、「探幽收藏古畫甚多し、其玄孫探牧に問いたりて大方人に散落したり」)曾て寛文中倭漢名畫七十一家の筆意に倣ひて嚴廟に獻じたることありき。(同書遠見貯守信卿學古畫跋)されば碑誌に曰へらく、「自幼弱潛心家藝、每見古畫、不限倭唐、悉皆摸之、經過勝境、則爲之少留、熟視其氣象、認得於心而去、又聞珍禽奇獸在某所、則自往寫之、至花草異品亦然、故畫品式樣、積蓄如丘、試倣謄古來名畫、則殆與眞侔矣、常自談曰、曾夢馬遠、談山水畫法、自此覺筆力進」。これ等の粉本は、生憎凡庸の子孫をして蹈襲以て業を紹ぎ家を保つに足るべからしめきと雖も、探幽が和漢古今の諸體を學び、打して一丸と爲して、以て自家の新典型を創めし所以は、即ちこれに存ぜしなり。狩野の畫風はこゝに一變じぬ。正にこれ元信が足利時代以降の狩野派に於けること同じく、探幽は實に本時代同家中興の祖たり。碑誌に曰く、「其徒有言曰、古者畫師、各有所長、又有所短、如探幽、則人物、山水、草木、禽獸諸品、皆無不得意、畫鼠則猫來窺、畫菊則蝶飛舞、畫鶯則其類集下、至繪大龍、點其睛、必致雷雨、可謂心手通神之妙也」。畫乘要略に曰く、「丹青之妙、緬超越于父、海內獨步、更無異論、(中略)所畫本墓雪舟之奇縱、於是、筆墨飄逸、傳彩簡易、而自然一變狩野氏、自成一家、天性得搜奇者也、今夫鳴當世、蜚、皆非不祗探幽之糟粕者、末流漸々失古法、而不能識其本、豈知探幽出新意有思趣哉」。閑田次筆(巻三)に曰く、「探幽の畫は、うはべか

小圖第四十　桃田柳榮筆探幽圖

ろくして、しかも千斤の力あり。學ぶ人は其力を得る事あたはず。たゞうはべのかろきこ、形をのみ寫す。故に見るにたらずといふ人ありしが、我しらぬ道なれど、實に然るべし。」槐記（享保十八年正月十六日の條）に曰く。「後水尾院ノ御時、花山のあこをたづぬる、（中略）右ノ歌ノ圖ヲ探幽ニ書サレシニ、同シ枯木ノ雪ヲ畫クニ、櫻ノ枯木ニ雪ノツモリタル圖ヲ書タリ。ソノ屏風ヲ御覽アリタルニ、誰ガ見テモ外ノ枯木トハミエズ、櫻ノ枯木トナラデハミエズ。是ガ探幽ガ心ニ習ヒテ手ニウツシタル故ナリト仰ラレ云々。」皆以てその縱横の技の深く當世に賞せられしを考ふるに足れり。宜なる哉、その畫門の極めて盛なりしさまや。碑誌に曰く。「無貴無賤、競求藏貯、或挂床壁、或爲席珍、遍於國國、其價抵金玉。」本朝畫史に曰く。「上自王公、下逮賤隷、珍之重之、以金玉募索、冠古今。」槐記にも「進藤左馬頭へ御成（中略）床掛物（探幽ノ細畫ノ寶ノタシテ宿場ヲル圖ナリ、一生ノ出來モノ、由、享保十一年正月廿三日の條）御茶（中略）奥御床（探幽カ吉野、立田ノ二幅對享保十三年四月三日の條）」など見ゆ。たとひ世代の遠からざるにもせよ、遺作の今に存ずるもの極めて多く、その遍く上下の求索に應じて夥生多作せる手腕は、以て器根の健なるを察するに餘あり。前出の傳記に見えたる外、障壁の所作にして古畫備考宮殿筆者の條に記されたるもの、左の如きあり。

御室御所大御殿廚香之間、若松之間、杉戸大人形之間東西
西本願寺白書院唐土人物（今謂ふ所、鴨之間張良引四皓渭恵帝圖、
卯畫遊獵圖、武王會西王母圖等ならむ）
南禪寺山門十六羅漢有、極彩色
金地院菊之間、佛前人物（今松之間を探幽筆と稱す）
妙心寺方丈中之間、奥之間

この餘、現存の障壁畫にて探幽の筆と稱するもの、南禪寺方丈虎之間（古畫備考には元信とす）名古屋離宮上洛殿（寛永三年二條城に後水尾天皇の臨幸を仰がむが爲、秀忠、家光上洛の際、途次の旅館に充てむとて新に營建せしめ、殿内の障壁は當時盡く探幽に畫かしめしものなりと云ふ）桂離宮（李白觀瀑、樓閣山水等あり）等あり、屏風、挂幅に至りては、固より枚擧に遑あらず。その金壁障屏の諸作は、概して中齢の筆に係り、畫趣莊重にして、卓落の筆墨頗る力量を認むと雖も、老齢に近づくに及びては、圖樣、賦彩漸く簡易淡泊に傾き、筆致次第に輕輭に流れ、甚しきは稍浮薄の弊に陷れり。蓋し聲名籍甚して求索の餘りに盛なりしも、その因を爲しゝならむ。謂はゆる齋がき（寛永十三年三十五歳にして法眼となりしより、寛文二年六十一歳に法印となりしまで）より行年がき（叡法印以後）に至りて、この傾向益〻著きを認む。

探幽の逸話の世に傳はれるは多からず。今その一二を左に採錄せむ。

殊ニ水戸黄門（光國）ノ愛ヲ受クルヿ多シ。相傳フ。黄門ノ命ニ依リ、八龍八虎ヲ屏風ニ畫ク。精彩奕々、猛威人ヲ襲フ。黄門覩テ之ヲ嘉賞シ、近習ノ士ヲ顧ミテ曰ク。探幽ハ平生何ヲ樂ミトスルヤ。曰。夜中ト雖モ畫室ニアリ。筆ヲ揮フヲ以テ常トス。唯夏天ハ申牌ヨリ窓ヲ開キ、往來ヲ望ミ、酒ヲ酌ミ、又茶ヲ點ジテ、終日ノ勞ヲ慰ムルナリ。黄門微笑シテ曰。コレ有ル哉、彼レ榮利ヲ屑トセズ。黄金千枚モ何ゾ其心ヲ悅バシムルニ足ラン。只箇ノ所爲、聊カ以テ

大德寺客殿障畫
同芳春院間之繪一式東之間畫獅子牡丹、中之間彩色鹿師之圖、西之間人形
同寸松庵間之繪一式東之間畫中山水、中之間曲水之圖、西之間花鳥
同孤蓬庵間之繪一式東之間墨繪獅子、中之間同山水、西之間同十畫
等持院佛殿天井龍

彼ニ酬インノミト。探幽例ノ如ク盃ヲ手ニシテ窓ニ倚レバ、駄馬數頭アリ。米苞各二箇ヲ負ヒ、鞭ヲ執ルノ厮養卒皆ナ法被ノ背ニ水字ヲ印シ、前後迷頓シテ鍛冶橋ヲ渡リ、窓前ニ來タリ馬ヲ止メ、液邊ニ就テ米苞ヲ積ムヿ屋ヨリモ高シ。而テ人馬共ニ歸リ去ル。探幽ハ其何故ナルヿヲ知ラズ。之ヲ怪ミ意ヲ遣ベ、且曰。窓下ニ積ム所ノ米ハ即是レナリ。探幽直ニ衣ヲ更メ、駕ヲ命ジ、小石川ノ邸ニ詣レバ、日已ニ暮ル。黄門之ヲ燕室ニ招キ、盛レテ曰。今夕始メテ法印ノ畫ブヲ見タリト(東洋繪畫雜誌)。

探幽守信は天生名人にて、成德備へて家富けり(中略)江戸城出來の時より、畫もの數多勤め、實に金箔にあきたりて、能畫名畫器を集(中略)ある時東海寺の本堂天井の雲龍をたのまれるがくをり、其時の方丈、聽なにほど謝し申すべきと有しとき、守信金千兩申受度よしをいへり。何ともすべき樣なく、千兩出し遣はす。守信受けて歸るとき、すぐに東海寺へ寄附してかへる。又、或時、仙臺侯より屏風あまたたのまれけるに、延引せしとて侯いきどほりたまふ。しかるに其屏風一日にのこらずるがきおくる。即刻の出來殊に見事なりとて、喜悅斜ならず。何ぞ謝禮好みにまかすべしとありし時、米を人に一俵、馬に二俵づゝの割合にて、人馬たえ間なく明六ツ時より暮六ツ迄もらひ度よしをねだる。仙臺侯聞すみておくらるゝ。然るに大造なる事ゆゑ、鍛冶橋門外米置場拜借を願ひ、るがきながら是を見つゝ、其米は殘らず辭町うら〳〵のものどもに配分せしとなむ(この逸話頗る前條と相似たり、一事をさま〴〵に語り傳へしにや、出所不詳)。

朽木家に探幽が畫たる松に鶴の畫ありけり。其頃久住六郎左衛門と云ふは素人なれど、畫に妙手なりしかば、朽木家にある探幽の描きたる松に鶴の畫を視て、面白からずとて嘲けりし故、探幽の來りし時、其主人其事を話しければ、探幽聽て曰く、久住が云へる所尤なりとて、畫き直して與へしを、再び久住に見せければ、只宜敷とて强て賞美もせざりし故、また探幽を招きて、しか〴〵の由物語りければ、また畫き直したるを、久住に見せければ、久住大に感賞して云へらく、探幽は誠に奇妙の畫才あり、同じ畫を三度まで我意なくして畫き直したるは、自然の妙ありとて、いたく歎賞したりける。之に依りて、其畫今は朽木家の重寶となりけるよし(耳囊に出づ)。

探信(中略)妙齡の時、探幽甚これを愛し、人探信に畫を囑するものあれば、探幽潛に畫を作り、探信をして欺せしめ、以て囑者にあたふ。是探信の美名を欲する也(石亭畫談)。

守信少にして家學を嗣ぎ、勤苦甚し。其羇旅の間、一宿一次、寒暁暑夕の際といへど、必筆を取て、其睹來る所の山水艸木を寫し、或は觀し處の畫幅を背事すと云(同畫)。

探幽曾て嵯峨天龍寺の支院某寺に於いて、嵐山瀑布の詩意を畫くに、李白ありて瀑布なし。蓋此寺嵐山戸無瀬の瀑と相對す。故に省と云(同畫)。

因みに言ふ。探幽が生前に己の墓として造り置ける瓢形の石碑、今中目黒の永隆寺共同墓地に在り。

探雪守定

探幽が前妻(慶長三年七月十一日歿、法名玉照院)の子五右衛門(古畫備考曰、「武州八王子邊ニ存生、正德ノ比死」、或曰五郎左衛門)は勘當せられ、後妻の生むところ二子あり、長を探信、次を探雪と云ふ。探信家を嗣ぐ。探雪諱は守定、幼名觀千代、後主殿と稱し、松嶽(古畫備考に朱文力印あり)孟隣齋と號す。古畫備考に曰く。「天和二年、正德元年俱ニ朝鮮御用御屏風を畫く」。この時探雪の畫きしは梶原二度のかけと繼信最後との一雙、佐野之渡、玉川一雙なり又正德元年の朝鮮屏風松島之圖一雙、俱利加

羅落一雙（古畫備考）を畫けり。延寶二年乃至四年の禁裏御造營には上京仰せ付けられ、（禁裏御造營記畧に依る）寶永六年の禁裏御造營には、常御殿東一ノ間北ノ方春日野行幸、（砂子泥引）仙洞御所常御所東御孟間中段舞樂、小壁村雀、（雪舟筆砂子）院御所夜御殿濱松千鳥（小壁板付共ニ、雪舟筆砂子、御物記）等を畫けり、（狩野忠信殿禁裏仙洞御所御繪樣附に出づ）探淵

狩牛守睦

日心居士。（會心齋筆記、古畫備考）探雪時信の女を娶り、一子探牛及一女を生む。探牛諱は守睦。探淵先祖書に曰く、「探雪守重」、寶永五年の武鑑に「探雪守定」とあり。正德四年七月十三日歿す。歳六十。（或日六十一歳）法名善行院宗作探雪

家斷絶仕候」。會心齋筆記に曰く、「探雪忰探牛忌中之內死去仕候故、右百石被召上」。古畫備考に曰く、「正德四年八月朔日病死、信行院日善、歳十

進信

探信守政

九」。狩野系圖（一本）に、探信の兄として、賴母助（又右近）道信、幼名竹鶴（早世）を擧げたり。（古畫備考にも缺印あり）

探信幼名は千千代、後圖書と稱し、忠淵と號し、諱を守政と云ふ。探淵先祖書に曰く、「嚴有院樣御代、年月日不知、部屋住ニ而御目見仕、万治元戌年十六歳ニ而、於御前初而御繪御用相勤、延寶三卯年十二月十日、父探幽奉願置候通、高貳百石貳拾人扶持之內、百石餘貳拾人扶持者、惣領探信ゟ被下置、百石者二男探雪ゟ被下置候、（於聊間之間、土屋但馬守殿被仰渡（弘化三年書上）、この頃の事以下書畧す）如之父時御繪御用相勤、（常御褒美、時服并銀子等度々頂戴仕、弘化三年書上）年號月日不知、東叡山中堂天井天人之繪、同所後羽目羅漢之繪、同御唐門天人之繪被仰付相勤、年號月日不知、御本丸紅葉之間、菊之間御繪御用相勤、御褒美頂戴仕、元祿十一寅年九月日不知、鍛冶橋御門外拜領屋敷千三拾三坪餘之內、七拾三坪御用ニ付被召上、替地於神田松永町、九拾四坪餘被下置候。元祿年中月日不知、日光御修覆御用之節御暇被下物時服貳ッ、御羽織一ッ拜領仕候。寶永六丑年五月十日、常憲院樣御尊影被仰付相認。（この事御代々御例書抄、狩野忠信殿に出づ）見えたり正德五未年五月十八日法眼被仰付。（この項誤れり、狩野探岳所藏の宣旨及口宣案に依れば、正德四年十二月十八日法橋、同五年十二月十八日法眼に叙せられしなり）享保元申年七月廿六日、於御前御席繪被仰付、爲御褒美、同八月六日御帷子貳ッ、御單物一ッ拜領仕候。右之外、御繪御用度々相勤、其節々御褒美頂戴仕候得共、度々之類燒ニ而書留燒失、相分り不申候。享保三戌年十月四日病死仕候。年六十六。同寺ニ葬。法名守德院日永。（弘化三年書上略同じ以下倣之）先祖書には漏れたれど、延寶禁裏御造營の時には、探信も亦上京仰せ付けられて、常之御殿御三間巽間（十二月花鳥押畫）を畫き、（禁裏御造營記畧に出づ）寶永六年の御造營にも左の諸圖を畫けり。（禁裏仙洞御所御繪樣附に出づ）

清涼殿御中段曲水、惣金

清涼殿ヨリ外樣ゟ出廊下取付杉戸四枚折南面、北四畳

小御所御上段鳥任賢圖、治、惣金

同御上段西之間雨高宗夢賚圖、惣金

同北廂中央間半杉戸貳枚折東海霧小島、西碧翠ニ奏暮

同北廂ヨリ西廂ゟ折廻一間半之所杉戸貳枚折北四畳

同北廂西方ノ行當間半杉戸貳枚折東四畳、西三畳

常御殿東四ノ間松島、砂子泥引

同西廂北之行當一間半之所杉戸貳枚折南伊勢物語、北竹雀

御小座敷東廂北之行當一間半ノ所杉戸貳枚折南王賀、北四王母

同南之行當一間ノ所杉戸貳枚折南欄畫、北李白
長橋車寄參内殿上段鶴、雲竜砂子
同中段獅子牡丹、同断
同下段松竹梅、同断
御奏者之間一之間梅ニ小鳥、惣金
同二ノ間紅葉ニ鹿、惣金
仙洞御所常御所東御歪間上段大鯉、雲竜砂子、小壁群鶴
同御次之間夜御殿十二月花鳥、砂子泥引、小壁五位
同東御縁座敷長角杉戸一間二枚折南楚蓮雪、北厚
同北御縁座敷西ノ杉戸一間二枚折東野鹿、西梅雪
同御書院御座之間御床、御違棚四季、雲竜砂子
女院御所表向之間東縁座敷杉戸一間二枚折北俊成、井出玉川、南櫻畫
同所南御縁座敷杉戸一間二枚折東唐子、西岩鼎

この時同年九月六日永叔等と共に、仙洞御所に召されて、六枚屏風一雙、春景、秋景、壁絵、泥引、二枚屏風押物四枚四季草、鶴彩色、及三幅對壹通、押物五枚を畫けり。

同書 又天和二年の朝鮮屏風孝德天皇白雉之圖、文武天皇慶雲之圖一雙、朝比奈門破、和泉小次郎一雙を畫きしことも、古畫備考に見えたり。貞享四年の武鑑に「探信守政、かち橋川學」元祿十七年の武鑑に「百石探信守政」とあり。寶永五年の武鑑にも出づ。その畫印尙家に存ず。探信常信の女を娶り探船、探常の二子及一女を擧ぐ。探船家を嗣げり。專門畫家譜には更に三男探船、探常、探信と云ふ。探淵先祖書に曰く、「常憲院樣御代、年號月日不知、御目見仕。享保四年月日不知、父探信跡式無相違被下置、如父時御絵御用相勤、朝鮮國王ゟ被遣候御屏風御絵御用相勤、御褒美頂戴仕候得共、數度之類燒ニ而書留燒失仕、相分り不申候。同十三年七月廿五日病死仕候。年四十三。同寺ニ葬。法名德岸院日乘。先祖書には漏れたれど、寶永六年の禁裏御造營に探船が左の諸圖を作りしことは、禁裏仙洞院御所御絵樣附にて知らる。

同御書院御座之間御違棚上四枚春中絵女、唐紙惣金、下四枚雲竜、絹地泥引、右彩色
院御所上段孔雀松梅、惣金
同中段鳳凰柳、同
同下段白鷺葦、同
同南庇一間半杉戸二枚折東菊頭、西遠城嶺
同北庇一間半貳枚折杉戸東馬御桌、四季御道
同所貳間四枚折南貫鶴、北鳳凰畫
同御小書院御次之間小壁張付共ニ、東折廻御縁座敷積共ニ
同南御縁座敷一間二枚折杉戸東丁令威、西鶴羽
同攝家衆休息所二夕間七賢、雲竜砂子
同中宮御歪間一間御床、御棚住吉物語
同南御縁座鉾東方一間二枚折杉戸東櫻馬、西四王母

仙洞御所御書院次之間屋體、同断
女院御所御歪之間下段竹ニ鶴、惣金

探船子なし、弟探常を養子として家を嗣がしむ。探船の畫印も亦家に存ぜり。

探常守富

探常諱を守富と云ふ。探淵先祖書に曰く、「有德院様御代、年號月日不知、養父探船男子無御座候に付、弟之續を以て養子罷成、享保十三年十月十五日初而御目見仕、同年月日不知、養父跡式無相違被下置、如父時御繪御用相勤、元文巳年月日不知、東叡山御本坊并御裝束所御繪御用相勤、延享四卯年朝鮮國王ゟ被遣候御屏風御繪御用相勤（古書御布は延享五年即ち寛延元年とし、畫繪牛馬（砂子）一雙探幽ノ圖寫、紅葉萩鹿（泥引彩色）一雙探幽ノ圖寫）探常の畫けるる由見えたり、同年四月廿七日病氣に付願之通隱居被仰付候、右之外、御繪御用度々相勤、御褒美頂戴仕候得共、數度之類燒に而書留燒失仕、相分り不申候、寶曆六子年五月三日病死仕候、年六十一、同寺に葬、法名一敎院日義、享保二十年の武鑑に「百石廿人フチ、父探船、かちばし御門前」探常守富」とあり、一子探林嗣ぐ。（寺門書家譜に探常の次男探林あり、按考な訂す）

探林守美

探林諱は守美、探淵先祖書に曰く、「有德院様御代寛保三亥年十月十五日、部屋住に而初而御目見仕、延享四卯年朝鮮國王ゟ被遣候御屏風御繪御用相勤（人廣、亦人一雙、古書御布は延享五年即ち寛延元年とし、畫繪牛馬（砂子）一雙探幽ノ圖寫、紅葉萩鹿（泥引彩色）一雙探幽ノ圖寫）探常の畫けるる由見えたり）同年四月廿七日父探常跡式無相違被下置、如父時、御繪御用相勤、同年同月廿八日繼目御禮申上候節、自畫卷物兩丸ゟ獻上仕、寶曆九卯年月日不知、御離屏風御繪御用相勤、明和五子年月日不知、西丸御修覆之節、御繪御用相勤、御褒美頂戴仕、同十一巳年月日不知、御離屏風御繪御用相勤、明和五子年月日不知、西丸御月日不知、東叡山御本坊御繪御用相勤、御褒美頂戴仕候、右之外、度々御繪御用相勤、御褒美頂戴仕候得共、書留燒失、相分不申候、同六酉年四月七日病死仕候、年四十六、同寺に葬、法名智境院道感日應、探林が明和元年五月乃至十一月、朝鮮屏風武者忠信吉野軍、義經安宅關一雙、源氏若紫、藤之裏葉一雙及新御屏風耕作一雙を畫きしことは、狩野忠信所藏舊記に見えたり、長子探牧、次子信之助（探淵先祖書に曰く、「二男淺井六左衛門道治、寛政十二申年閏四月（中略）養父淺井五郎左衛門氏道跡ゟ御抱入相成、火消與力相勤申候、弘化三年書上日、「書右衛門、又六左衛門」）あり、探牧嗣ぐ。

探牧守邦

探牧諱は守邦、圖書と稱す、探淵先祖書に曰く、「淺明院様御代安永六酉年二月日不知、部屋住に而於御前御席繪被仰付相勤、同年七月八日、父探林跡式無相違被下置旨、於躑躅之間、板倉佐渡守殿被仰渡、如父時御繪御用相勤、同年同月廿八日、跡目御禮申上候節、先格之通自畫卷物獻上仕、同七戌年、同八亥年兩度御前御繪御用相勤、同年十一月百人一首御繪寫物御用相勤、其後御前御繪御用并御圖扇御用等相勤、御褒美頂戴仕候得共、度々之類燒に而書留燒失仕、年月相知不申候、寛政八辰年四月十九日、病氣に付願之通隱居被仰付、天保三辰年正月晦日病死仕候、年七十一、同寺に葬、法名智勝院日空」、天明七年の武鑑に「百石廿人フチ、父探林、かちばし御門外」探牧守邦」とあり、御繪師狩野探圓胤信の女を娶り、長子探信、女子（早世）及次子邦信（探淵先祖書に曰く、「寛政十戌年十二月廿七日、家元狩野永叟信敎子に福成候」）を生む、探信家を嗣げり。

探信守道

探信諱を守道、字を清夫と云ひ、興齋と號す、幼名千千代、初め宮内卿、後式部卿と稱す。（弘化三年書上）探淵先祖書記す所左の如し。

文恭院様御代寛政五丑年七月廿八日　部屋住に而御目見仕。

同八辰年四月十九日　父探牧跡式無相違被下候旨、於躑躅之間、戸田采女正殿被仰渡、如父時御繪御用相勤。

同年七月廿八日　跡目御礼申上候節、先格之通、自書巻物両丸に獻上仕。
同年十二月日不知　西丸大廣間御絵御繕御用相勤、御褒美頂戴仕。
同六寅年月日不知　柳之間潤御絵御繕御用相勤、御褒美頂戴仕。
同年十月日不知　増上寺安國殿并文昭院様御霊屋御修復御絵御用相勤、御褒美頂戴仕。
同十午年七月　淑姫君様御入輿御絵御用相勤。
同年八月　二丸御張付其外御繕御絵御用相勤、御褒美頂戴仕。
同年九月　上野長昌院様、寶樹院様御霊屋御繕御絵御用相勤、御褒美頂戴仕。
同十一未年九月　紅葉之間御繕御絵御用相勤、御褒美頂戴仕。
同十二申年九月　参向公家衆逗留中、席絵御用相勤。
享和元酉年八月　上野中堂天井天人之絵、并同所後羽目十六羅漢之絵、同所唐門天人之絵御繕御用相勤、御褒美頂戴仕。
文化三寅年　御進獻御街立、御屏雲鶴之御絵御用相勤。
同五辰年　朝鮮人に被下候御屏風御絵御用相勤(弘化三年書上扣には一雙とあり、古書備考文化八年とし、探僧二雙を書ける由見えたり)。
同十一戌年　峯姫君様御引移御用御屏風御絵相勤。
同十四丑年　乙五郎殿、銀之助殿引移御用御屏風御絵相勤。
文政二卯年　奥御用御切形之御絵相勤。
同年　淺姫君様御引移御用御屏風并御街立御絵相勤。
同三辰年　元姫君様御引移御用御屏風御絵相勤。
同年　増上寺安國殿御修復御絵御用相勤、御褒美頂戴仕。
同八酉年十二月十六日　法眼被仰付旨、於御右筆部屋縁頬、青山下野守殿被仰渡候(同日法橋、法眼の宣旨及口宣案狩野探岳與)。
同年　盛姫君様御引移御用御屏風并御街立御絵相勤。
同九戌年　文姫君様御引移御用御屏風御絵相勤。
同十亥年　溶姫君様御引移御用御屏風御絵相勤。
同年　紀五郎殿引移御用御掛物相認、御褒美頂戴仕。
同十一子年　上野最樹院様御霊屋向御絵御用相勤、御褒美頂戴仕。
同年七月七日　眞行艸之書相勤候様被仰付旨、林肥後守殿被仰渡相勤。
同年九月十四日　奥御用被仰付旨、於堀田摂津守殿御宅被仰渡。

同十二ヨ年二月十二日　於永井肥前守殿御宅、西丸奥御用可相勤旨被仰渡。

同年　茶姫君様御用御屏風御繪相勤(弘化三年書上扣には「御屏風唐絵作」とあり)。

同年　和姫君様御引移御用御屏風御繪相勤。

同年　増上寺台德院様御霊屋御修復御繪御用相勤、御褒美頂戴仕。

天保二ヲ年　浅姫君様御用御屏風御繪相勤。

同三ヒ年　寿代姫君様御引移御用御屏風幷御掛物(弘化三年書上扣には「御掛物二幅対」とあり)御繪相勤、御褒美頂戴仕。

同四巳年九月　二丸御修復ニ付御繪御繪(弘化三年書上扣には「御衫戸」とあり)御用相勤、御褒美頂戴仕。

同年　増上寺安國殿御繪御繪御用相勤、御褒美頂戴仕。

同年　末姫君様御引移御用御掛物(弘化三年書上扣「二幅対」)御屏風、御新立等御繪相認、御褒美頂戴仕。

同年　御黒書院御繪御繪御用相勤、御褒美頂戴仕。

同五午年　上野中堂後御初目屋敷之繪、同所唐門天人之繪御繪御用、幷中堂天井天人之繪認直被仰付相勤、御褒美頂戴仕。

同九月廿五日　文恭院様ゝ御繪現箱修繕組弄願、今ニ所持仕候。右御現箱、黒地の漆彫、彩不色付、竹和折枝模様。

同年　西丸御小座敷御衫戸、御小襖等御繪御用相勤、御褒美頂戴仕。

同年十二月二日　御書院並拝仰付旨、於御右筆部屋線照、大久保加賀守殿被仰渡、年始御礼並之通、御太刀馬代献上、御流、時服拝領、五節句、八朔其外諸御礼、並之通能出申候。

同六未年　永姫君様御引移御用御掛物、御屏風御繪相勤申候。

右之外、御国廻御繪御用度々相勤。

同年十二月十八日　病死仕候。年五十一。同寺ニ葬。法名智道院日行。

文化十年の武鑑に「[illegible]探信守道」とあり、御歌寄屋頭伊佐知富の女を娶り、長子探淵、女子[illegible]及二男六郎[illegible]を生めり、探淵嗣ぐ。

探淵守貞

探淵初め探文諱は守貞、兵部卿と稱す、幼名千千代、弘化三年九月書上げの探淵先祖書上[illegible]に所[illegible]の扣以書化[illegible]三年書記す所左の如し。

文政二ヲ年十一月十五日　御屋敷ニ而文恭院様ゝ御目見仕、年始、五節句、八朔、月並御礼能出(狩野探岳殿文書「探信仲狩野探淵、[illegible]十五歳、弘仲探淵儀、爲[illegible]

[illegible]加、御目見被爲仰付、被下置候様奉願上候、御目見被爲仰付、被下置候者、先格之通御局子供上仕度奉願上候以上、卯十一月、狩野探信)。

同十ヌ年　浴姫君様御引移御用御新立御繪相勤。

同十二ヨ年　和姫君様御引移御用御新立御繪相勤。

天保三ヒ年七月廿三日　文昭院様御霊屋御仕切、御門、御天井、孔雀丸御繪御様、幷縫殿殿御修復御繪御様御用相勤候ニ付、銀五枚爲御褒美被下置旨、

於焼火之間、林肥後守殿被仰渡、頂戴仕(狩野探岳歳文書「狩野探淵、増上寺台徳院様御霊屋御廟向御修復ニ付、御絵御手入御用可相勤候」)。

同年　浅姫君様御用御衝立御絵相勤。

同年　喜代姫君様御引移御用御屏風御絵相勤。

同四己年四月廿二日　二丸御杉戸御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美銀三枚被下置、頂戴仕。

同年　末姫君様御引移御用御屏風御絵相勤。

(弘化三年書上扣に曰く「同年増上安国殿御絵御彩色御用被仰付候處、委忌相成候ニ付、父探信相勤申候」)。

同五午年十二月二日　父探信御書師並被仰付候ニ付、私儀も御書師子供並ニ可相心得旨、永井肥前守殿被仰渡、年始、五節句、其外諸御禮、表書師之次ゟ罷出、御禮申上候。

同六未年　永姫君様御引移御用御屏風相勤。

同年十一月朔日　奥御用見習被仰付旨、於御右筆部屋様類、大久保加賀守殿被仰渡、同月九日西丸奥御用見習被仰付旨、於時計之間、森川内膳正殿被仰渡候。

同年十二月晦日　西丸御座之間向御絵御繕御用相勤候ニ付、爲御褒美銀五枚被下置、頂戴仕。

(弘化三年書上扣に「部屋住之内、参向公家衆席絵二度、御雛屏風兩度相勤申候」とあり)

同七申年三月四日　父探信跡式無相違被下置旨、於菊之間、水野越前守殿被仰渡(狩野探岳歳文書「李顧覺、一、貳拾人扶持御書師並絵師探信實子惣領狩野探淵、父探信義、去未十二月十八日死去仕候所、當申正月分迄御扶持方受取申候、當三月四日私義家督被仰付候ニ付、何卒御證文被下置候様奉願候、以上、三月、狩野探淵」)。

同年二月廿六日　文恭院様西丸ゟ御移替後も、兩丸奥御用只今迄之通可相勤旨、於時計之間、水野越前守殿被仰渡。

同年十月廿二日　西丸大奥御對面所御絵御繕御用相勤候ニ付、爲御褒美銀五枚被下置旨、於時計之間、森川内膳正殿被仰渡頂戴仕。

同九戌年四月十六日　右大將様奥御用可相勤旨、於時計之間、本多豊後守殿被仰渡。

同年十二月廿六日　御進獻(弘化三年書上扣には「春宮様ゟ」とあり)御屏風御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美金貳枚被下置旨、於時計之間、太田備後守殿仰渡、頂戴仕。

同十亥年三月廿三日　西丸大奥東御殿御上段、御下段、御入側向、其外御小襖、御杉戸等御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美金貳枚、時服二被下置旨、於時計之間、水野越前守殿被仰渡。

同年十二月七日　文恭院様於御前、御絵硯箱一組拜領仕、今ニ所持仕候。右御硯箱、地黒、菜の花ニ蝶之蒔絵。

同年十二月廿五日　充君下向御用御掛物御絵相認候ニ付、爲御褒美時服二被下置旨、西丸於時計之間、松平伯耆守殿被仰渡頂戴仕。

同年同月廿六日　西丸御白書院御上段、御下段、帝鑑之間、連歌之間并御入側、御小襖、御杉戸等御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美金五枚、時服二被下置旨、

於時計之間水野越前守殿被仰渡、頂戴仕、右同斷御用ニ付、西丸ゟも金五枚、時服二被下置旨、松平伯耆守殿被仰渡頂戴仕候。

同十一子年十二月六日　御繪御用度々相勤、西丸御用等出精相勤候ニ付、格別之思召を以、御召御紋御羽織拜領仕。

同十二丑年三月十日　文恭院様御召下御紋付御羽織拜領仕。

同年十二月廿二日　東明宮御方下向御用御掛物御繪相認ニ付、爲御褒美時服二被下置旨、於時計之間、眞田信濃守殿被仰渡頂戴仕。

同十三寅年三月七日　菊之間御繪御稽御用相勤候ニ付、爲御褒美銀五枚被下置旨、於時計之間、水野越前守殿被仰渡頂戴仕。

同年十一月十六日　大奥御座敷向御繪御稽御用相勤候ニ付、爲御褒美時服二被下置旨、於時計之間、水野越前守殿被仰渡頂戴仕。

同十四卯年十二月廿九日　公家衆隅田川遊覽之節、席繪相勤候ニ付、爲御褒美銀五枚被下置旨、於時計之間、堤藤但馬守殿被仰渡頂戴仕。

弘化元辰年十二月十六日　御本丸御書簡中ニ付、西丸於桔梗之間、法眼被仰付旨、阿部伊勢守殿被仰渡、年始御禮並之通、御太刀、馬代献上、御流、時服頂戴仕、五節句、八朔、諸御饗、是又並之通罷出申候(同日法橋、法眼の宣旨、口宣案、及弘化二年二月「狩野探淵法橋法眼成御官物之事」の文書、狩野探岳殿)。

同二巳年三月十六日　大奥御小座敷廣子之間、雪柳之間井御小襖、御杉戸、御黒書院溜之間、御入側、御小襖、御杉戸等御繪御用相勤候ニ付、爲御褒美金五枚、時服二、別段金三枚被下置旨、於時計之間、青山下野守殿被仰渡頂戴仕。

同年五月四日　松之御廊下井御杉戸等御繪御用相勤候ニ付、爲御褒美金貳枚、時服二、別段金壹枚被下置旨、於時計之間、戸田山城守殿被仰渡頂戴仕候。

探淵の弘化三年九月みづから記しゝ先祖書はこゝに終れり。明治三年四月その孫探美のこれに附箋して追記せる所、更に左の如し。

嘉永二酉年　月日不知、小金ヶ原御鹿狩御供被仰付候。

同年　月日不知、緑姫君様御引移御用御屏風御繪相勤。

同年　月日不知、慎徳院様水府御屋形ゟ御立寄之節、御供被仰付、御園ニ而被爲燒候柿之御香合拜領仕候。

同五午年　月日不知、西丸御座之間御上段、御下段、御入側、御白書院御上段、御下段、帝鑑之間、迎歌之間、御入側、御小襖、御杉戸、大奥東御殿御上段、御下段、御入側、御小襖、御杉戸等御繪御用相勤候ニ付、爲御褒美金、時服等、西丸ゟ頂戴仕。

同年十二月廿八日　度々重キ御用相勤候ニ付、出格之譯を以、勤中御增扶持拾人扶持被下置候旨、於御右筆部屋樣類、御老中御列座、松平和泉守殿被仰渡候(探淵の自記には「高百石、貳拾人扶持」とあり)。

弘化度後、御繪御用相勤候書留、安政二卯年十月二日地震之節燒失仕、年月日、被仰渡等、相分不申候。

同六丑年九月廿三日　病死仕候。年四十九。同寺ニ葬。法名智靜院日勇。

古畫備考新營大城畫壁筆者人名に依るに、探淵の畫けるは左の如し。

溜リ之間　御休息御小襖上四枚、四季折枝

松之御廊下　御錠口御杉戸九尺、三笑

御膳建廊下御杉戸杜子美、垣夕貞

同御杉戸松ニ鶴、柳ニ黄鳥

同御杉戸岩笑蕾、白鷺山茶花

大奥上御鈴御小座敷墨絵、梅ニ雀、泥引

唐子之間

上御鈴口御杉戸九尺、岩ニ花菖蒲、波ニ千鳥

御鈴廊下御杉戸九尺、蓬鶴、海棠ニ八頭

御同所御杉戸九尺、芝ニ四月、若竹ニ鶴

狩野探岳所蔵の文書中、探淵の畫事に關するもの左の二通あり。以て前出の傳記を補ふに足る。

「狩野探淵

御女中様方ゟ被進候御團扇之絵可被相認候、絵様書付可被差出候」。

「探淵

森姫君様御引移御用

天保七年の武鑑に「百石廿人フチ、交代、探淵守眞」とあり。探淵初め寄合秋月大學の女（秋月筑前守家來岡本主殿勝從養女、寄合秋月金二郎種博妹、天保四年没）を娶り、後松平因幡守家來長谷川大助近長の女を娶り、探原、淵潤（守廉、幼名千代、早世）眞清（朝臣、大島金三郎殺害）探美及鎌五郎（勝川院養子成、早世）の五子を生む。探原、探美相嗣げり。

探原守經

探原諱は守經、宮内卿と稱す。幼名鎌次郎、母は秋月大學の女なり。先祖書追記に曰く。

慎徳院様御代弘化二巳年十二月廿五日　部屋住ニ而御目見仕、月並、五節句御禮罷出。

（狩野探岳藏文書「探淵實子悲嘆狩野探原巳十七歳、右序之節、御目見奉願候以上、九月、御醫師並狩野探淵」）。

同年　御本丸波之間并御杉戸御絵御用相勤、御褒美頂戴仕。

同年　西丸大奥雪柳之間御絵御用相勤候御褒美頂戴仕。

同三年十月廿五日　父勤方之通見習被仰付旨、於御右筆部屋様類、御老中御列座、牧野備前守殿被仰渡。

嘉永元申年十月十六日　奥御用出精相勤、家業モ宜候ニ付、新規御扶持方貳拾人扶持被下置候旨、於御右筆部屋様類、御老中御列座、牧野備前守殿被仰渡。

同二酉年　小金ヶ原鹿狩御供被仰付。

同年　緑姫君様御引移御用御腰屏風御絵相勤。

御鈴番所脇御杉戸九尺、柏ニ山鳥、大百合紅百合

松御殿御二之間御三之間境御杉戸九尺、蓮綿毒、杜若鶴（以上御本丸）

御座之間御上段、御下段、御入側

大奥東御殿

御白書院

帝鑑之間

連歌之間（以上西丸、嘉永五年五月廿二日炎上、同七月御殿絵事被仰付）

大屏風　一雙

初音、胡蝶

右之通御絵様、相撰守殿被仰渡候間、御遠申候以上。

亥九月

同五子年　西丸御座之間、御次、御三之間井御入側、柳之間井御小襖、御杉戸井別段慎德院様御好御小座敷御絵御用等相勤、爲御褒美金、時服拜領仕候。

同六丑年九月廿三日　父探淵病死仕、同年十二月十二日父探淵跡式無相違被下置旨、於菊之間、御老中御列座、松平伊賀守殿被仰渡。

安政三辰年　篤君御方御入輿御用御二枚折屏風御絵御用相勤。

同年　亞蘭國ゟ被遣候御屏風御絵御用相勤、同英吉利國ゟ被遣候屏風御絵御用相勤。

同年　月日不知、御絵御用出精相勤候ニ付、格別之思召を以、御召御紋御羽織拜領仕。

同四巳年　上野中堂唐門天井天人之絵認直被仰付相勤、御褒美頂戴仕。

同年十二月十六日　法眼被仰付旨、於桔梗之間、御老中御列座、久世大和守殿被仰渡(同日法橋、法眼の口宣案、狩野探岳廢)。

萬延元申年　實定院方御引移御用御街立御絵相勤。

同年　英吉利國ゟ被遣御屏風御絵御用相勤、同亞米利加國ゟ被遣御掛物御絵御用相勤、御褒美頂戴仕候。

文久元酉年　御本丸御黒書院御上段、御下段、西湖之間、圖畫裏之間井御入側、御小襖、御杉戸、御玄關遠侍井虎之間御長押上井御杉戸、大奥一ノ御殿御三之間井御入側、御杉戸、唐子之間、牡丹之間井御小襖、御杉戸等御絵御用相勤候ニ付、爲御褒美金八枚、別段五枚、時服四ツ頂戴仕。

(古書備考新營大城書壁筆者人名に依れば、探原の畫きしもの左の如し。

波之間　登御殿南側御杉戸一間、嘉老人、牡丹(以上御本丸)

御座之間西御縁御杉戸九尺、鯨鯢、富嶽岩　御座之間御二之間、御三之間、御入側

張番所脇御杉戸一間、波ニ鷗、芍藥　同緞御小座敷

御親藩脇脇御杉戸九尺、騎射人、同　柳之間、(以上西九)

宇治間御用場脇御杉戸一間、鐵線、雉子

同年　增上寺護國殿御絵御藉御用相勤(狩野探岳廢文書あり)、御褒美頂戴仕。

同年　五ヶ國ゟ被遣御掛物御絵御用相勤、御褒美頂戴仕。

同二戌年十月　上野中堂天井天人之絵御藉御用相勤(狩野探岳廢文書あり)、御褒美頂戴仕候。

右之外御絵御用度々相勤其節々御褒美頂戴仕候。

慶應元丑年十月十日　近年病身ニ罷成候處、實子探岳儀虚弱ニ付、弟探美儀養子仕度奉願候處、十一月晦日願之通、弟探美養子被仰付旨、京極主膳正殿御書付を以被仰渡。

同二寅年十一月廿日　病死仕候、年三十八、同寺葬、法名智芳院日靜。

右の外、探原の畫事に關する文書(狩野探岳藏)の傳記を補ふに足るもの左の如し。

「狩野探原」

美賀君下向御用ニ付
御掛物一通ニ幅對
右御繪可相認候。」

「狩野探原」

御臺樣ゟ被遣候御圍扇之繪可被相認候。繪樣書付可被差出候。」
（同文のもの二通あり）

探美守貴

探原燒火之間番頭金田忠左衛門正應の女を娶り、探岳（安政六年生）を生みしかど、弟探美（母は浜谷川大助の女）を養子と爲して家を嗣がしむ。

探美守貴は天保十一年二月生る。初め永惠の養子と爲りて祐雪充信、俗稱瀧之助眞政と云ひ、後探美齋守貴と改名せり（狩野探岳系圖）。慶應三年十二月養父探原（未だ死去なし同前）の名を以て、從來の二十人扶持を高百俵に改め賜はり、河内客坊村の百石と御藏米百俵との祿と爲りぬ。（この事狩野探岳覺書に「御扶持御藏米」）。

如此なりされば、慶應四年閏四月十九日、狩野永惠より出したる探原の跡目願には、「高貳百石（内百石地方、百俵御藏米）」とあり。探美の先祖書追記に曰く、「慶應四年六月十五日、養父探原跡式無相違被下置旨、服部綾雄殿被申達、二等勤番被命。明治三年三月十八日、海軍操練所製圖所用當分出仕被仰付。」

同年十一月十五日兵學權少屬に任ぜられ（辭令書十五年第一回内國繪畫共進會に出品して銀印を授けられ、天皇陛下同會へ御臨幸の時御席畫を命ぜらる。（第二回内國繪畫共進會出品人名錄）同年十二月廿日、同會出品嵯峨野の圖宮内省御用品と爲りしを以て、東京府廳より金拾圓を給せられ（辭令書）十六年五月十四日願に依りて海軍四等師の官を免ぜられ（辭令書）同年十二月廿五日隱居し、兄の子探岳をして後を嗣がしむ。十七年三月廿八日、第二回繪畫共進會審査官申し付けらる。（手當一日一圓辭令書）同會には山水及花鳥を出品し、又銀印を授與せらる。同年十月廿一日、皇居御造營事務局傭申付けられ、廿二年五月廿一日、臨時全國寶物取調局臨時鑑査掛を囑託せられ、廿六年六月十九日歿す。歳五十四。池上本門寺に葬る。第二回内國繪畫共進會出品人略譜に、「靜岡縣ノ人ニシテ、東京府芝區金杉四丁目（廿番地なり、探岳今尚こゝに住す）ニ寄留ス」とあるは、慶應四年六月舊幕府德川家へ御奉公を願ひ、同年七月駿府住居を願ひて許され、（前記二等勤番を命ぜられしはこの時なり）靜岡縣士族と爲りしを以てなり。

探岳守節

その後朝臣たらむことを願ひけれど、期限後れて許されざりき。（御扈願書扣に依る）探美の嗣探岳守節（安政六年生、幼名千々代、探岳齋）は今現在せり。亦畫を作る。

濱町家、田川甫信

濱町家は木挽町家の支出にして、常信の次子（狩野隆柄曰、養子、周信出生後別家せしむ）岑信を祖とす。岑信初名吉之助、又主税（系圖一本、又曰稱機部）後姓名を松本友盛（盛一に情に作る）と改め、後隨川と稱し、（友信翁の談に依る）覺柳齋と號す。（狩野家五家譜）

元祿元戊辰年　月日相知不申候、文昭院樣櫻田御殿（館林）被遊御座候節被召出、御畫御用相勤申候（會心齋筆記）。

狩野友信翁曰く。御小性に召出さる。

同三庚午年十二月五日　御扶持拾五人扶持被下置候。

寶永元甲申年十二月十五日　文昭院樣西丸に被爲入候節、御供仕候。
同四丁亥年十一月廿九日　於西丸土圭之間、御番被仰付、御切米百俵、御役料五拾俵、御金六拾兩、時服二被下置、苗字相改候樣被仰付、御直に松本與被下置候。
同五戊子年六月廿九日　奥御醫師並被仰付、御切米百俵、御扶持七人扶持御加增被下置、都合高貳百俵七人扶持に罷成候(以上會心齋筆記)。
友信翁曰く。家宣公將軍宣下の後、剃髮して秩祿を賜はる。二百俵貳拾人扶持。兩國廣小路横山町に於いて、町屋鋪貳百五拾坪拜領。御醫師並奥繪師被仰付。
同年十二月三日　病死仕候。歳四十七。法名是樹院岑信日量。池上本門寺に葬申候。
此子孫當時御醫師並狩野友川寛信家に面御座候(會心齋筆記)。

狩野家五家譜に曰く、松本は文照院樣御直に御稱號之御一字被下置平と云字に似候に付、松本と被下置、代々御醫師格奥詰被仰付候。貳百俵十五人扶持被下置候。又古畫備考に左の記載あり。

十五六歳の頃、甲府樣へ十五人扶持にて御伽に出、殊之外御意に叶、西御丸へ御供致、其後御代御續被遊候節、三十人扶持になり、松平之御氏をも可被下思召候所、御辭退達て申上候に付、松本氏を被下、隨川を改、友盛と被成候。是狩野眞近致候第一也。依之、狩野總上席にて、御用相勤、其外御土圭を預り、御内々御懇之御用を御直に伺上候、出頭申事也。二百俵給るの由。其子之時、朝鮮御屏風一同認候時、此家ばかり松本氏にて、其餘は皆狩野家なれば、本姓に改可申由被仰出候。其時右松本氏は、各別之思召を以被下置候間、何卒改氏之儀は御免奉願由願候得共、一旦被仰出候儀、左樣は難致由にて、無據狩野と相成申候。是全其節狩野新道(中橋家)より妨候由。其子細は、松本ノ内は總上座にて、日比殘念に存候所、狩野と成候へば、自分本家ゆゑ、上に立候由也。常川幸信深く其事を惜み、何卒松本氏を別に立申度とて、其次男を一橋樣へ出し、松本主税とて相勤候。近頃神田橋樣いまだ一橋に被爲入候刻も、其後之主税六百俵迄に相成申候。其次男も當上樣之御供申、御本丸勤に成、松本口口とて、御旗本になり候。當時は小普請の由。主税跡も高減じ候へ共、百俵にて相勤候。當家は外御繪師とは違ひ、御旗本同樣にて、家督一兩年の内は小普請入致、夫より直に奥御繪師に相成候事に御座候。木引町は以前は左樣には無之、公儀の奥勤に出候も、此方先にて候。乍去近代桑川院より、三代法印法眼續候間、新規家督にても、寄合へ出候事に候。

以て岑信の後本姓に復したる事情と、その家格とを明にすることを得べし。吹上御苑瀧見御茶屋には、岑信の畫ける障壁畫尚存ずと云ふ。

隨川甫信

甫信幼名吉之丞、初め受川、邦信と云ひ、後隨川と稱し、青柳齋と號す。「寶永五戊子年十二月三日兄松本友盛岑信養子に罷成候」(桑川書上系譜)寶永五年十二月廿九日家督。小普請入。同六年丑四月十三日、土圭間御番被仰付。正德六年申五月十六日、一統小普請入。延享二年乙丑七月七日卒。年五十。法名青柳齋甫信雪巖日緣居士(古畫備考)池上本門寺に葬る。妻むめ幸信、玄信(受川、爲桑川養子)及女子を生む。(過去帳に甫信次男昌川あり、法名廣和齋桑信了空、文化三年七月廿七日歿)

常川幸信

幸信初名吉次郎、常川と稱し、隨柳齋と號す。「延享二年丑九月十八日家督、同三年寅七月廿六日、名字狩野ト可相改旨被仰渡、寶曆三酉年十二

月廿七日、年始御禮正月三日可罷出旨被仰渡。明和七年寅八月十九日病死。年五十四。法名隨柳齋幸信了性日明居士。（古畫備考）池上本門寺に葬る。

男昆信及一女（過去帳に寛政九年子八月廿三日歿とあり、明和三年八月廿三日歿）あり。幸信が寛延元年の朝鮮屏風奈良八景一雙、赤松長山斫斧引、村上彦四郎人礫一雙を畫きしこと

は古畫備考に見え、明和元年の朝鮮屏風大唐子一雙、武者（景政弓射あほ一雙を畫きしことは、狩野忠信所藏の文書に依りて知らる。

隅川昆信

昆信青坡齋（坡或は波、誤）と號す。「明和七年寅十一月五日家督。同年十二月廿四日、年始御禮正月三日可罷出旨被仰渡。安永二年巳十二月十五日、御用相勤候ニ付、小普請金御免。寛政四年子十月十五日病死。（過去帳には九月六日病死、（過去帳ハ一男、安永三年八月十八日）次子寛信家を嗣ぐ。

融川寛信

寛信初め友川と稱し、後融川に改む。「寛政四年子十二月十五日家督。同五年丑十二月廿四日、年始御禮正月三日可罷出旨被仰渡。同十一年未十一月廿九日奥御用被仰付。同十二年申十月三日小普請御免。文化四年卯十二月廿九日、若年寄支配被仰付。同五年辰十二月法眼被仰付、稱式部卿。同十二年巳三月十九日病死。三十八。法名青梧齋」（古畫備考）文化八年朝鮮屏風二雙を畫きしこと、亦古畫備考に見ゆ。文化十年の武鑑に「二百石七人フチ、御醫御部屋、はま町矢ノ倉、父隅川」融川法眼寛信」とあり。二子昭信、助信、及二女あり。（其名はいと、牛込白金町松平氏に嫁す、後家と爲り、仙慶と稱し、齋を書て御殿に出入す（古畫備考）、女は過去帳に妙春童女とあり、文化十二年正月五日歿、融川の妻は慶齋二年九月十九日歿（過去帳））融川表向病死と爲り居れど、實は自殺せしなり。世に腹切融川と云ふ。幕府時代は祕せられしかど、今はその齋友信翁すらこれを語る。その事石亭畫談に見えたり。

文恭公の時、朝鮮人來朝す。書院各家に命じて屏風を畫かせ、是を來朝の使に授て、朝鮮王に贈らんとす。融川亦これに預る。融川屏風に近江八勝の圖を作り、其遠景金砂を施し、漸々濃より淡に及で限をなし、其間樹屋隱顯遠近分つべし。自ら謂ふ、頗るよろしきを得たりと。一日諸有司列坐、其落成の可否を試驗す。老中阿部豐後守曰、金砂甚薄しとなして是を咎む。融川曰。近景これを濃くし、遠景是を薄くす。是臣が殊に意を加ふる所也と。阿部侯聽かず。漫に陳ずるもとなして、嚴に補綴を命ず。融川忽ち面色勃然聲音厲しく、呼で曰。良工の手段、俗目のしる所に非らずと。阿部侯亦怒色顯はる。傍人掌中に汗す。融川急に疾と稱し、城を下る。途中便與中に在て屠腹して死す。

舜川昭信 友川助信

友信翁曰く、この時融川の畫きしは、吉野、龍田圖雲箔砂子極彩色なりき。融川千蔭に學びて和歌を能くせり。氣象頗る豪邁。曾て高樓を深川木場に構へ、常に毛利侯その他の外樣大名の御隱居を招待し、以て豪遊を爲しきこそ。

昭信舜川と稱し、梨雪齋と號す。父融川自殺の翌年、文化十三年閏八月十四日（過去帳）病死（法名芳城日長）せしかば、その弟助信嗣ぐ。助信友川と稱す。古畫備考に曰く、「高貳百俵七人扶持。養父舜川、小普請組松平石見守支配之節、文化十三子年九月、病氣差重候處、男子無御座候ニ付、弟之續ヲ以、急養子奉願置、同月廿六日（表向ならむ）病死仕、同年十二月五日、養父跡式無相違被下置候旨、於菊之間、御老中御列座、青山下野守殿被仰渡、如養父時、小普請組松平石見守支配罷成。文政二卯年十一月、正月三日年始御禮登城仕度旨、十二月廿八日願之通可罷出旨、水野出羽守殿被仰渡候段、石見守申渡」。天保二年十一月六日歿す。法名青栢齋助信法暉日政居士」（過去帳）天保七年の武鑑に「二百表七人フチ、御醫師格、つきぢ、父舜川」友川助信」とあるは舊版を改めざ

りしならむ。友川子なし。伊川院の五男中信を養ひて嗣とす。

薩川中信

中信幼名薩四郎、初め幸川と稱し、天保十二年薩川と改む。全樂齋と號す。弘化元年十二月十六日法眼に叙せらる。（古畫備考）友信翁曰く、式部卿法眼に叙せらる。文恭公の奥繪師なり。大城本丸及西丸の障壁畫の御用を勤むること四度。終身三拾五人扶持を給はる。慎德公日光御社參及小金原猪狩御供等を命ぜられ、毎にその繪卷物を畫けり。四代の將軍に歷事すと。弘化元年薩川が大城に畫けるは左の如し。（古畫備考）

殿上之間
紅葉之間
御成廊下
同御杉戸九尺、東坡、雪松
同御杉戸九尺、夜景、舊殿
御錠口御杉戸九尺、鬼
大奥御座之間
同御小座敷六玉川
同御座之間御小座敷御小襖上四枚雪小鳥、中二枚雪南天、下四枚
同松御殿御化粧之間御小襖上四枚春ノ七草、下四枚雪南天
同字治間御佛間脇御杉戸若松ニ雪、竹ニ鶴
同御座間御入側御小座敷境御杉戸九尺、几帳ニ文臺、紅白梅
御同所御下段御二ノ間境御杉戸九尺、雪芭蕉、若ニ牡丹
御同所御三ノ間御入側御杉戸九尺、波ニ鶴、日ノ出ニ松
松之御廊下
櫻之間（但御天井共）

春川友信

嘉永五年西丸に畫けるもの左の如し。（國書）

大奥御對面所
殿上之間（但御杉戸、御天井共）

薩川は濱町に寓居しき。仍りて近古この家を呼ぶにこれを以てす。されど安政の地震後は地を本所林町三丁目（山伏井戸）に購ひ、家を建てゝこれに住めり。明治四年五月九日歿す。薩川の印一顆尚家に存ず。その男春川友信（天保十四年三月廿五日築地に生る、現在）これに嗣げり。即ちこの家の最後の畫家とす。左にその履歷書（東京美術學校藏）を掲ぐ。

嘉永六年三月十日　舊幕醫師並繪師狩野勝川院繪所入塾。七年間修業。
安政六年十二月十二日　舊幕ニ被召出、父薩川勤方見習、醫師並奥繪師被申付、一ヶ月二十人扶持、爲手當一ヶ年金三十兩給與。（友信翁曰、度々御前畫相勤）
同年　英米兩國ニ送付掛物繪拾五幅申被付、爲賞銀子五十枚、時服一重給與。
萬延元年　舊幕本丸新築ニ付、坐敷向之內波之間竹の廊下、客坐敷柳の間入側張付繪、杉戸拾枚、屏風五雙、掛物三幅被申付、爲賞大判三枚、時服二重給與。別段骨折ニ付、大判二枚、時服一重給與。自今爲手當壹ヶ年金五拾兩給與。

文久元年　和宮東京下向ニ付、爲待受、屏風一雙、掛物二幅申被付、爲賞時服一重、銀子五十枚給與。
同年　舊幕西丸新築ニ付、杉戸十五枚、小襖二通申被付、爲賞銀子百枚給與。
文久三年　舊幕開成所ニ洋書爲修行入學、二ヶ年間通學。
慶應元年　川上冬崖ニ入、三年間洋書修業。
明治六年四月十四日　十一等出仕申付候事。第一大學區開成學校出勤申付候事(文部省)。
同八年七月九日　免出仕(同上)。
同十四年七月十四日　任東京大學豫備門助教諭(同上)。
同十八年十二月十五日　依願免本官(同上)。
同廿四年八月十六日　任東京美術學校助教授(同上)。
同廿九年四月十四日　依願免本官(同上)。
その後東京盲啞學校教師ト爲リ、現ニ教鞭ヲ執ル。

表繪師
駿河臺家
狩野雲信

以上奥繪師四家ヲ敍シ了リヌ。左ニ表繪師諸家ノ傳記ヲ歴叙スベシ。

駿河臺ノ狩野家ハ表繪師諸家ノ中第一ノ格ヲ有シ、その筆頭トシテ扶持高モ諸家ノ五人扶持ナルト同ジカラズ、獨リ貳拾口ヲ給セラレき。これその祖洞雲益信が一たび探幽の養子ト爲リ、實子探信、探雪の生るゝに及びて、別に家を成しゝ(古畫備考曰、「後妻生探信、探雪、金信、義絶」)にも由れるならむ。洞雲實は彫金家後藤益乘光次の子。(狩野家譜)母は渡邊宮内少輔某の女、幼名を山三郎と云ひ、後通稱を采女と稱す。宗深道人、松蔭子(この印松花堂手作(古畫備考))等の號あり。法眼に叙せられ、式部卿法眼と云へり。(古畫備考)若木集には松蔭齋、薄友齋の別號を錄せり。古畫備考に曰く、「幼學書於惺々翁、已得其法、而有聲于世、性好綵畫、探幽法眼見而奇之、乃養而爲子、時年十有一、改其小字曰采女、養母某氏亦能慈愛之、慶安三年七月十一日養母死、探幽又娶某女、生圖書、主殿二子、先是法眼有故出而別居、于時年三十五、伯父永眞深愛其才、以女妻之(女年三十歳、無子)時黄檗隱元禪師、避亂而來于日本、見而殊遇、乃命其號爲洞雲、寛文五年九月也、猷廟特召而賜相見、甚愛其畫」狩野家五家譜に曰く、「探信守政出生後、有故離別、南光坊御取持ニテ大猷院樣御代被召出。上野護國院の檀越由緒略記に曰く、「洞雲益信ハ探幽守信ノ養子トナリシガ、故アリテ離別シ、慈眼大師ノ紹介ヲ以テ、別ニ一家ヲ爲シ、後ニ探幽ノ弟永眞安信ノ女ヲ娶テ妻トセリ」洞春由緒書(寶永八年十月洞春書上原本、狩野忠信藏)に曰く。

高貳拾人扶持
右大猷院樣御代被召出、御用相勤、毎年正月元日、御紋付御時服、黄金拜領被仰付、寛永十三年丙子年、日光山ヘ被遊御社參節、御供被仰付候。嚴有院樣御

代、毎年正月元日、洞雲儀御紋付御時服三、黄金三枚宛、例年於御奥、土井大炊頭殿、酒井雅楽頭殿被仰渡、拜領仕候。寛文七未年屋舗拜領仕候。常憲院様御代、新規御扶持方弐拾人扶持被下置候、天和二年戌十二月二日、阿部豐後守殿被仰渡候。元禄七戌年正月八日病死。

享年七十。古畫備考上野護國院に葬り、法名を智光院法眼洞雲宗深居士と云ふ。明誌檀越戒名記寛永中江戸城御本丸柳の間雪竹、御庄の間三ノ間道中ノ圖を畫き、御本丸御座敷井御廊下始様之大奥に由つ、擬珠子持野安女延寳禁裏御造營の時、左の障壁を畫けり。紫高御造營記畧に依る

清涼殿御伺之間、上段東ノ間四愛宝

常之御殿上段、中段、下段共曲水

夜御殿西三間うつぼ物語

御學問所南間野宴

小御所下段競馬、射馬始、乞巧奠

女御御殿二ノ間四季花鳥

姫宮御殿上段紙面會、御相撲四枝梅小鳥

同中段馬流

同御寢所大子

女御御里御殿中段松鳥

清涼殿御納間上段折廻西御杉戸東南、西汲鶴

常御殿御調臺巽御杉戸東草紙洗、西柳鶯鳴

同上段巽御杉戸西王昭君、東萩猪

同御杉戸西松ニ鶴、東温公破瓶

御學問所西戸御次御杉戸東家鎮典市、西王昭一

同折廻南ノ方御杉戸北張果老、南声鶴

同西ノ方御杉戸南呼高、北棚山鳥

女御御殿上段坤御杉戸東風吹は所しまらぬ、西声鶴

同下段縁坐敷御杉戸南花草、北しゆろ

御里御殿南側入口御杉戸東竹ニ鶴、西南天

新院御所御書院十二畳伺柳

同廣御所艮御杉戸南桑、北三矢

本院御所常御殿御座間松鳥、小壁鶴

同次よし野、小壁共

同艮方御杉戸東源明、西花くるま

同西御杉戸東岩水蒲雲、西牡丹

同坤方御杉戸北初平、南鳥鶴

天和二年朝鮮屏風木曾願書、河原兄弟一雙、うつぼ物語一雙を畫けり。古畫備考貞享四年の武鑑には吹出町に住せし由見え、古畫備考には「元禄中住幸町」とあり。

洞春義信

洞雲に嗣げるを養子洞春義信洞春陽信家系「方信又隔信」古畫備考は隔信とし、「始政信、又嫁信、又義信、瓦信」と記せり、今洞春美信墓碑の記に從ふ。畫工畫畧に安女とあり とす。守靜齋と號せり。實は探幽が勘當の嫡子五右衛門の子なり。古畫備考、又曰「朝鮮通聞、後為洞雲養子、子時十一歳カ、十五歳、洞春義信、後改屏信」洞春美信由緒書に曰く「常憲院様御代、天和二年戌十一月十八日御目見被仰付候。右養父洞雲家督、元禄七年戌七月十一日阿部豐後守被仰渡候。享保八卯年十二月十二日病死。護國院檀越戒名記及墓碑に依れば、享保四年十二月八日歿し、法名を

淨慈院洞春玄智居士と云ふ。寶永六年の禁裏御造營に洞春に畫ける所左の如し。

清涼殿御帳之間御下段 畫水、金

小御所御下段 張文帝止輦受百、金

同南廂西方一間牢之所杉戸貳枚折 西松賢、東橘源圖

同北廂ヨリ西廂ニ折廻一間牢之所杉戸貳枚折 南竹林七賢

同西廂ヨリ取付廊下間牢之杉戸貳枚折 東竹林七賢、西歸去來

常御殿御上段 源氏物語、金

同御中段 同斷、同

同廣廂 同斷、同

同夜御殿下段 群鳥、靈佑砂子

同東三ノ間四季眞山水、砂子泥引

同上段南廂巽角一間ノ所御杉戸貳枚折 東東坡、西山谷

同南廂西ノ行當一間ノ所杉戸貳枚折 東林和靖、西梁

同西廂南端一間ノ杉戸貳枚折 南梁、北鹿

御拜道廊下記錄所北之方一間ノ杉戸貳枚折 東鐵安道、西蘇卿

外樣御番所茶所 杜若鷺、金

清涼殿北方御車寄廊下北端杉戸四枚折 北柔櫻、南布袋唐子

同東側南端殿上間廂取合之所杉戸貳枚折 東東方朔、西杜若鶴

同年九月六日仙洞御所に於いて、命を蒙りて畫ける所左の如し。同前

六枚屏風一雙 唐獅子、雅彩色

二枚屏風押物二枚 四時詩、靈佑彩色、春水、夏雲、秋月、冬雪

洞春又正德元年朝鮮屏風紫式部、清少納言一雙、吉野、立田一隻、享保四年朝鮮屏風宮島行幸一雙、百雀紅白梅一雙、秋の野一雙を畫けり。古畫備考

元祿十七年の武鑑には「飯田町、廿人フチ 洞春義信」とあり。寶永五年の武鑑にも出づ。

元仙方信

洞春に嗣げるを元仙方信とす。方信幼名を藤吉と云ふ。狩野唐子系圖 洞春由緒書に曰く「常憲院樣御代、元祿十五年午十二月十五日、部屋住ニ而御目

仙洞御所常御所東御座之間 御床、御棚、靈佑砂子、宇津保物語、小堅知繪

同東南御座之間取合四幅、靈佑砂子、小堅押繪

同東緣座敷杉戸一間二枚折

同小御所下段 百馬、靈佑砂子、北鷺合、南鷺鷺圖

同御緣座敷坤角杉戸一間二枚折 東桐鳳凰、西陶淵明採菊圖

同御書院三之間 唐人鵜飼、靈佑砂子

同御書院東御緣座敷南杉戸一間二枚折 北清輔尚歌會、南竹藪雀

女院御所南御座之間東ノ方杉戸 北王昭、南井福

同常御殿東御座之間 御遊輦上貳枚三船、紫宸殿、絹地掘引、中貳枚宇治網代、同斷、下貳枚佐野ノ舟橋、唐綾、金、右彩色

院御所小御所上段 南御緣座敷襖共ニ、靈佑砂子、初鶯、月、同斷、明石、秋の夜の月、毛の駒の歌の所、花、同斷、南殿櫻、實

同下段 御緣座敷小壁張付共、靈佑砂子、若菜下、正月十九日女樂、詩、同斷、乙女、源氏オ人作文所、詩、同斷、藤袴、四月藤盛歌の所

同上段西春夏花鳥、靈佑砂子、大和繪

同北御緣座敷一間二枚折杉戸 東仲麿、明州ニ月ヲ見ル圖、唐人相笑、西芭蕉

攝家休息所公卿之間 牡丹獅子、金

中宮御盃之間二間 初瀬秋ノ雨、靈佑砂子

姫宮御殿表向之間東御緣座敷一間二枚折杉戸 北松鶴、南南天鶴

三幅對一通

押物五枚

見被仰付候。有德院様御代享保九年辰三月四日、父洞春跡式無相違被仰付旨、水野和泉守殿被仰渡候。寶暦五年亥五月六日（陽春家系十二日とす）病死。歳六十七。（狩野家系圖）法名示敎院丹岳元仙。（過去帳）古畫備考に曰く、「元仙身持悪々、勝手不如意トナル。吉原ノ大門打セシ由申傳」。同書又某書を引いて元仙の弟として雲仙を擧げ、享保十五庚戌年、弟雲仙九歳之節、養子相願候處、近來御扶持方被下候者ニ付、養子願不相濟」と記せり。護國院檀越戒名記に「仙岳院洞秀松翁居士、洞春養父石里」（天明五年七月廿九日歿）とあり。或はこれか、明ならず。寶永六年禁裏御造營の時、元仙が父と共に障壁に畫けるもの左の如し。（禁裏御所御繪様帳）

清涼殿朝餉間　蓮花鳥、金

同　鬼大夫間　松鶴、金

小御所南廂東方一間半之所杉戸貳枚折東布引瀧、西竹ニ虎

常御殿北廂中央一間半之所杉戸貳枚折東紅葉鹿、西笹士

女院御所南御縁座敷杉戸一間二枚折東紅葉合ノ山、天神山、印刻山、西花鳥

朝鮮屏風は享保四年海棠ニ小鳥、柳ニ小鳥一雙、寛延元年大和耕作一雙を畫けり。（古畫備考）享保二十年の武鑑に「三十人フチ、父狩野元仙方信」と記せり。

土佐狩野兩家系圖には、元仙方信の子に元春芳信あり。

狩野春信

元仙に嗣げるを洞春美信とす。浩然齋と號し、法眼に叙せられて式部卿と稱せり。（狩野家系圖）その自筆の由緒書に曰く、「私儀、惇信院様御代寶暦五年十月廿三日、父元仙跡式無相違被仰付候旨、松平右近將監殿被仰渡候。當御代寶暦十年辰十二月十五日、御目見被仰付候」。古畫備考に曰く、「明和元年畫朝鮮御用屏風、（大和人形十二月之遊一雙、朝鮮御用屏風御入用節之書付に見ゆ）天明五巳年十二月五日、出精仕、家業能仕候ニ付、法眼被仰付、寛政九年三月八日（護國院檀越戒名記及墓碑に依れば二月廿八日なり）病死、年五十一」。（備考曰、「或書六十四」）法名圓通院法眼洞春美信深如居士。（戒名記及墓碑）木挽町公用帳寶暦十一年十月の條、御切米御扶持被下候御繪師の中に狩野洞春の名見え、天明七年の武鑑には「するが町、父元信、廿人フチ」洞春法眼美信」と記せり。駿河臺に住せるは美信よりと見ゆ。護國院美信の墓陰に左の誌あり。上記と重複する所あれど、左にその全文を掲ぐ。

故法眼位式部卿狩野君洞春、諱美信、於法眼位洞雲君諱從信爲支孫、於洞春君諱義信爲孫、於玄仙君諱方信爲子、自洞雲君、始以繪事仕于幕府、而家世以爲職、寶暦五年君嗣、補畫員、壬午年春奉幕旨、畫所遊朝鮮國王屏風、又嘗奉東叡法王（護國院檀越由緒略記には、「天明四年畫當院釋迦堂獅子」と誤記せり）舊寶殿及便室壁、又嘗奉王敎、畫淺草寺觀音殿頂格八天人像（由緒略記に曰く、「大明院宮ヨリ觀音ノ木像ヲ拜領ス、此像一新後河鍋曉齋護持シ、今新川ノ鹿島氏ニアリ」）又畫王根岸別莊小麟壁、是皆在人之耳目者、他少々奉旨應、意老愈妙、猶有大所得、而以寛政九年二月二十八日病卒、越三月十日、葬上野護國院內、享年五十有一、號法印位狩野君諱典信女、生一子愛信、傳業克家、弟子五十人、亦皆各隨器成材云。洞白愛信建。友人駿谷吉田直賢記。

洞白愛信

美信の子洞白愛信嗣ぐ。初め妥女と稱し、法眼に叙せられて大藏卿と云ふ。狩野探岳藏文書に曰く、「高貳拾人扶持、實祖父元仙、實父洞春、狩野洞白愛信、天明六丙午年七月、朔日、部屋住ニ而初御目見被仰付候。寛政九巳年六月三日父洞春跡式被下置候旨、於躑躅之間、安藤對馬守殿被仰渡候。自畫卷物兩御丸ゟ獻上仕候。拜領地吳服町新道、表口四間、裏行貳拾九間五尺五寸、此坪數百拾九坪五合壹夕。當時（文化六年）駿河臺借地住宅仕候」。古

畫備考に左の墓誌あり。

故法眼洞白君、諱愛信、法眼洞春君長子、母法印榮川君女、以安永元年、生於駿台、幼穉聰、妙善繪事、敏奉旨、畫蓋莊具等、寛政九年喪洞春君、時年二十六歲、以駙齡率子弟教導、不墮其家聲、其六月嗣祖、齒具、研精致意、法格益進、文化四年春、奉旨畫所賜朝鮮國王屏風（一雙、文化八年、備考）櫻町殿亭故事、十年修補紅葉山原廟畫、十二月叙法眼、十二年畫東叡山法王宮障壁、是等畫院所敬羨、君皆奉特旨爲之、且皆先人之遺業也、不可不勉爲也、君於是乎可謂不辱爾祖而已、君天質溫如宏淵、生徒甚重之、娶石川氏、生洞益春信、先沒、繼娶柴田氏、文政四年二月三日（戒名記四日とす）疾卒、享年五十、葬上野護國院後山先塋之側、孝子狩野洞益春信建、栗原信充撰文并書。

法名を智源院前法眼洞白愛信淵如居士と云ふ。（戒名記及墓碑）文化十年の武鑑に「（洞春、廿人フチ、父洞白、するがだい）洞益成信」とあり。春信の嗣を洞白陳信とす。嘉永四年六月八日歿し、法名を觀正院洞白陳信速成居士と云ふ、陳信に嗣げるを洞春陽信とす。慶應元年七月廿七日歿し、法名を陽雲院洞春陽信居士と云ふ。その

（洞益春信、洞白愛信）

（洞春陽信）

（洞春秀信）

嗣洞春秀信初め洞榮と云へり。明治十七年八月十五日歿し、法名を眞靜院洞春法雲秀信居士と云ふ。秀信（二男四女あり）の後は畫を業とせず。遺族高崎に住すと聞けど詳ならず。（護國院墓碑由緒畫記、戒名記及墓碑に依る、由緒畫記又曰く「長男洞榮、八石崎氏ノ養子ト成ル、家職ヲ業トス」）

山下家、眞笑秀政

山下（上野坂町）の狩野家はその先狩野秀賴より出づ。秀賴の子を眞笑（系圖一本信正に作る）と云ふ。古畫備考には「眞笑、（秀政、又稱治部、一本秀信、一本中橋ノ記ニ秀政ニ作ル、治部入道法眼、卒年六十一）中橋ノ記ニ秀政一書秀賴」など記せり。狩野祐吉藏本の系圖には「秀賴後ニ秀政改、八十一歲卒」とし、春笑且信家系も初め秀賴、後秀政に改むとと爲せり。丹青若木集の系圖は元信の孫、祐雪の子と爲せれど、今取らず。畫史に曰く、「狩野眞笑秀賴子也、又稱治部、畫扇面者多矣、纔守家風而已」。眞笑の後に了不、了承ありし。若木集及畫工譜畧は眞咲の子了不、（治部）了不の子了承（長六秀政）とし、辨玉集は信正の子長は了不、次は了承（印秀政）とし、又一系圖に了承を兄、了不を弟に記せるあり。蓋し了不は狩野祐吉藏本の系圖に記せる如く早世なりしかば、その弟了承後を襲へるならむか。古畫備考には

（了不、了承秀之）

「了承（一作了乘、秀政、或秀之、一本秀信長六、一本ニ號治部入道了承、卒年四十三、中橋ノ記、一本年七十六）」と記し、一系圖に了琢、又秀俊に作れるものあり。されど春笑且信家系に秀之とあるを正しとすべし。狩野壽子藏系圖は秀之、俗名治部、卒四十三とし、狩野祐吉藏系圖に依れば、秀之隼人亮と稱し、天文八年に生れ、元和三年二月十六日七十九歲にて卒すと爲し、白石手寫本畫家系圖は長六を長六郎に作れり。了承元俊、伊織、式部の三子あり。（辨玉集了不の子とす、恐らくは非）伊織諱を成信、式部諱を重信と云ふ。（古畫備考）共に早世せり。（狩野祐吉藏系圖）徳川家に仕へたるは元俊を初めとす、故を以てこの家の由緒書元俊を以て初祖と爲せり。元俊諱を秀信と云ふ。隼人と稱せり。（古畫備考曰「或主殿季信、卒人入道元俊」）天正十六年生る、（狩野祐吉藏系圖）春笑由緒書（安政八年十月春笑書上、狩野忠信藏原本）に曰く、「權現樣ゟ御目見仕候。御本丸御天守御繪、京都二條御城御繪御用相勤申候。台德院樣御佛殿御彩色、大阪御城御用相勤申候。大猷院樣御靈屋御繪、御彩色、日光御宮御彩色、西御丸御休息御繪、高野山大塔御繪、御彩色、西御丸大御奥御守殿之分不殘御繪相勤申候。右之外御側御用品々被仰付、八拾五歲迄度々御前繪被仰付相

勤申候。中略寛文十二年七月十一日八十五歳ニ而病死仕候」。法名常敎院元俊日承居士、持野てい法名本法寺本所太平町に葬る。曾て寛永中御本丸御持佛堂に蓮天人「御本丸御座敷并御廊下絵様之次第」に見ゆ、玄後と記せり を畫けり。延寶二年乃至四年禁裏造營の時、姫宮御殿御次ノ間、紫宸及新院御所御杉戸北廂南廂人を畫きしことは禁裏御造營記畧に見えたり。畫事備考には「中比畫工を止て、漸久しく神職の家に行て勤む、年老て神職を止て、又狩野を名乗て畫用を勤む、松平家に仕ふ」とあり。

春雪信之

元俊に嗣げるを春雪信之とす。通稱を隼人「古畫備考曰「隼人入道」」と云ふ。春笑由緒書に曰く、「元俊實子狩野春雪、台德院様ゟ御目見仕候。嚴有院様御三歳之時ヨリ御拾四歳迄、御側御用被仰付、隔日之御番相勤申候。日光御社參之節御供仕候。御鷹野御供度々被仰付相勤申候。寛永年中朝鮮人ゟ被下候御屏風被仰付、相勤申候。御本丸御奥、御化粧之間御絵被仰付相勤申候。西御丸大御奥客人之間（御上段、御下段能寛、御次共狂言寛、御水丸御座敷并御廊下絵様之次第に見ゆ）御絵被仰付相勤申候。大猷院様御佛殿御彩色被仰付相勤申候。延寶三年町屋鋪（新橋か）拜領仕候。嚴有院様御佛殿御彩色、天和年中朝鮮人ゟ被下候御屏風被仰付相勤申候。（天和二年朝鮮屏風、横紅葉野馬一雙、古畫備考）中略元祿四年三月八日七拾八歳ニ而病死仕候。甘露叢延寶九年十二月廿五日の條、「上野御佛殿相勤絵師共、御褒美金八百兩被下」の中に春雪の名見え、畫事備考に「畫風は探幽にたよりて畫」と曰へり。法名慈峯院春雪日妙。本法寺過去帳五月八日とす 貞享四年の武鑑に「隼人信之」と記せり。春雪の弟に祐菴、本法寺過去帳に慈雲院祐菴日順居士、延寶七年八月廿二日とあり 宗順あり。古畫備考及狩野玉川家系圖に出イ、前者祐菴の後に作るは誤なり、本法寺過去帳に正覚院順庵日從居士、元祿十年五月十五日とあるはこれならむ 古畫備考には宗順の子壽信、法名少魂、狩野玉川家系圖亦同じ 壽信の子信勝、清六、狩野玉川家系圖は壽信の子業朴由信と爲せり 信勝の子亮良右衛門、中橋ノ門跡、右記を錄せり。春雪梅榮、春笑の一子あり。梅榮は別に家を成せり。

春笑亮信

春笑亮信通稱求馬、次男を以て家を嗣げり。梅笑由緒書（狩野玉川家系圖、和二年十二月書上）に曰く、「跡式次男春笑ゟ被下置、此家筋、當時狩野春貞相續仕罷在候」。古畫備考には「兄梅榮退身ニ付、次男ニテ春雪跡相續」と記せり。春笑初め求馬と稱す。古畫備考、同書「亮信或相信」と記したり。系圖一本相信なる春雪の三男とし、誤は春笑、「宅新橋竹川町」と記せれど、古畫備考はこれを錄して、「案ニ此人即春笑亮信ニテ春雪ノ嗣ナルベシ、宅新橋竹川町、信之二男トアリ」と曰へり。後記武鑑等に依るに、誤し信らじ。弗口直樹本系圖亮或作克」とあれど、克は亮の誤ならじ 春笑由緒書（後の春笑の書上）に曰く、「春雪實子（古畫備考養子と爲せり）狩野春笑、嚴有院様ゟ御目見、延寶元年五月廿八日被仰付、御側御用數多被仰付候。常憲院様御代、御扶持方拾人扶持拜領仕候。紅葉山嚴有院様御佛殿御絵、御彩色、天和年中朝鮮人ゟ被下候御屏風、部屋住ニ而被仰付、相勤申候。（天和二年朝鮮屏風、柳鷺、雪柳一雙、狩野家馬古畫備考）御本丸蹴鞠之間御絵、小石川御殿御舞臺之御絵、西御丸柳之間御絵被仰付相勤申候。上野嚴有院様御佛殿御類燒以後御普請之節御絵、御彩色被仰付候。增上寺崇源院様御宮殿御絵、御彩色、御本丸大御奥客人之間、御小座鋪御對面所御絵御用被仰付相勤申候。常憲院様御小納戸御用數多被仰付候。禁裏御所、仙洞御所、院御所御絵、（内侍所取合廊下間、四季花鳥露信、砂子、同中四同所、同仙洞御所常御所、所南御座之間三之間、絹作唐人、雲霞砂子、小鷹、紫宸高、尚溯既御所御絵様附に見ゆ、寶永六年 御本丸御座之間御絵、休息之間御絵、御杉戸共御絵數多被仰付候。常憲院様御佛殿御絵、御彩色被仰付相勤申候。淨光院様御佛殿御絵、御彩色被仰付相勤申候。文照院様御小納戸御用數多被仰付候。大奥御化粧之間三ノ御部屋御絵御用被仰付相勤申候。大御奥三ノ御部屋御住居替之節、御絵御用被仰付相勤申候。正德年中朝鮮人ゟ被下候御屏風被仰付相勤申候。（正德元年朝鮮屏風紙圖一雙、古畫備考）中略正德五年十月廿日七十歳ニ而病死仕候」。貞享四年の武鑑に「父信

之、新ばし春笑知信」（信之次男、八間町）、求馬相信」（本住南鍋町、備考）寶永五年の武鑑に「春笑知信（父春雪信之）」「春興相信（父春雪信之二男）」とあり、木挽町公用帳寶暦十一年十月の條下「御切米御扶持被下候御納師」の中にも「狩野春笑」を記せり。（武鑑の記載に依れば、兄は春笑知信、弟は春興相信の名を正しとすべきに似たれど、今姑く諸系圖に從ふ）

春水命信

春水家を嗣ぐ。

春水命信は通稱求馬、元牧齋と號す。（狩野姑射系圖）春笑由緒書に曰く、「春笑實子狩野春水、常憲院樣ゟ御目見、寶永五子年九月廿八日被仰付候、有章院樣御代部屋住ニ而御納戸御用數多被仰付候、有章院樣御代正德五未年十二月廿六日、父春笑家督被下置候旨、於躑躅之間、戸田山城守殿被仰渡候、有德院樣御代享保元年八月於御前御席繪被仰付相勤申候、享保四年朝鮮人ゟ被下候御屏風被仰付候旨、井上河内守殿御宅ニ而被仰渡候、享保十三年三月御卷物、御押繪被仰付相勤申候、惇信院樣御代寛延元年、朝鮮人ゟ被下候御屏風被仰付候旨、酒井雅樂頭殿御宅ニ而被仰渡候、寛延五申年五月、御掛物御押繪被仰付相勤申候、公方樣被爲入西御丸、御疱瘡被遊候節、寶暦二申年十一月、御卷物貳卷御繪被仰付相勤申候、寶暦六子年正月十二日（狩野、てい及本住寺過去帳ては八日とす）七拾五歳ニ而病死仕候」「法名眞善院春水日種居士（過去帳）」享保二十年の武鑑に（父春笑、深川材木町）春水命信」とあり。

春笑宣信

本法寺の過去帳及墓碑に、寶暦九年五月廿八日に歿せりとて、善量院眞笑日延居士を錄せり、明ならず。

春水に嗣げるを春笑宣信とす。揮毫齋と號す。（狩野齋子系圖）通稱を求馬と云ふ（狩野姑射系圖）その自筆の由緒書（前來引く所）に「春水實子狩野春笑」と記して、その閲歷を載すること左の如し。

有德院樣御目見延享元子年七月廿八日被仰付候。

惇信院樣御代寶暦三酉年三月十日　駿州久能山御宮向御繪、御彩色御用、部屋住ニ而被仰付相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候節、於焚火之間、板倉佐渡守殿被仰渡候。

同御代寶暦五亥年五月十七日　紅葉山嚴有院樣御靈屋御繪、御彩色御繕御用部屋住ニ而被仰付相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候節、於焚火之間、板倉佐渡守殿被仰渡候。

惇信院樣御代寶暦六子年四月四日　父春水家督被下置候旨、於躑躅之間、西尾隱岐守殿被仰渡候。

同御代寶暦九卯年六月八日　上野文殊樓御彩色御用被仰付相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候節、於焚火之間、板倉佐渡守殿被仰渡候。

同御代寶暦九卯年閏七月廿二日　日光諸堂社御彩色御用被仰付相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候節、於焚火之間、板倉佐渡守殿被仰渡候。

同御代寶暦十辰年正月二日　宮內卿樣御疱瘡被遊候節、御地紙御繪貳拾枚被仰付相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候。

同御代寶暦十辰年正月十五日　御卷物御繪被仰付相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候。

同年六月廿一日　二御丸御掛物被仰付相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候。

當御代寶暦十一巳年二月廿九日　御蕚様新規御殿御三之間御繪并御杉戸御繪御用被仰付相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候節、於焚火之間、松平攝津守殿被仰渡候。

當御代寶暦十二午年三月六日　朝鮮人ゟ被下候御屏風被仰付候旨、松平攝津守殿御宅ニ而被仰渡候。(字治川涼、螢一双、朝鮮御用御屏風御入用等書付に見ゆ)

當御代寶暦十二午年六月十五日　上野浄圓院様御宮殿御彩色被仰付相勤申候。御褒美白銀拜領仕候節、於焚火之間、松平攝津守殿被仰渡候。

當御代寶暦十三未年　日光御宮御靈屋御繪御彩色御用被仰付相勤申候。御褒美白銀拜領仕候節、於焚火之間、松平攝津守殿被仰渡候。

當御代明和四亥年二月十二日　壽賀宮御方ゟ被遣候御屏風被仰付候旨、松平攝津守殿御宅ニ而被仰渡候。

同御代明和九辰年　上野心觀院様御廟御拜殿御繪、御宮殿御彩色御用被仰付相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候節、於焚火之間、水野出羽守殿被仰渡候。

當御代安永二巳年十一月五日　安祥院殿御住居向御杉戸、御小襖、其外御繪不殘被仰付、相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候節、於焚火之間、水野出羽守殿被仰渡候。

御前繪度々被仰付罷出相勤申候。右御褒美白銀拜領仕候。

古畫備考に曰く、「寛政七卯年七月廿九日隱居」狩野てい過去帳に依るに、同九年十月十九日歿し、法名を善利院笑翁日宣居士と云ふ。享年六十八。(春笑且信家系)天明七年の武鑑に「深川柳川町、父春水、十人扶持春笑宣信」と記せり。

春信章信　春貞興信　春笑且信　春貞　春雪　深川水場家、梅榮知信

春笑二子あり、長子春仙意信は、春笑由緒書に「明和二酉年七月朔日、部屋住ニ而御目見仕候、於御前度々御繪被仰付、罷出相勤申候、右御褒美白銀拜領仕候」とあり、天明七年四月廿八日歿し、法名を報善院春仙日應居士と云ふ。(過去帳及墓碑)その弟春貞興信仍りて、父の後を嗣げり。古畫備考は春貞は初名にて、家督相續の後春笑と改むと言ひ、且記して曰く、「天明七年十月一日爲惣領、寛政三亥年十一月朔日御目見、同七卯年七月廿九日家督」過去帳(木挽寺及狩野てい)及墓碑に依るに、文政二年七月廿八日歿し、法名を本覺院春貞日成居士と云ふ。享年六十五。(春笑且信家系)文化十年の武鑑にて(「下谷車坂丁、十人フチ、父春笑」)「春貞興信」とあり。春貞に次げるを眞笑意信とす。古畫備考に曰く、「寛政十一未年十二月一日御目見、弘化四年九月十三日歿し、法名を本成院眞笑日久居士と云ふ。(過去帳及墓碑)天保七年の武鑑に(「父春貞、十人フチ、上野車坂下」)眞笑意信」と記せり。その嗣春笑且信は古畫備考に「天保十五年部屋住ニ而、御本丸桔梗之間御繪相認」むとあり、嘉永三年六月四日歿し、法名を長遠院春笑日躰居士と云ふ。(過去帳及墓碑)その嗣春貞は古畫備考に「當時、十人扶持」とあり、明治元年四月十四日歿し、法名を本壽院春貞日信居士と云ふ。その嗣春雪は同五年二月十三日歿し、法名を本照院春雪日善居士と云ふ。享年卅三歳。(過去帳及墓碑、春雪の墓てい現存せり、書記あれどし見るを得ず、俗後查を期す)

深川水場の狩野家は山下狩野家より出で、春雪の長子梅榮知信を祖とす。梅榮初め一學(系圖一本一角に作る)と稱す。狩野祐吉系圖に曰く、「嚴有院様御

代明暦三酉年六月朔日十七歳ニ而御目見仕、實春笑兄ニ而候得共、病身ニ付引込候内、春雪家督ヲ春笑ハ被仰付候故、春笑弟罷成、常憲院ハ御目見被仰付候」由緒書（狩野岱吉職梅笑了承、梅春殿衣道記せる「御用向扣覚」二冊の中に在るしの及梅春、梅笑、勝五郎上の各由緒書四冊）を綜合して用ゐる 錄する所亦略同じ。曰く「明暦三酉年六月朔日、嚴有院様ハ御目見被仰付候」御側御用向御屏風、御巻物、御押絵度々被仰付相勤候處、病身ニ罷成、三拾壹歳之時御願申上、引込、春雪家督相願、弟春笑ハ被仰付、其後快氣仕候ニ付、元祿十二卯年三月廿八日、常憲院様ハ御目見被仰付、其節御短冊獻上仕、御側御絵度々被仰付候」元祿十三辰年二月十一日病死仕候」歳五十九。（狩野岱吉系圖）本法寺に葬る。法名敬信院梅榮日照（本法寺過去帳）古畫備考に「瀧川町ニ住」とあり。

梅春旭信

梅榮に嗣げるを梅春旭信とす。春水命信の弟なり。一學と稱し、（狩野岱吉系圖）眞活齋と號す（古畫備考）深川靈岸寺前に住せり（系圖及古畫備考）由緒書に曰く「正德元年卯三月廿八日、文昭院様ハ御目見被仰付、先格之通御短冊獻上仕候」梅榮跡式被下置、加父時御絵御用度々被仰付相勤申候」有德院御代又々御目見被仰付候」御用向度々被仰付相勤申候」竹姫君様、利根姫君様、兩御守殿御用向被仰付相勤」寛保三亥年七月三日病死仕候」歳六十。（狩野岱吉系圖）法名時敎院梅春日現（本法寺過去帳、同帳又元祿十三年二月十二日歿、時敎院梅春日現居士及寛保五年七月三日歿梅春居士を錄せり、明ならず）享保二十年の武鑑に「父梅榮、深川靈岸寺前」梅春旭信」とあり。

梅笑師信

梅春に嗣けるを梅笑師信とす。初め榮信、與信又國信と云ひ、一學と稱す。（狩野岱吉系圖）その自筆の由緒書（享和二年十二月、狩野岱吉職）に記せる閲歴左の如し。

御扶持方五人扶持　　狩野梅笑

有德院様御代寛保三亥年八月　父梅春跡式被下置（中略）如父時御用相勤。竹姫君様、利根姫君様御守殿御用被仰付。

寛暦三酉年　相州鶴ヶ岡八幡宮御造營御絵、御彩色御用被仰付。

同九卯年　日光諸堂社御修復御絵、御彩色御用被仰付相勤。

同十辰年　御地紙貳拾枚御絵、被仰付相勤。同年御巻物御絵御用被仰付相勤。同年二之丸御掛物御用御絵被仰付相勤。

同十一巳年　有章院様御靈屋御修復御絵、御彩色御用被仰付相勤。

同十二午年　朝鮮人ゟ被下候御屏風壹雙（牡丹、菊ニ流、朝鮮御用御屏風御入用等書付に見ゆ）御絵被仰付相勤。同年田鶴宮御方御婚禮御用御屏風一雙御絵被仰付相勤。

寛政六寅年　文昭院様御靈屋御彩色御用被仰付相勤。

同八辰年七月廿八日　御扇子獻上仕、御目見仕。同年上野御宮御修復御絵、御彩色御用被仰付相勤。

同十午年三月　一條殿參向之節、御席絵被仰付相勤。同年淑姫君様御入輿御用御屏風壹雙被仰付相勤。

同十二申年十二月　新規御扶持方五人扶持被下置。

享和元酉年　増上寺本堂御修復并御經藏御再建御絵、御彩色御用被仰付相勤。

同二戌年十月　願之通拜領屋鋪被下置候間、所者見立相願可申旨、井伊兵部少輔殿被仰渡、相應之場所無御座候に付、拜領不仕。戊年迄六拾年相勤罷在候。

梅春由緒書（狩野忠信願取本、弘化四年十二月書上、自筆）に曰く。

文化二丑年三月　公家衆參向之節御席繪、立花出雲守殿被仰渡相勤。

同四卯年十二月　朝鮮ゟ被遣候御被證御下繪、阿部備中守殿被仰渡相勤。

同五辰年八月二十七日　病死仕。

本法寺の過去帳及墓碑に依れば、文化四年十二月廿八日歿し、これ事實ならじ法名を瑞龍院梅笑日國居士と云ふ。狩野祐吉系圖に「八十歳卒」と見えたり。木挽町公用帳寶暦十一年十月の條、「無足に而屋敷拜領も無」之、御用相勤候御繪師」の中に「狩野梅笑（梅春跡春笑家ゟ分レ候者、無足御目見仕候家筋之者）」と記し、文化十年の武鑑（脱を改めざるか）に「れいがんしまロ丁、五人ふち、父梅春」、梅笑國信とあり。梅笑の「御用向扣覺」に、寛政五年十二月二日春笑より御月番に差出したる左の届書あり。如何なる事情なりしかは明ならず。

以書付御届申上候

狩野梅笑

右梅笑義私分家之者ニ御座候所、存寄御座候に付、義絶仕候段、先達而小出信濃守殿ゟ申上候。然所此度一類共相談之上、和談仕候に付、御届申上候。以上。

十二月二日

了承賢信

梅笑師信に嗣げるを了承賢信とす。初め信川と云ひ、畫を探信に學べり。享和二年四月十三日了承と改名す。（古畫備考）梅春由緒書の記載左の如し。

狩野春笑

文恭院様御代寛政十一未年五月朔日　先格之通御扇子獻上仕、御屋住に而初而御目見仕。

文化元子年二月　公家衆參向之節御席繪、立花出雲守殿被仰渡相勤。

同二丑年八月　増上寺台德院様御靈屋御取繕之節、御彫物御彩色御用被仰付相勤。

同五辰年十一月　父梅笑跡式相續仕。

同六巳年四月　公家衆參向之節御席繪、植村駿河守殿被仰渡相勤。

同年六月　御扶持方五人扶持被下置。

同七午年三月　願之通拜領屋鋪被下置候間、所者見立相願可申旨、堀田摂津守殿被仰渡、相應之場所無御座候に付、未拜領不仕。

同九申八月　日光御宮御修復に付、御繪、彩色御用可相勤旨、堀田摂津守殿被仰渡相勤。

同十一戌年四月　豪姫君様御引移御用御屏風御繪一雙被仰付相勤。

同十三子年三月　公家衆參向之御席繪、植村駿河守殿被仰渡相勤。

文政元寅年七月　日光御靈屋矣之院御修復ニ付、御繪、彩色御用被仰付相勤。同年十二月、日光御靈屋御修復ニ付、御繪、彩色御用可相勤旨、堀田摂津守殿被仰渡相勤。

同三辰年五月　元姫君様御引移御用御屏風、御衝立御繪被仰付相勤。

同四巳年三月　公家衆參向之節御席繪、紀伊守殿被仰渡相勤。

同七申年十二月　盛姫君様御引移御用御屏風御繪被仰付相勤。

同九戌年二月　和姫君様御用御雛屏風貳雙御繪被仰付相勤。

同年三月　公家衆參向之節御席繪、林肥後守殿被仰渡相勤。

同年　文姫君様御引移御用貳枚折御屏風御繪壹雙被仰付相勤。

同十亥年正月　文姫君様御用御雛屏風壹雙御繪被仰付相勤。

同年五月　溶姫君様御引移御用御卷物御繪貳卷被仰付相勤。

同年　末姫君様御用御雛屏風壹雙御繪被仰付相勤。

同十一子年正月　溶姫君様御用御雛屏風壹雙御繪被仰付相勤。

同年　楽姫君様御用御雛屏風壹雙御繪被仰付相勤。

同年七月　眞行草御繪三幅被仰付相勤。

同年十月　和姫君様御引移御用御屏風壹雙御繪被仰付相勤。

同十二丑年正月　楽姫君様御用御屏風壹雙御繪被仰付相勤。

同年十一月　増上寺台德院様御靈屋向御修復ニ付、御繪、彩色御用被仰付相勤。

同十三寅年正月　和姫君様御用御雛屏風貳雙御繪被仰付相勤。

同年九月　増上寺崇源院様、天英院様御靈屋向并本堂、三門御修復ニ付、御繪、御彩色御用被仰付相勤。

天保二卯年五月　末姫君様御引移御用貳枚折御屏風壹雙并御卷物貳卷御繪被仰付相勤。

同年十一月　有姫君様御用御雛屏風貳雙御繪被仰付相勤。

同年十二月　暉姫君様御用御雛屏風貳雙御繪被仰付相勤。

同年　喜代姫君様御引移御用御衝立、御卷物御繪被仰付相勤。

同三辰年正月　永姫君様御引移御用御腰屏風御繪被仰付相勤。

同年三月　公家衆參向之節御席繪被仰付相勤。

同四巳年正月　喜代姫君様御引移御用御雛屏風貳雙御繪被仰付相勤。

同年十一月　紅葉山御宮御霊屋御修復ニ付、御絵、彩色御用、林肥後守殿被仰渡相勤。
同五午年正月　里姫君様御用御雛屏風貳雙御絵被仰付相勤。末姫君様御引移御用御雛屏風貳雙御絵被仰付相勤。
同六未年四月　西丸御座之間御修復ニ付、御杉戸八枚御絵御手入御用、林肥後守殿被仰渡相勤。
同年十月　根岸御隠殿御座敷御絵御用、林肥後守殿被仰渡相勤。
同年十二月　永姫君様御引移御用御雛屏風三雙御絵被仰付相勤。
同八酉年二月　公家衆参向之節御席絵被仰付相勤。
同年七月　泰姫君様御用御雛屏風御絵貳雙被仰付相勤。
同年十二月　於御座之間、御前御席絵被仰付相勤。
同九戌年　西丸御躰間御絵、林肥後守殿被仰渡相勤。
同十亥年　御同所歴之間御絵、林肥後守殿被仰渡相勤。
同十二丑年六月　東明宮御方御参内御用御屏風壹雙御絵被仰付相勤。
同年同月　増上寺有章院様、惇信院様御霊屋御修復ニ付、御絵、彩色御用、増山弾正少弼殿被仰渡相勤。
同十三寅年二月　公家衆参向之節御席絵、遠藤但馬守殿被仰渡相勤。
弘化二巳年　御本丸小廣間御絵、大御屏風片雙、御廊屏風壹雙、御衝立貳脚、大岡主膳正殿被仰渡相勤。
同三午年十一月八日　病死仕(法名賢龍院了承日信、本法過去帳、一月廿八日と爲せり)

狩野祐吉系圖には「七十九歳卒」、狩野探岳藏文書には「深川永代寺地内ニ住居仕候」、天保七年の武鑑には「父梅笑、圓研堀元矢ノ倉了承賢信」とあり。了承の子は古畫備考に梅笑一信(卯歳于伊川院)梅榮、梅春(幾于)の三人を錄し、狩野壽子藏本系圖は了承の子梅笑、梅笑の子梅榮、早世梅榮の子梅春と爲せれど、狩野祐吉系圖は了承の子梅笑、一信、病身梅笑の子梅春、貞信及梅榮、忠信病身梅春の子玉元、昭信、梅笑ト改、後踏玉ト改名、實ハ梅榮其子玉元の子祐吉現在、當なヒ業とせずと記せり。後者最も據るに足る。然れども梅春由緒書、及勝玉由緒書(狩野祐吉藏原本、明治二年九月勝玉自筆)は了承に嗣げるを梅春とし、後者は又梅春に嗣げるを勝玉と爲せり。梅榮は過去帳及墓碑に依るに法名を豐善院梅榮日忠と云ひ、天保十四年九月廿三日歿せり。梅笑は過去帳に「梅春厄介梅笑事」と記して、安政三年十月六日歿し、法名を速成院得榮日身居士と云ふ由見えたり。又同帳に、天保七年七月廿日歿、秋圓惠光信士、嘉永二年八月十日歿、本久院速成日身信士、同三年十二月廿七日歿、心性院鑑鶴日住居士などあれど、明ならず。

梅春貞信

梅春貞信は賢信の養子(備考)なり。その自筆の由緒書に左の如く記載せり。

私儀弘化三午年二月十五日、先格之通御扇子獻上仕、部屋住ニ而初而御目見仕、同年十月十七日公家衆参向之節御席絵、大岡主膳正殿被仰渡候。

勝玉由緒書は更に記して曰く。

同年十二月廿四日　父了承跡式相續仕。
嘉永元申年八月二日　增上寺安國殿御宮向井本堂、三門御修復ニ付、御繪彩色御用、大岡主膳正殿被仰渡相勤。
同三戌年二月十九日　日光御宮御修復御用、阿部伊豫守殿被仰渡相勤。
同四亥年七月十九日　御扶持五人扶持被下置候段、大岡主膳正殿被仰渡。
同五子年七月廿二日　西丸小十人番所御繪、御同所大奥向御對面所御入側御杉戸壹間半二枚建御繪御用、遠藤但馬守殿被仰渡相勤。
同年十二月廿七日　願之通町屋鋪被下置候間、所者見立相願可申旨、本庄安藝守殿被仰渡、相應之場所無御座候ニ付、拜領不仕。
安政五午年六月十四日　晴光院樣御住居御衝建御繪御用、本多越中守被仰渡相勤。當巳年(明治二年)三月廿三日病死仕。

勝玉昭信

想ふに、明治二年歿すとは表向にて、本法寺過去帳に東舊院梅春日貞、安政五年九月廿三日と記せるもの、實にこの梅春ならむ。梅春の子某、文久三年十二月廿三日歿し、法名を寂光院道入信士と云ふ。過去帳
梅春に嗣げるを勝玉とす。初め梅笑と云ひ、安政五年五月勝玉と改む。御用向扣覺に改名の願書及願濟の屆書あり 諱を昭信と云ふ。御用向扣覺の明治七年二月家祿奉還願書には元勝玉狩野昭信とあり 畫を勝川院に學べり。その自記の由緒書に曰く。

溫恭院樣御代安政二卯年正月廿八日　先格之通御扇子獻上仕、部屋住ニ而初而御目見仕。
同五午年十一月廿日　公家衆參向之節御席、繪、遠藤但馬守殿被仰渡相勤。
同六未年十一月朔日　英吉利西ゟ被下之御屏風御繪御用、御同人被仰渡相勤。
同年十二月　年始、五節句、月並御禮能出御樣被仰付。
萬延元申年閏三月六日　御本丸御座敷向御繪御用、牧野遠江守殿被仰渡相勤。(狩野祐吉藏舊記に、この時勝玉自筆の「御本丸小廣間御繪御入用金泥箔積」あり)
元治二丑年三月　實成院樣御陣子、屏風御繪御用相勤申候。

王政復古の際、請ひて幕臣たり。第二回內國繪畫共進會出品人略譜に曰く、「靜岡縣人ニシテ東京府京橋區山城町ニ寄留ス。中畧 明治四年十月兵部省海軍十三等出仕拜命シ、又地理局雇ヲ奉職ス」。明治十五年內國繪畫共進會出品審査官たりき。その子祐吉梅園(慶應二年五月生、現在)は畫を橋本雅邦に學びしが、今はこれを業とせず。

御徒士町家、休白長信

下谷御徒士町の狩野家は謂はゆる休白狩野家なり。松榮の子休白長信を祖とす。休白(自等に從ふ、一作伯)初め左衛門(又左衛門尉、白石手寫本畫家系)と稱す。昌信に對して世に古休伯と呼ぶ。古畫備考に曰く、「家傳云、長信寶者松榮嫡子也、始爲本鄉家(大眼にて)之養子、後歸本氏而爲畫師、故其系爲鹿子。」玉榮の

由緒書（狩野重次・原本）に曰く、「權現様御代慶長年中、從京都始而駿府ゟ被爲召、御用被仰付、相勤申候。台德院様當地ゟ被爲入候節、御供被仰付、罷下り、休伯一人ニ而御用相勤申候。夫より次第に御用多罷成、一人ニ而難相勤御座候ニ付、京都ニ甥世悴共罷在候間、呼下し御用相勤させ申度段奉願候處、尤ニ被爲思召、休伯願之通被仰付。其節采女（後源四郎）主馬（右京亮後永）右三人共ニ若年之時分呼下し、右之者共休伯召連、御目見爲仕、夫より右之者共段々御勤來り申候。右京を惣領家ニ仕候儀者、惣領家ニ實子無御座候故、其節右京義休白聟ニ仕、惣領家之養子ニ仕候。右之三人之者も右近子供ニ而御座候。休伯義者、駿府ゟ被爲召候節、法橋被仰付、御扶持方拾四人扶持拜領仕候處、御暇奉願、古郷ゟ罷歸り爲可申、右之御扶持方指上置候間、達而御暇奉願候得共、先々相勤候樣被仰渡候内、病氣相果申候。」玉燕由緒書（寛保三年二月、狩野重次識原本）に曰く、「台德院様御當地ゟ御入國之節、御供被爲仰付、江戸表ゟ罷下、其砌法橋被成下、御扶持方拾四人扶持拜領之仕候。度々御用相勤申候内、規模ニ仕候者、鹽鶴之御屏風被仰付相務、且又寛永十八巳年八月日、日光奥院御拜殿御造營之節、御繪并彩色等被仰付相勤申候。其節道中人馬御朱印頂戴仕候而、今所持仕候。休伯儀極老罷成候ニ付、京都生國之儀故、歸京仕度段奉願、御扶持方差上申候。未否之御沙汰無御座候内、無間も病死仕候。休白が法橋に叙せられしは、狩野重次藏口宣案に依るに、寛永二年三月十日「大法師休伯、なり、その歿したるは、同家過去帳に依るに、承應三年十月十八日享年七十八にして、法名を淨嚴院前法橋休伯日如居士と云ふ。休白の畫きし名物の鹽鶴屏風について、享保六年三月三日、奥組頭益池了順より休碏にその由來を問ひしに、休碏病氣の故を以て、休山代りて登城し、「台德院様御代、御屏風被仰付、鶴生ニ能似候樣ニ被仰出、依之御憂所ニ有之鹽鶴を以寫、仕立上ケ差上ケ、其後御コブシノ鵬飛付、依之其疵ゝ今ニ有之由、御意ニ而鹽鶴の御屏風と申傳」と答へきこそ。了順の書及答申の記錄

狩野重次識

休白永德の女を娶り、白石手寫本系圖

休白昌信、女子、常信の聟敗馬征信、敗馬介、早世、征一作行及休圓清信を生む。古畫備考に依る、系圖或は昌信、内藏面、木工之助、式部の四子とし、或は休圓、永月、休碩を以て昌信の三子とせるものあり

休白昌信

は別に家を成し、昌信後を嗣げり。

休碏友信

休白昌信通稱左衛門（又左衛門尉）と云ふ。玉燕の由緒書（狩野忠信識原本、「女正月」）に曰く、「大猷院様御代御目見仕候。父休伯歸京之願申上置、病死仕候得共、其儘御當地ニ罷在、家業相續仕、段々御用被爲仰付相勤申候。嚴有院様御代、西御丸ニ被爲入候内、御番被仰付相勤、於御前爲御慰、度々御繪被爲仰付候。御筆の御繪茂頂戴仕、今以奉所持候。御本丸ゟ被爲入候刻、御番者御免被成下候」。元祿元年十月十五日（古畫備考、寛文二年正月八日病死とせるは誤ならむ）歳六十八にして、法名を淨相院昌信日理と云ふ。（狩野重次過去帳）曾て天和二年朝鮮屏風源氏繪合、桐壺、空蟬一雙を畫けり。（古畫備考）貞享四年の武鑑に「左衛門昌信」とあり、昌信四子あり。休碏友信、休山是信（休圓の養子と爲る）玉燕季信及休琢里信（寛永四年正月廿五日早世、法名了明院榮通信士、狩野重次系圖及過去帳に依る）これなり。

休碏友信

休白昌信に嗣げるを休碏（碩一に碩に作る、今碏に從ふ）友信とす。初め宮内（藏人、衛門佐）と稱せり。玉燕由緒書（狩野忠信識）に曰く、「嚴有院様御代御目見仕、度々御用被仰付相勤申候。文昭院様御代、右由緒書を以、數年御扶持方拜領仕度段奉願上置候處、正德元（卯）年十二月、御扶持方五人扶持被下置之旨、久世大和守殿被仰渡候。享保六年九月五日歿し、法名を常法院友信日相と云ふ。（狩野重次過去帳）曾て寶永六年禁裏御遠營の時、記錄所二之間、牧、雲格、砂子御詰番所

御後間（水鳥、慈金）仙洞御所常御所東南御座之間申口（作庭、雲落砂子）を畫き、（巢喜仙洞院御所御繪樣附）朝鮮屏風は天和二年松雉子小鳥、竹山鳥一雙、正德元年大和花鳥一雙、享保四年賀茂競馬一雙を畫けり。（古畫備考）貞享四年の武鑑に「宮内友信」、元祿十七年の武鑑に「木郷御弓町」休碩友信」、寶永五年の武鑑にも「休碩友信（父林伯）」と記せり。狩野重次曰く、休白屋敷とて、古休白の拜領せしは弓町にて、二代目頃に返上し、その後御徒士町に住せり。二代目昌信は雁を得意とし、御本丸雁之間を畫きぬ。されど畫師としてよりは、寧ろ三代將軍の御小姓、同朋の如き役を勤めしなりと。休碩一子休宅ありしが、寶永七年八月四日早世す。法名を心應院自性法觀信士と云ふ。（狩野重次系圖及過去帳に依る）元祿十七年の武鑑に「木郷御弓町」休宅重信」、寶永五年の武鑑に「休宅里信（父休碩友信）」とあり。その諱は重信の方正しからむ。

休宅里信

休碩友信

休碩の後はその弟玉燕季信嗣ぐ。初め外記と稱せり。（古畫備考）玉燕由緒書（狩野盛次所藏）に曰く、「常憲院樣御代元祿十四巳年十二月、兄休碩願之通養子被仰付候。文昭院樣御代寶永八卯年三月十五日、部屋住ニ而御目見仕候。當御代享保六巳年、養父休碩跡式、右之由緒御吟味之上御扶持方無相違被下置候。井上河内守殿被仰渡候。尤數度御用相勤來申候」。寛保三年八月廿一日、歳六十一にて歿し、法名を顯樹院峯山日照と云ふ。（狩野盛次過去帳）享保二十年の武鑑に「川中天神後小石川」玉燕季信」とあり。玉燕の子休伯壽信、（享保十一子年十二月十五日の目見、寛保三年十二月二日家督）（古畫備考）幼名を休全と云ふ。（古畫備考休全と壽信とを別人とし、「元文五申年閏七月一日御目見、寛保二年五月九日、休全家督延享と改」と記せり）早世す。仍りて玉榮をして家を嗣がしむ。

休伯壽信

玉榮在信

玉榮在信は古畫備考に「實玉燕二男、號長齡齋」と曰ひ、狩野壽子系圖は壽信に嗣ぐと爲せり。然れども實は休白長信の門人幸之丞の曾孫休榮稙信の子なり。その事休心由緒書（狩野盛次所藏、寛政十一巳未年二月狩野休心自筆原本）に詳なり。（後に出づ）玉榮由緒書（狩野盛次所藏原本自筆）に曰く、寛保三亥年十二月（古畫備考に二日とあり）父玉燕家督無相違被下置候之旨、松平伊豆守殿被仰渡候。延享三寅年四月廿八日（古畫備考は二年と爲せり）御目見仕候。同四卯年朝鮮人被下候御屏風御繪被仰付候。（寛延元年、柳ニ鷺、小鳥一雙、古畫備考）寛延年中鷹狩之御卷物、御扇子御地紙御繪被仰付。寶暦元未年日光御宮御彩色御用相勤、爲御褒美銀二十枚、格別ニ出精仕候付銀十枚拜領之候。松平攝津守殿被仰渡候。惇信院樣二ノ御丸被爲入候節、御衝立御繪被仰付相勤申候。爲御褒美銀子十枚拜領仕候。浚明院樣御代寶暦十二午年四月、於御宅松平攝津守殿被仰渡候、御產所御繪被仰付相勤申候。同十三未年於御宅松平攝津守殿被仰渡候、朝鮮人被下候御屏風御繪被仰付相勤申候。（俵ニ雄子、竹ニ鶴流小鳥一雙、朝鮮御用御屏風御入用等皆付）其外度々於御前御繪被仰付相勤申候。當御代寛政四子年十二月、京極備前守殿可被仰渡所、御用多ニ付、右之趣意被仰、於御城曲淵出羽守殿被仰渡候、西ノ御丸蘇鐵之間、同鄭躅之間御取造ひ御用相勤申候。同御代寛政七卯年七月より十一月まで、日光御宮御假殿、御靈殿、御拜殿、御本坊御座鋪取造ひ御用相勤申候」。古畫備考に曰く、「寛政九巳年十二月廿八日隱居、年六十五」。文化元年六月廿一日、歳七十五にて歿し、法名を三絶院通靈日狀と云ふ。（狩野盛次過去帳）木挽町公用帳寶暦十一年十月條下、御切米御扶持被下候御繪師の中に狩野玉榮の名を列し、天明七年の武鑑には「小石川中天神下、父玉燕玉人ノチ、玉榮在信」と記せり。

休伯滿信

玉榮の嗣を休伯滿信とす。狩野探岳藏文書に曰く、「高五人扶持、實祖父玉燕、實父玉榮、狩野、休伯。寛政九巳年七月廿八日初御目見被仰付候。同

年十一月廿八日、父玉榮跡式被下置候旨、於鄰閣之間、戸田采女正殿被仰付候。拜領屋敷未無之候。當時(文化九年)四ッ谷伊賀町狩野休眞方ニ同居仕候。天保十年二月廿一日、歳七十三にて歿し、法名を向支院道安日休と云ふ。(狩野重次遺去帳)文化十年の武鑑には「中橋お[illegible]が町、父玉榮、五人フチ休伯在信」、天保七年の武鑑には「父玉榮、玉人フチ、いっちゃ休伯滿信」と記せり。

玉圓永信

滿信の嗣を玉圓永信(後之玉入道)とす。弘化元年御本丸芙蓉之間、嘉永五年西丸芙蓉之間及燒火之間を畫けり。(備考)狩野重次曰く、維新の際願に依りて暇を賜はり、歸藉の出願期に後れたる爲、許されずして東京府平民籍に入りぬ。才子にして彩色は名人なりしかば、就いて畫を學べる者には土手鍋島、小出、堀等の諸侯多く、鍋島家には特に厚遇を蒙り、老鼠堂永機、幸田貞次郎、三浦乾也などもその門人なりき。殊に乾也最も親く、その仙台侯に抱へられしも、永信の斡旋に出でしなりと。明治十三年十一月廿日、歳六十五にして歿し、法名を鶴山院玉圓日輝と云ふ。(狩野重次遺去帳)

玉泉應信

玉圓の嗣を玉泉應信とす。第二回内國繪畫共進會出品人略譜に左の記載あり。

勝雲齋一記ト號ス。東京府芝區宇田川町ニ住ス。狩野玉圓ノ男ニシテ天保十三年四月生ナリ。齋ヲ狩野勝川ニ學ビ、萬延元年、日光山東照宮神殿彩色ニ從事シ、相模、甲斐、信濃、美濃、飛騨、越後、上野、下野等ヲ遊歴ス。明治三年兵部省十三等出仕拜命。現今引續率職。同十五年内國繪畫共進會ニ於テ、銅印ヲ授與セラル。

明治四十年一月十七日歿す。歳六十六。法名晃林院應信日顯。その嗣重次現在せり。畫を業とせず。

緣町家系譜

本所緣町の狩野家は、幕府表繪師の列に在らずと雖も、休白の家と關係甚深きを以て、左にその齋休心の由緒書を掲げて、相互の參照に便す。

私元祖狩野作太夫長盛儀、京都ニ罷在候處、親者羽賀作兵術と申、御所附相勤被申候。伜一人幸之丞と申有之候。右幸之丞事、若年より至而畫ヲ好、執心ニ御座候處、狩野休白殿と者緣綾有之候故、作兵術罷越、委細相願候處、不成、外事故、御聞屈被下、御弟子ニ差上候。然る處、休白殿思召ニ相叶、御厚恩之上、被召遣候とみと申女子、成長之後妻ニ被下、則狩野名跡分被與、狩野作太夫と改名被成下、同居仕、末家ニ罷成、乍恐、權現樣御代慶長年中、從京都始而駿府ニ、御休白殿御用被仰付候其砌、元祖作太夫儀、休白殿ニ隨身仕、乍恐、台德院樣御當地ニ被爲入候節御供、休白殿被蒙仰、其節元祖作太夫儀も隨身仕罷下候。夫より次第ニ休白殿ニ御用繁被蒙仰、御一人ニ而難被相勤、依之、京都ニ罷居候甥之御子息方を被申立、被奉願候處、尤之儀ニ被聽召、被奉願、古郷通被仰付、米女殿、後櫻町、主馬殿、右京殿、後永眞、右三人之御方々、御若年之時分御呼下、休白殿被召連、御目見被爲仰付、其後御病氣ニ而御暇被奉願、古郷ニ被歸度被相願候處、遠而御差留、相勤可申旨被仰渡、其後病氣差重、相果被申候。其砌、作太夫別宅仕、其伜休心今信迄、本所緣町ニ住居仕罷在候。右前書之通、元祖幼名幸之丞と申、後休白殿より名跡分被與候節、狩野作太夫と改被與候。其伜休心今信、其伜休眞隆信、其頃御家御幼年ニ付、爲御後見御師範仕、玉燕殿御取立申上、御同居ニ罷成、右玉燕殿御實子幼名休全後休白御早世ニ而、御家督無之候ニ付、休榮稙信伜玉榮、休白殿御次男ニ仕、相續奉願上候處、願之通被仰付、右休榮稙信と申候者、休眞隆信伜ニ御座候。依之、休榮家督無之候ニ付、玉榮弟子ニ有之候休和後休榮又休眞儀、休榮養子ニ仕、爲致相續候。是則亡父休眞ニ御座候。今御隠居玉榮殿ニ者兄弟、御隠居者御兄ニ而御座候。然る處、先年玉燕殿御後見御師範、祖父休榮仕候節、鹽鶴御

屏風御尋書、並御手輪、御由緒書、都合三通、玉燕殿より御預ゞ被置候處、此度貴殿に右本書三通御返納申候に付、則割印を以御引渡申候處、實正也。右之段、亡父休眞常に申傳、遺言に委敷申置候間、右本書寫三通、拙者方に扣置候に付、是又割印に而御取替申候。依之、右御由緒に引續、御弟子相成家督相續仕候。以上。

狩野法橋休白長信門人狩野作太夫長盛。長盛伜狩野休心。今信。伜狩野休眞隆信。隆信伜狩野休柔種信。種信伜狩野法橋休眞成信。

寛政十一巳未年二月　　狩野休心

狩野休白殿

麻布一本松家休圓清信

麻布一本松の狩野家は休白長信の三男（由緒書に二男とあるは征信早世の爲ならむ）休圓清信を祖とす。古畫備考に曰く、「始内記、稱古内記、（中略）中橋記、別に拾人扶持ヲ賜、宅木挽町」。狩野忠信藏由緒書（松林喜信筆原本、家圖）に曰く、「大猷院樣御代、十一歳に而御目見仕、十五歳に而朝鮮人御屏風御用相勤申候。嚴有院樣西ノ御丸に被爲入候内、御番相勤、於御前御繪節々被仰付、御純帳之内迄茂、度々被爲召、御用被仰付、休圓所持之筆に而御繪被遊被下置、唯今に所持仕候。御本丸に被爲入候後、誓詞被仰付、其節古木に鶯御筆拜領仕、唯今に所持仕候。御宿に茂罷出、於御前御繪被仰付、其節古木に鶯御筆拜領仕候、御畫休、御宿に茂罷出、於御前御繪被仰付、其節古木に鶯御筆拜領仕、唯今に所持仕候。御本丸に被爲入候後、誓詞被仰付、御奥に罷出、御用相勤申候、及夜陰候迄御城に罷在、御用相勤候儀度々御座候内、乍恐御羽織御手ヲ被爲添拜領仕候、御時服等ハ度々拜領仕候、嚴有院樣御代、從京都樂人被爲召、於御城に御樂被仰付候節、休圓被爲召、御繪可被仰付候由に而、拜見被仰付候。其後御老中方に而、右舞樂御座候節茂、爲見覺罷越候樣に被仰付、其御屋敷々に罷越、拜見仕候。右御用被仰付相勤申候處、右御入用に間違御座候而、休圓殊之外難義仕候段、乍恐達上聞、其翌年正月、御救爲御用被仰付候間、今年中に出來仕候樣に、御老中方に被仰付候由、右御用者、御休息ト御奥ト之間に御殿相建申候に付、間之御殿共申候、右之御繪被仰付候、併而九月中迄に出來差上申候處、玄猪に被爲召、爲御褒美、御時服頂戴仕候。右御座鋪鶯合、貝合御棚戸之内、爲御好、貝合之方御筆之御下繪、御彩色共に被遊候御繪一幅拜領仕、其外御筆之御下繪共、唯今所持仕候。明暦三年正月十八日十九日大火之節、同廿日法眼永眞、休圓西ノ御丸に被爲召、於御前御繪被仰付候、例年正月五日爲御書初、法眼永眞、法印探幽、休圓御城に被爲召、御繪被仰付、御時服頂戴仕候。年久敷儀故、何レ之御座敷ト申候儀者難相知、御座候。其外佛殿向、朝鮮人に被下置候御屏風（天和二年、大和繪作年、二丁目）等、毎度相勤申候」。（以下畫事備考に「長命にして九十一歳にて卒す」とあり、貞享四年の武鑑にその名見え、元祿十七年の武鑑に「木挽町休圓清信」とあり、寶永五年の武鑑にも出づ。木挽町公用帳寶暦十一年十月の條、「無足に而屋敷拜領も無之、御用相勤候御繪師」の中に、「休伯支家狩野休圓（休山時、玉燕家に分レ候者、休山龍父迄ハ御扶持拜領仕候）」とあり。

休山是信

休圓清信に嗣げるを休山是信（備考曰、又同信）とす。休伯昌信の次男にして清信の養子たり。初名木工之助、後通稱を内記と云ふ。（畫工備考）古畫備考に曰く、延寶四年月日御目見。文昭院樣御代、五人扶持被下置。享保九年三月日死、年七十」。されど專門畫家譜には「享保九甲辰閏四月五日卒、法名

自淨院休山日應居士」とあり、貞享四年の武鑑に「内記是信」、元祿十七年の武鑑に「本挽町二丁目休山是信」、寶永五年の武鑑に「休山是信父休圓清信」とあり、古畫備考には「宅麻布新町」と記せり。

松林惇信

是信に嗣げるを松林惇信（惇一作淳）とす。畫事備考に養子とあれど、爾餘の諸書多く是信の男と爲せり。琴風軒と號す。（古畫備考）貞享二年生る。（家門書）古畫備考に曰く、「正德元（辛卯）年三月十五日御目見、享保九（甲辰）年六月廿六日、父休山儀近來御扶持方被下候者ニ付、松林ニ至而ハ、其御沙汰ニ不及候、御目見之儀ハ、只今迄之通ニ可罷出」旨御申渡、元文四年六月廿一日死。一乘院惇信日實居士」、休清實信家系に享年五十歲と記せり。享保廿年の武鑑に「（父休山、あざぶ南部町）松林惇信」とあり、古畫備考には惇信の弟妹に伯壽（仙太郎、南書清信の條に「麻口院休補日要居士、安永四年六月十三日、狩野休補事」と記せるは或はこの人か）永碩（金五郎、南部大膳大夫家來、惟敬院永年二月廿三日歿）女留（休山後書也）

休山德信

億之助、松隨（來馬）及休山德信を錄せり。德信初名休太郎（家門書家譜）「幼年ニ而松林跡相續、寶延元（戊辰）年ヨリ御用勤」（古畫備考）「寶曆十一（辛巳）年五月十一日卒。年三十、法名勇健院休山日衆」（家門書家譜）德信早世の故を以て休圓爲信嗣ぐ。古畫備考に曰く、「寶曆十一年、父休山跡相續、同十三年ヨリ御用相勤。其後病氣罷成、寬政三（辛亥）年月日、祖父松林迄代々御目見被仰付候處、父休山儀ハ病氣ニ而、御目見不仕病死、休圓儀跡式相續後、度々御用相勤候ニ付、御目見之儀可相願處、長病ニ而引込居、此節全快仕候ニ付、先格之通御目見之儀奉願」（中略）同年八月十五日御目見仕候」、享和二年十一月八日、歲七十四にして歿し、法名を能成院爲信日榮居士」（家門書家譜に出づ、古畫備考休圓清信の下にこの戒名を掲げ、享保二年十一月九日、年七十七、休圓事」と記せるは誤なり）天明七年の武鑑に「（あざぶ南部信濃守屋敷內、父休山）休圓爲信」、文化十年の武鑑に「（あざぶ一本松、父休山）休圓爲信」とあり。

松林喜信

松林喜信（巳四拾三歲）寬政五（癸丑）年九月朔日、部屋住ニ而御目見被仰付候。享和三（癸亥）年正月、以御下ヶ札、御繪師被仰付候、拜領屋敷無御座候、當時南部大膳大夫麻布一本松下屋敷內ニ住居仕候」、天保七年の武鑑には「（父休山、あざぶ一本松）休圓喜信」とあり。喜信の後は休清これを嗣げり。（備考）

松永町家友益氏信

神田松永町（坪數屋敷）の狩野家は永德の弟宗也（狩野本家系圖に從ふ、餘の系圖及諸書多く宗巴に作る）の種信に出づ。種信及その子宗知重次二代は醫を業とせしが、重次の弟友益氏信に至り、休白長信の門に入りて畫を學べり。（古畫備考伯圓家藏書付なり、畫家備考曰「古右京門弟なり」）畫事備考に曰く、「宗也の二男、宗知に子なし、故に宗知養子とす」。古畫備考に曰く、「萬治二（己亥）年、御本丸御用、曾祖父友益相勤申候」（古畫備考系圖、中橋記として兵庫の弟に古左衛門を擧げたり）「御本丸御座敷并御廊下繪樣之次第」に友益が御小性組次之間に檜紅葉を畫きし由見えたり。氏信四子あり。伯圓方信、春說重信、玄榮及即譽これなり。（一作鏡春、既女子（狩野安信妻）及一子友甫寶信安信養子あり、玄榮の子龜之助松眞（八木玄立養子）あり（古畫備考）、狩野貼吉系圖は友甫を伯圓の三男と爲せり）即譽は別に家を成し、（後出）伯圓方信父の後を嗣ぐ。

伯圓方信

伯圓方信（或景信、友信に作る、井口直樹本系圖に渭川とあり）は右京光信の弟子と云ふ。（系圖一本）畫事備考に「意仙齋と號す、加賀太守に仕ふ。（古畫備考曰「一本加賀板家藩士」）二百石の地を給ふ、江戸に住居す、長命にして九十歲の餘にして卒す」とあり。古畫備考に曰く、「元祿十二（己卯）年二月廿八日御目見、同十三（庚辰）年七月廿八日屋敷被下、正德

三年巳十二月廿三日、五人扶持被下置、同年日光御宮御用相勤申候。享保十一午年八月十二日病死、年八十五」。曾て天和二年朝鮮屏風櫻紅葉小鳥一雙、享保四年同屏風竹ニ鶴一雙を畫けり。備考寶永五年の武鑑には「伯圓方信」とあり。方信の子に素仙成信、圓浚廣信狩野助九郎、宅上野三枚橋、備考、狩野新古系圖屏風と記せり、あり。成信嗣ぐ。

素仙成信

素仙成信備考曰「昌運院記ニ素川幸信」初名辰之助。古畫備考に曰く。「正德元卯年三月十五日御目見、享保十一年八月父病死、近來御扶持方被下候者ニ付、跡式之御沙汰ニ不及、取來候屋敷其儘被下置候」。卒年五十八」。

伯清因信

成信に嗣げるを伯清因信とす。井口直樹氏系圖はこれを康信圖後とし、早世と記せり、蓋し誤なり古畫備考に曰く。「享保中御畫御用相勤、父素仙死去之節、伯清事御目見不仕候得共、家業モ仕候ニ付、取來候屋敷其儘被下、同十二未年御目見奉願候處、難相成旨申渡有之」。狩野伯清例書自記に曰く。「享保年中御本丸ゟ私儀被召出、若君樣於御座之間、御席繪被仰付相勤申候。但元文二巳年類燒仕候節、右留書等燒失候ニ付、年月相知不申候。寛保三亥年日光御宮御用相勤申候。祖父伯圓迄、御扶持方被下置、御目見被仰付候。右之通御座候、委細之儀者、留書等燒失、相知不申候」。享保二十年の武鑑に「父伯圓、下谷根ばし」伯清因信」、文化十年の武鑑に「下谷れりべい」父素仙」伯清因信」など見えたり。但し文化までも生存せしことはおぼつかなし。狩野壽子系圖は因信の弟に榮澤雪信を錄せり。

榮澤雪信

伯圓敬信

因信に嗣げるを伯圓敬信狩野壽子系圖、備考は景信に作れり、蓋工藝略卷信に作るとす。古畫備考に曰く。「安永七戊年御用相勤、寛政十二申年七月伯清跡相續」。狩野探岳藏文書に曰く。「無足、實祖父素仙、實父伯清、狩野伯圓、宮已六拾九歳、文化六年ならじ」御目見未不仕候、寛政十二申年七月朔日、伊井兵部少輔殿以御下札、御繪師被仰付候」。

友益敬信、墨川盈信

拜領屋敷、神田松永町中通北側、間口四間、貳尺五寸、裏行貳拾六間半、坪數百拾七坪余、當時下谷長者町御徒方組屋敷內住居仕候」。

敬信に嗣げるを友益致信とす。狩野壽子系圖に從ふ、古畫備考は榮澤雪信と爲せり その嗣墨川盈信狩野壽子系圖は天保七年の武鑑に「下谷久保丁、御かち丁」墨川盈信」、古畫備考に「加州出入、中略公儀ヨリ御扶持許ニテ、繪ノ御用向不出、只加州へ出入致而已ニテ取續候由、天保九年十一月歸」とあり。盈信の嗣を宗益景信とす。同上 古畫備考に「當時宗益墨川跡五人扶持」とあり。弘化元年江戸城御三家方部屋下、嘉永五年西丸雁之間に畫けり。備考

愛宕下家、即春種信

芝愛宕下の狩野家は伯圓方信の弟即譽種信印文に宮信又宗信とあり、或は雙信、親信に作る、名公畫譜修理と記せり を祖とす、系圖淺草文庫本に曰く。「此人享保中比迄松平加賀守畫師、其後爲公方家畫師」。古畫備考に曰く。「宅上野三枚橋、享保七寅年八月廿八日御目見、即譽儀、松平加賀守へ出入、扶持取候由ニ付、町繪師御目見被仰付候合ニテ相濟」同書又即譽の畫ける康熙帝鹵簿圖の跋を載せたり。左の如し。

右鹵簿圖二帖、元出萬壽盛典、淸康熙皇帝即位五十二年三月十七日、爲厥明行、其六秩壽旦賀禮、自暢春園還宮之時、所設鹵簿也、而今有旨、除其道路點綴

之物、略其器械重疊之數、而使畫工狩野則信寫之、今巨具錄、盛典所敍儀仗之員、附。享保九年冬十二月辛巳、東都御書監臣下田師古隨筆。

狩野即譽藤原氏旨信六十歳筆。

舟川令信　享保二十年の武鑑には「伯耆弟、下谷三枚ばし」即譽豐信」とあり。扶桑名公畫譜には種信の嫡子新三郎得信あり。即譽に嗣げるを舟川令信（或時信）とす。古畫備

周譽親信　考に曰く、「或書に即譽孫、久米次郎ノ子。寛保三癸亥年十二月十五日御目見」。舟川の嗣を周譽親信（周一作舟）とす。同書に曰く、「延享五戊辰年御目見相願、

探業守安　未「相濟」內病死」。周譽の嗣を探業守安（備考探樣、又探とす。同書に「病身ニ付御目見不相願、明和八年七月廿三日病死、性相院天道日因居士」とあり。木

探圓守胤　挽町公用幔實曆十一年十月の條、「無足ニ而屋敷拜領も無之、御用相勤候御繪師」の中に「狩野探葉（舟譽跡、伯耆弟之家筋、伯清父ニ御座候）」とあり。探業の嗣を探圓守胤

即譽守春、探玄守明（備考胤信に作る）とす。古畫備考に曰く、「實探常守富二男、安永二巳年御用相勤」。天明七年の武鑑に「下谷三枚ば し、父探玄」探圓守胤」とあり。探圓の後、即譽守春、探玄守

探龍守玉　明相嗣ぐ。（狩野系圖）文化十年の武鑑に「橫田ぴん丁、父即譽、あたご下田村小路」探玄守明」、天保七年の武鑑に「父即譽下田村小路」探玄守明」とあり。探玄の嗣を探龍守玉とす。（狩野系圖）弘化元年

江戸城菊之間、御對面所御調臺脇御杉戸、（波に千鳥、竹垣に鶴）宇治間御入側御杉戸（南天、雪松鳥）及嘉永五年西丸蘇鐵之間を畫けり。（備考）

根岸御行松家、一説重良　根岸御行之松（拜領屋敷は北八丁堀）の狩野家は松榮門人狩野一翁より出づ。一翁の子に一溪（又一溪、或時重良（或作重信）あり。通稱を內膳と云ふ。狩野系圖一溪を以て

或は松榮又は永德の門人とし、古畫備考は山多常胤記を引いて「右京光信門人」とも記したれど、若木集に見えざれば取らず。狩野良信由緒

書（同人嗣、明治四年三月自筆原本）に曰く、「大猷院樣御代寛永二丑年、月日不知、被召抱、御目見仕（この時廿七歳なりしは、若木集にて知らる）」御繪御用度々相勤、年月不知、朝鮮人ゟ被下候御

屏風御繪御用相勤、其外度々御用相勤候書留燒失仕、年號月日不知。寛文二巳年正月廿日病死仕候」。曾て丹青若木集（或は狩榮集とも呼ぶ）一卷を著せり。

丹青若木集　これ實に我が國に於ける畫傳述作の嚆矢とす。その自跋に「元和九癸亥年三月五日、狩野內膳重信謹書」とあり。みづから記して曰へらく、「予

今雖爲一驢尾蠅、亡父之由餘耀、二十有七歳奉見大樹三代公、東武江城下經年月矣、彼小出氏（播磨守吉次）嫡孫、榮耀于今盛、而所蒙余兄弟之恩澤、亡父

モ豈不照監之哉乎、嗚呼何時何日謝盡之也乎」。寛文二年正月廿日歿す。（狩野系圖、英信家系）

織部重賴三郎　一溪の弟に織部重賴（若木集曰「織政、政改賴」）あり。古畫備考に曰く、「始甚十郎、主膳と云、十人扶持拜領、或說、池永氏式部、後稱榮翁」。重賴の子に三五郎（共に若木集に見ゆ、

內膳良信　（備考名を重利と記せり）あり。共にその畫事を詳にせず。一溪の嗣を內膳良信（若木集重信に作り、由緒書良信に作る、初重信、後良信か、古畫備考家主膳と記せり）とす。貞享四年の武鑑に「狩野一溪良信」、元祿十七

年の武鑑に「下一溪良信（父肆田養元）」などあれば、又一溪と號し、下谷に住せしならむ。古畫備考に「一溪實子」と記せり。同書に曰く、

江戸畫圖方トナル」とあれば、重良の實子にはあらざるべけれど、由緒書には「一溪實子」と記せり。同書に曰く、

嚴有院樣御代寛文（二）寅年三月十五日　父跡式被下置、如父時御用相勤、御目見仕。

貞享二丑年八月晦日　拜領屋敷被下置候旨、於北八町堀、坪數八十八坪、外河岸付ニ而屋敷被下置。

（文昭院樣御代御目見仕、狩野忠信嚴安永八年書上良信由緒書）。

元祿年中　御改御國繪圖御用相勤。其外度々御用相勤。
正德元卯年　御扶持方五人扶持被下置。
同五未年十二月七日　隱居奉願候處、願之通被仰付。
同六申年四月七日　病死仕候。

安仙春信

古畫備考に「卒年八十七」とあり。良信の嗣を養子安仙春信とす。初め左門と稱せり。系圖由緒書に曰く。

（正德元卯年三月十五日　御目見古畫備考）
有章院樣御代正德五未年十二月七日　養父良信家督被下置候旨、於御國之間、松平紀伊守殿被仰渡、如養父時御用相勤。
享保二酉年六月廿七日　隱居奉願候處、願之通被仰付。
享保三戌年四月二日　病死仕候（古畫備考は「享保二酉年四月朔日死、年五十九」と記せり）。

古畫備考に又「始左門、實良信弟、昌運筆記、宅湯島天神後」と記し、元祿十七年の武鑑に「下ヶ安仙春信」、寶永五年の武鑑に「安仙春信父了信」とあり。

友甫宴信

春信の嗣を養子友甫宴信（實は春悅畫信子、備考）とす。由緒書に曰く。

有德院樣御代享保二酉年六月廿七日　養父安仙男子無御座候ニ付、續者無御座候得共、願之通養子被仰付、養子家督被下置候旨、於御國之間、井上河內守殿被仰渡、如養父時御用相勤。
寬延元辰年　朝鮮國人ゟ被下候御屏風御繪被仰付相勤（荊田雁秋草一雙、備考）其外御用度々相勤。
實曆十一巳年十二月二日　隱居奉願候處、願之通被仰付。
實曆十二午年八月廿三日（古畫備考は十一年九月とす）病死仕候。

良信榮信

享保二十年の武鑑には「父安仙、ゆゑ天神後」友甫宴信」と記せり。友甫の子（惣領、由緒書）良信榮信（狩野貼吉系圖に信とす、時英貼信家系樂信に作れり）嗣ぐ。由緒書に曰く。

有德院樣御代享保十一午年十二月十五日　部屋住ニ而初而御目見仕。
寶曆十辰年　二丸御用御繪御掛物被仰付相勤。
同年十二月　朝鮮人ゟ被下候御屏風御繪御用相勤（秋野ニ鶉、雪芦ニ鴨一雙、朝鮮御用御屏風御入用等書付）。
同十一巳年十二月二日（古畫備考、四日）友甫家督被下置候旨、於御國之間、松平右近將監殿被仰渡、如父時御用相勤、於御前御繪度々被仰付相勤（御復
美銀子度々拜領仕候、狩野忠信殿由緒書）其外遠國御用相勤、御靈屋向其外御用相勤。
天明（五）巳年八月十六日　病死仕候（古畫備考は「九月死、年八十二歟、寬延二、四十六歲也」）。

安仙自信

木挽町公用帳寶曆十一年十月の條、「御切米御扶持被下候御繪師」の中に「一、狩內膳ノ風人扶持、友甫子、五」と記せり。良信の子（惣領、由緒書）安仙自信（ゑ）嗣ぐ。由緒書に曰く。

浚明院様御代明和二酉年七月朔日　部屋住ニ而初而御目見仕、於御前度々御絵被仰付相勤、其外遠國御用度々相勤。
天明五巳年十一月(古畫備考は十二月)四日　父良信跡式被下置候旨、於御前之間、松平周防守殿被仰渡、如父時御用相勤、上野紅葉山浚明院様御宮殿御彩色、并御薄絵御下絵、新規ニ被仰付相勤。
享保二戌年三月十三日　隠居奉願候處、願之通被仰付。
同年九月八日　病死仕候。

貼甫梅信

天明七年の武鑑に「ゆしま大こん畑、父良信、五人フチ安仙」と記せり。安仙の子惣領、由緒書祐甫梅信嗣ぐ。古畫備考に「梅笑門人也」とあり。由緒書に曰く。

文裔院様御代享和元酉年九月十五日　部屋住ニ而初而御目見仕。
同二戌年三月十三日　父安仙家督被下置候旨、於御前之間、松平伊豆守殿被仰渡、如父時御用相勤、紅葉山文昭院様、有章院様、惇信院様御霊屋向御修復御用相勤、其外公家衆御席畫相勤。
文政二卯年七月廿九日　隠居奉願候處、願之通被仰付。
同三辰年正月廿三日　病死仕候(年六十三、備考)。

良信寛靜

文化十年の武鑑には「水入丁堀四丁目、父安仙、五人フチ友甫梅信」とあり。良信寛靜嗣ぐ。由緒書には「祐甫惣領」とあれど、古畫備考には養子とし、「號鄰芝齋、融川法眼門人、始稱吉澤融平」と曰へり。由緒書に曰く。

文裔院様御代文政二卯年四月廿八日　部屋住ニ而初而御目見仕。
同年七月廿九日　父祐甫家督被下置候旨、於御前之間、水野出羽守殿被仰渡、如父時御用相勤。
同六未年　上野御宮御修復御用相勤、其外御用度々相勤。
文政十亥年八月三日　隠居奉願候處、願之通被仰付。
同年九月七日(文政九年八月七日、勝英祐信家系)病死仕候(年四十三、備考)。

伊川貴信

寛靜の嗣を伊川貴信とす。こも由緒書には「良信惣領」とあれど、古畫備考は養子と記せり。畫を伊川院の門に學ぶ。狩野貞信門

文裔院様御代文政五午年四月廿八日　部屋住ニ而初而御目見仕、御用相勤。
同十亥年八月三日　父良信家督被下置候旨、於御前之間、青山下野守殿被仰渡、如父時御用相勤。
天保二卯年　日光御宮御修復御用相勤。
同三辰年　紅葉山文昭院様、有章院様、惇信院様御霊屋向御修復御用相勤。
同八酉年　諸國御國絵圖御用相勤。
同年十二月　於御前御絵被仰付。

同九戊年　酉　丸御普請之節、御表御座敷向御用、大奥杉戸、其外御屏風御用相勤。
同十一丑年　上野文恭院様御廟御霊屋向御建替御用相勤。
同年　紅葉山御霊屋向御建替御用、井上野、紅葉山文恭院様御宮殿御蒔絵御下絵新規被仰付相勤。
同十五辰年　芝文昭院様御霊屋御修復御用相勤。
同年　御本丸御普請之節、表御座敷向、大奥御杉戸、井奥表御屏風数雙被仰付相勤、其外御用度々相勤。
弘化二巳年十一月廿九日　隠居奉願候處、願之通被仰付。

弘化元年晏川の江戸城に畫きしは、雁之間及御對面所東御入側御杉戸（別平野馬及山吹小鳥組二雄干備考）なり。晏川文化六年七月三日生れ、明治廿五年一月廿日殁す。（狩野貞信談）天保七年の武鑑には「父貞信、伊川院同居　晏川貴信」とあり。第二回内國繪畫共進會出品人略譜に曰く。

皆春齋ト號ス。（靜岡縣ノ人（幕臣たりしならん）ニシテ、東京府北豊島郡金杉村ニ寄留ス。（中略）明治七年文部省雇拜命。同八年博物局雇拜命。同十五年内國繪畫共進會ニ於テ褒狀ヲ授與セラレ、同十六年宮内省ヨリ御軸物、御屏風御用ヲ被命、賞金若干ヲ下賜セラル。

時英貼信

安川の後は勝英祐信（晏川惣領、由緒書）嗣ぐ。由緒書に曰く。

同年五月四日　年始、五節句、月次出仕被仰付。
同年十一月廿九日　父晏川家督被下置候旨、於御國之間、青山下野守殿被仰渡、如父時御用相勤。
嘉永二酉年　精姫君様御引移御惣物御用相勤。
同五子年　松榮院様御衝立御用相勤。
同年　西丸御普請之節、御國之間井御屏風御用相勤。
同七寅年　芝慎徳院様御廟御霊屋御繪、御彩色、井御宮殿御蒔繪御下繪新規認方御用相勤、其外參向公家衆御席畫等相勤。
文久元酉年六月廿九日　隠居奉願候處、願之通被仰付。
同年九月三日　病死仕候。

貞信時一

勝英早世し、晏川の養子勝甫は故ありて離別し、勝英の弟良信勝一（現在、嘉永元年五月十七日生る、伊川院門人、由緒書には勝英實子惣領とあり）家を嗣げり。畫を勝川院に學べり。その自筆の由緒書に曰く。

照德院様御代安政七申年三月十五日　部屋住ニ而初而御目見仕。
同年四月　年始、五節句、月並出仕被仰付。
同年五月　御本丸御普請ニ付、御白書院御天井、井表奥御杉戸、御屏風被仰付相勤。

文久元酉年七月廿六日　父勝英願之通隠居被仰付、家督御扶持方無相違私に被下置候旨、於御竭之間、内藤紀伊守殿被仰渡。
明治元辰年八月十日　願之通御暇被命候。

晏川以来根岸御行之松の傍に住す。第二回繪畫共進會出品人略譜に曰く。
芳春齋ト號ス。(静岡縣ノ人ニシテ(維新の際幕臣たりしなりむ)東京府北豊島郡金杉村ニ住ス(中略)明治五年博覽會事務局十四等出仕拜命。四國井淡路等巡回ヲ命ゼラレ、同六年文部省十四等出仕ニ轉ジ、同年十三等出仕拜命。同十三年八等屬ニ任ゼラレ、同十五年屬拜命。同年内國繪畫共進會ニ於テ褒狀ヲ授與セラル。

良信の子誠信、東京美術學校を卒業し、亦畫を業とす。

小田原町狩野宗心種永

築地小田原町の狩野家は、松榮重信の門人(若木集に依る、或曰永雄門人)、内匠助種永を祖とす。種永初名甚十郎(若木集に十郎に作る)宗心(一作宗巡)と稱す。(畫家備考等那須宗泉の子としたるは誤)狩野忠信藏由緒書に曰く。「元祖龜屋永忍弟狩野内匠助」。狩野久信由緒書并記錄(狩野八重子藏)に曰く。「久隅家系ニ織田家浪人久隅大膳養子内匠助、畫業ヲ學狩野松榮云々。狩野内匠助種永者、北條家臣北就見甚十郎忰ニ而、狩野永德依有内緣、以取立、北就見改爲狩野、甚太郎者、小田原騷亂之砌退居之節之儀也、同家狩野七左衛門、北就見改爲久隅、龜屋永忍弟、狩野内匠助種永」。古畫備考御室御所大御殿御間附に「韃靼之間、龜屋内匠筆」とあり。狩野素川の系圖(狩野素川藏本)に曰く。「種永、北就見大膳男也、永德茂信依有内緣、以北就見改爲狩野、宇佐美、北就見、河津一類也ト云々」。狩野柳雪由緒書(文化十四丑年正月刊三校正改之、以後可續之)(表紙)、狩野八重子藏原本)に曰く。「台德院樣御代慶長十三年申正月權現樣ゟ御目見仕、御繪御用度々被仰付、同十五戌年十月六日被任内匠助、與之口宣頂戴仕、右口宣并白川殿ゟ被相送候書翰共、唯今以所持仕罷在(この口宣案狩野八重の所藏に存せり、「上總中御門中納言、慶長十五年十月六日宣旨、藤原種信、宜任内匠助、藏人左少將藤原朝臣」)駿府御城ゟ御供仕、御繪御用被仰付、元和六申年正月廿一日病死仕候」。久信記錄に曰く。「五十三歳死去、京都住、法名常修院宗心日惠(さどお店長遠寺の墓は、柳雪信遠て誤りて宗信日惠と稱ル寺ハ種永ヨリ氏信)」。

内匠種信

内匠種信は種永の男なり。畫畫便覽に宗仙と稱する由見えたれど、從信又は爲信の宗仙と云へるを混じ誤れるならむこと、扶桑名畫傳の辯ずる所なり。柳雪由緒書に曰く。「台德院樣御代元和三年七月、部屋住ニ而御目見仕、御繪御用度々被仰付、同六申年月日不知、父内匠助跡式相續被仰付、同年月日不知、禁裏御所、之御繪御用被仰付、寛永十九午年五月十四日病死仕候」。久信記錄に曰く。「三十九歳死去、京都住(狩野八重子藏原本)」。古畫備考の系圖には、種信の弟に吉十郎ありと爲せり。狩野忠信藏(御本故有ノ清顯夫與ニ係リ不知(古畫備考ニハ「本國寺ニ葬」とあり))宗惠院種信日等、妻京部住居儒者林永喜娘。古畫備考の系圖には、種信の弟に吉十郎ありと爲せり。狩野忠信藏(御本

左近種次

丸御座敷御廊下并繪樣之次第)にも種信が「御守殿(御上段、御下段共)路中豐」を畫きし由見えたり。
種信に嗣げるを左近種次とす。柳雪由緒書に曰く。「大猷院樣御代寛永八未年八月、部屋住ニ而台德院樣ゟ御目見仕、御繪御用度々被仰付、十三子年六月日光表御繪御用被仰付(紗記朱書曰、「古キ扣ニ御樂器御彩色相勤候與有之」)同十九年月日不知、父内匠跡式相續被仰付、正保三戌年二月廿四日病死仕候」。久信記錄

に曰く、「四十五歳死去、京都住、玄立院種次日勤、妻福島左衛門大夫家臣松木源左衛門娘」、されど種信と種次との歿年享齢より推して考ふれば、種信は慶長九年、種次は同七年の生れと爲りて到底信ずべからず。故を以て扶桑名畫傳は種信を慶長五年生れ、寛永十五年歿す（九と五との誤とす）。こし、種次の慶長七年生れは種信の弟にして順養子と爲りものかとも言へり。蓋し或は然らむ。

大學氏信

種次に嗣げるを大學氏信とす。御本丸御座敷并御廊下繪樣之次第」に、大學が御守殿御上段伊勢物語を畫きし由見ゆ。柳雪由緒書に曰く、「大猷院樣御代正保三丙戌年月日不」知、父左近跡式相續被」仰付、同年十月御目見仕、御繪御用度々被」仰付、嚴有院樣西丸ゟ被」遊」御座」候節、晝夜相詰御繪御用相勤、其砌繻珍縫之御紋附御袷羽織頂戴仕、慶安二己丑年四月、日光山御社參之御供被」仰付、御繪御用相勤、寛文四辰年月日不」知、禁裏御用之御繪御用被」仰付、上京之砌、御紋附時服一重、金壹枚、御傳馬之御朱印并旅御扶持方被」下置、右御用相濟、爲」御褒美、金二枚頂戴仕、同八申年月日不」知、御本丸大奥御化粧之間御繪御用被」仰付、同九酉年十月十六日病死仕候」。久信記錄に曰く、「五十四才死去、西京住、憲性院了定日祥、妻細川忠興臣窪田五助（三百石、後浪人、法名二女名ヒン）」。扶桑名畫傳は專門畫家譜の氏信の歿年を寛文十四甲寅年と爲せるを難じ、寛文十四年は酉年にして、寛文十四年五十四歳とすれば種次の男とはし難く、又種信の男とするも、その父の年尚若きに過ぎ、寧ろ種永の男とする方時代協へりと言へり。畫家譜の寛文十四年は誤傳にて、柳雪由緒書の寛文九年を正しとするも、その不合理は更に甚しからむ。されば氏信を以て永德の弟子とし、宗心種永の子なりと爲すの最も正しかるべきを認む。丹青若木集の系圖は、宗心の子兄は內匠、弟は大學と爲して種次を載せず。仍りて想ふに種信、種次及氏信の三人實は皆兄弟にて、共に種永の子には非じか。

柳雪秀信

氏信の後を嗣げるを柳雪（久柳雪書）秀信とす。初め內匠又外記と稱せり。柳雪（信）由緒書に曰く、「嚴有院樣御代萬治三子年十二月部屋住ニ而御目見仕、御繪御用度々被」仰付、寛文九酉年十月、父大學病死仕候後、年月日不」知、跡式相續被」仰付、延寶三卯年月日不」知、禁裏御所之御繪御用被」仰付、上京之砌、金壹枚、御傳馬之御朱印并旅御扶持方被」下置、同五巳年月日不」知、禁裏御所之御繪并御樂器御彩色御用被」仰付、出立之砌拜領物等、先格之通被」下置、天和二壬戌年朝鮮人來朝之節被」下候御屏風御繪御用被」仰付、元祿二己巳年月日不」知、御本丸表御座敷并御杉戸、三ノ丸御座敷御杉戸之御繪御用被」仰付、同七戊寅年西丸御座敷向并御杉戸御繪御用被」仰付、同九壬午年四月町屋敷被」下置（內和免（賀茂野八重藏舊記原本）目、「二、拜領屋鋪之事、元祿九壬午年日本橋四日市三木團直心上」）、寶永五戊子年六月忰柳園儀（久信記錄曰、「新規被召出」）、御切米百五拾俵被」下置、御廊下番被」召出」候ニ付、（狩野齋子系圖に曰く、「別家而以北就見爲氏令又改爲久隆」）同年七月弟柳伯を家業相續之養子ニ仕度奉」願候處、同年八月十四日願之通被」仰付、同年十月禁裏御所之御繪御用被」仰付、拜領物先格之通被」下置、同六丑年十二月十五日、右御用相勤候爲」御褒美、白銀二十枚被」下置、同七寅年月日不」知、朝鮮人來朝之節被」下候御屏風御繪御用被」仰付、其外御掛物、御卷草紙、御屏風、御衝立等之御繪、度々被」仰付、正德元卯年十二月廿七日御扶持方五人扶持被」下置旨、大久保加賀守殿被」仰渡、同二辰年八月廿七日病死仕候」。久信記錄に曰く、「六十六才死去。江戸住。

秋光院柳雪貞心日昌、妻御職人丸田喜左衛門娘、是從江戸住、右淺草土富店長遠寺ニ葬ル、以後代々同寺ナリ」。享和三癸亥年改内扣先祖書（狩野八郎兵衛家藏原本）に曰く、「元祿九子年（此年内藤地小田原町取替候證拠有之）日本橋四日市三木屋直心上り屋鋪被下」之、狩野内匠（柳雪秀信）其後南小田原町勝田玄泉屋敷ヶ相願取替候、「禁裏御造營記畧（酒庵隨筆二、狩野八郎藏、延寶二年乃至四年の御造營の節事為録せり）に曰く、「江戸御繪師上京被仰付分、狩野永眞、同養朴、同探信、同探雪、同内匠」（久信附記して曰く、「右之外上京致候分、白鼠鑑と相聞候事」）

同書に依るに、この時、種信の畫けるもの左の如し。

清涼殿盤盤所（花鳥）
議定間（琴書畫）
御帳盤（四季花鳥）
御棚襖八枚
御三間御棚襖八枚、八景押畫
同同十六枚、七十二候押畫
御學問所北間（琴棋）
小御所西南ノ間（加茂畫）
御學問所西方御物置杉戸（東羊、西鹿）
御里御殿北側座敷東ノ方杉戸（東牡丹、西紅葉）
新院御所御座敷南縁側坤ノ方杉戸（北離菊、南岩ニ鶴）
本院御所御幸之間（近江八景）
同御幸之間坤之方杉戸（東牧童、西李白）
同御對面所杉戸（東虎狼、西猿ニ孔雀）

延寶九年十二月廿五日、上野御佛殿御繪御用の褒美として、安信等と共に金八百兩を賜はりしことは甘露叢に見え、天和二年朝鮮屏風源氏紅葉賀、花宴一雙を畫きしことは古畫備考に見えたり。その後寶永六年の禁裏御造營の時柳雪の畫けるものは左の如し。（紫宸殿、清涼殿、仙洞院、御所御繪様附）

清涼殿盤盤所（鳥花、總金）
議定間九紫（總金）
東庇折廻西方間半杉戸貳枚折（東牡丹、西白鷺）
上段長角廊間半杉戸貳枚折（東金鶏、西王照君）
小御所北ヨリ南二之間（唐太宗弘文館、總金）
御學問所西ノ方一ノ間（菊、霞箔砂子）
北廊西ノ行當間半杉戸貳枚折（東蘆雁、西鳴戸鶴）
内侍所東之間（草花、總金）
内々御番所御茶之間（鹿、總金）
仙洞御所常御所東御次之間（源氏物語、霞箔砂子、小壁舞鶴）
御書院西二之間（椿ニ小鳥、霞箔砂子）
摂家方休息所（唐松鶴、蘆鷺、蓮柳、右霞箔砂子）
女院御所南御座之間北側御縁座敷杉戸（東鶯、西龍門鯉）
院御所常御所下間（小壁張付共、霞箔砂子、近江八景）
夜御殿（唐松千鳥、小壁張付共ニ、霞箔砂子、御棚迄）
南御縁座敷一間二枚折杉戸（東蘭中物、西梨花唐子）
秀宮御殿南御縁座敷東方一間二枚折杉戸（東柳鷺、西唐子鶴）
同所西之方一間二枚折杉戸（東芙蓉、西羽衣、富士三保天人）
姫宮御殿南御縁座敷西一間二枚折杉戸（東佐野渡、定家、西花鶴）

この餘永叔、探信、洞春等と共に、同年九月六日仙洞御所に召されて、六枚屏風一雙（国中竹、霞中竹、墨繪）、二枚屏風押物四枚（唐子、琴碁書畫、薄彩色）を畫き、正德元年の朝

鮮屏風鎭西八郎一雙を畫けり。古畫備考「朝鮮人御屏風御用御直段之扣」存野八郎藏記原水に左の記載あり。

寶永八年卯四月廿六日請取

高サ六尺、幅貳尺二寸　登雙

一六枚折御屏風

現金

一銀貳貫百拾八匁二分

御繪樣鎭西八郎爲朝弓勢、但シ人數一雙ニ四拾壹人、雲箔砂子

正德二年辰正月廿七日請取

泥引、極彩色

御前借

一銀貳貫貳百目

〃銀高四貫三百貳拾目、但シ八歩之增共

右之通御屏風御繪樣幷御入用請取申候以上

柳伯定信

元祿十七年の武鑑には「つき柳雪秀信」とあり。寶永五年の武鑑にも見ゆ。柳雪の弟梅雲爲信は別は家を成せり。後に柳雪の長子久信が別に召出されしことは上に見えたり。

柳伯定信は柳雪の次子にして父の後を嗣げり。柳雪由緒書に曰く、「常憲院樣御代寶永五ヲ年九月廿八日、部屋住ニ而御目見仕、同年十月禁裏御用之御繪御用被仰付、父柳雪一同上京仕、部屋住ニ而相勤、文昭院樣御代御繪御用度々被仰付、正德二辰年十二月廿七日、父柳雪跡式被下置旨、於鄰躅間、幷上河內守殿被仰渡、同四午年月日不知、紅葉山文昭院樣御靈屋御用被仰付、同年六月十三日爲御褒美白銀五枚被下置、同年八月二日於御前御席繪被仰付、同月六日於御城御帷子一重被下置、同年十月御卷草紙御繪御用被仰付、同五未年二月日光山御樂器御彩色御用被仰付、出立之砌、御傳馬之御朱印幷旅御扶持方被下置、享保二酉年月日不知、增上寺有章院樣御靈屋御用被仰付、同年五月十五日爲御褒美白銀二十枚被下置、同七寅年七月廿日病死仕候」。久信記錄に曰く、「五十七才死去、松桂院柳伯日實、妻松平大隅守家臣入江市郎左衛門娘」。寶永御造營の禁裏に、柳伯の畫きしは左の如し。禁裏仙洞院御所御繪樣附

攝家休息所御許道廊下休息所巽角一間杉戸貳枚折、東黃石公張、西黃石公張、瓦

御詰番所二ノ間林和靖、雲箔砂子

內々御番所北之間麗、雲金

女院御所御幸間三之間嶽、砂子、泥引

柳雪由緒書

定信に嗣げるを柳溪邑信とす。柳雪由緒書に曰く、「有章院樣御代正德三巳年三月十五日、部屋住ニ而御目見仕、御繪御用度々被仰付、享保七寅年七月父柳伯病死仕候後、同年十月十九日御扶持被召上、（柳庭由緒書には「この間に拜領屋敷者被下置」とあり）御目見之儀者是迄之通可罷出旨、石川近江守殿於御宅被仰渡候、寬保二戌年十月十八日病死仕候」。法名趣冬院柳溪宗悟日顯。久信記錄古畫備考には「父柳伯病死仕、柳溪儀者、兼而養子仕置候得共、柳伯近來御扶持方被下候者ニ付、養子に至而は、其沙汰に不及候、御目見之儀は只今迄之通可罷出旨申渡有之」とあり。終に御扶持なかりしにやされど享保二十年の武鑑には「父柳伯、嫡地口口町柳溪邑信」と記されたり。

柳雪中信

邑信の後は柳雪中信これを嗣げり。柳雪由緒書に曰く、「右柳雪儀、病身ニ付、御目見不仕、寬保三年月日不知、父柳溪跡式町屋敷被下置旨、本多

伊豫守殿於御宅被仰渡、延享二丑年四月御八講ニ付、日光表御樂器類御彩色御用被仰付旨、朝比奈彌市殿御通、右御用無滯相勤、惇信院樣御代寶暦十辰年正月御地紙、御卷草紙御繪御用被仰付、同年六月於二丸御懸物被仰付、同十三未年四月、日光御宮御靈屋御修復御用被仰付旨、於焚火間松平攝津守殿被仰渡、出立之砌、御傳馬之御朱印并旅御扶持方被下置、明和元申年十二月、日光御樂器御彩色御用被仰付、出立之砌、御傳馬之御朱印并旅御扶持方被下置、相勤、安永三午年十一月七日病死仕候、久信記錄に曰く、「四十六才死去、一陽院柳雪日詠」「御本丸御間御用之扣」（狩野八重藏・荻原記本）に曰く、「一、雁之御間親規畫足シ、（未極月廿三日被仰付候、此坪三坪、銀五百拾匁、但シ壹坪ニ付百七拾目宛）一、躅躅之御間御繕（未極月廿六日被仰付、人數八人、此銀三拾二匁、但シ壹人ニ付四匁ヅヽ）右之通相勤申候、以上。（申十二月、狩野柳雪）」未申は寶暦十三年及明和元年ならむ。木挽町公用帳（古畫備考）寶暦十一年十月の條下「無足ニ而屋敷拜領も無之、御用相勤候御繪師」の中に「狩野柳雪（柳溪弟子、椿軒同家、光信足）」とあり。

柳溪共信

中信に嗣げるを柳溪共信とす。古畫備考には寛政八年十二月十二日柳慶と改めし由見えたり。（柳慶由緒書あり、極めて簡略なるが故に引用せず）柳雪由緒書の記載左の如し。

淺明院樣御代明和七寅年正月廿二日　部屋住ニ而、於御座之間御席繪被仰付、其後度々於御前御席繪相勤。

安永四未年正月廿七日　狩葉越中守殿を以、御席繪之御褒美頂戴仕。

同年十二月十八日　父柳雪跡式町屋敷直ニ被下置旨、加納遠江守殿於御宅被仰渡。

同五申年九月六日　上野中堂御修復御用被仰付旨、上野會所において、伊藤志摩守御通。

同六酉年五月廿五日　增上寺濟楊院樣御靈屋并御宮殿御彩色御用被仰付旨、增上寺小屋場において、小普請奉行岩本內膳正殿御通、下置。

同年七月九日　上野中堂御修復御用相勤候ニ付、爲御褒美白銀五枚被下置旨、於焚火間、酒井石見守殿被仰渡。

同年十一月廿二日　增上寺濟楊院樣御靈屋御修復御用相勤候ニ付、爲御褒美白銀五枚被下置旨、於焚火間、酒井石見守殿被仰渡。

同七戌年四月十五日　日光御宮御靈屋御修復御用被仰付旨、於柳原會所、御作事奉行松平隱岐守殿御通、出立之砌、御傳馬之御朱印并旅御扶持方被下置。

同八亥年　月日不知、右御用相濟、爲御褒美、白銀十枚被下置。

同九子年　月日不知、隨宜樂院宮御隱殿御修復御用被仰付。

天明元丑年　月日不知、鎌倉八幡社御修復御用被仰付。

同年四月　上野御宮御修復御用被仰付。

同三卯年　月日不知、增上寺有章院樣、惇信院樣御靈屋御修復御用被仰付。

寶政二戌年七月廿八日　御目見被仰付、同月廿九日年始、五節句、月次之出仕奉願候處、同年八月五日、願之通被仰付旨、安藤對馬守殿於御宅被仰付。

同七卯年五月　御廣敷御用御屏風貳雙被仰付。

同八辰年四月四日　日光御宮御靈屋御修復目論見御用被仰付旨、堀田攝津守殿於御宅被仰渡、出立之砌、御傳馬之御朱印并旅御扶持方御手當金拾兩被下置、同年十月七日歸府仕候處、同月十日右御場所向御繪并御彩色御用被仰付旨、堀田攝津守殿於御宅被仰渡。

同年十二月　御廣敷御用御屏風壁貼御繪被仰付。

同十午年六月十日　家業出精ニ付、御扶持方五人扶持被下置旨、於焚火間、京極備前守殿被仰渡。

同年六月廿二日　日光御宮御靈屋御修復御用相勤候ニ付、爲御褒美、白銀拾五枚被下置旨、於焚火間、堀田攝津守殿被仰渡。

其外公家衆參向之節、御饗應之席給、度々被仰付相勤。

同十一未年二月二日　病死仕候。

久信記錄に曰く「五十七才死去。一信院柳溪日實、實ハ武州岡部領主高二万二百五十石安部攝津守家老職朝倉只之進ノ弟也」。天明七年の武鑑には「つきぢ小田原町、父柳雪、五人フチ」柳溪共信、とあり。共信の實子「久信記錄日實子感應」溪雲來信嗣ぐ。柳雪由緒書に曰く。

攝溪來信

田原町、父柳雪柳慶共信、文化十年の武鑑には「つきぢ小田原町、父柳雪、五人フチ」柳溪共信、とあり。共信の實子「久信記錄日實子感應」溪雲來信嗣ぐ。柳雪由緒書に曰く。

文恭院御代寛政十一未年十二月廿八日　部屋住ニ而御目見被仰付。

同十二申年二月二日　父柳溪病死仕候後、同年閏四月四日、父柳溪儀近來御扶持方被下置候者ニ候間、跡式之義者御沙汰ニ不及、御目見之儀者、唯今迄之通可罷出旨、京極備前守殿於御宅被仰渡、同年八月十一日年始、五節句、月次之出仕奉願候處、同年九月六日願之通被仰渡。

文化元子年六月廿九日　御本丸焚火間御繪御用被仰付旨、御作事奉行平賀式部少輔殿御通。

同年十一月三日　御本丸廊之間御繪御用被仰付旨、堀田攝津守殿於御宅被仰渡。

同年十二月廿七日　廊之間御繪御用相勤候ニ付、爲御褒美、白銀被下旨、於焚火間、堀田攝津守殿被仰付。

同二丑年正月十六日　家業出精ニ付、御扶持方五人扶持被下之旨、於焚火間、井伊兵部少輔殿被仰渡。

其外公家衆參向之節御饗應之席給等相勤。

文化四卯年十月四日　病死仕候。

久信記錄には「文化三丙寅年五月廿二日病死」とあり。これ蓋し事實にて、柳雪由緒書の文化四年は表向きなるべし。同書又曰く「三十才死去、信良院溪雲日行」。

柳雪由信

來信の後を襲げるを柳雪氏信とす。久信記錄に「實ハ肥後國主細川侯之繪師狩野」とあり。「細川家由緒等之覺」狩野八郎兵衛柳雪、柳溪、自書書記原本、に左の記載あり。

一、文化三寅年十月　溪雲ゟ探信添書を以、龍口御茶道關野高口、伊藤宗順ゟ沖之助養子ニ致度願書差出、沖之助ゟも、右に付御口扶口差上養子ニ罷成度書面差出候樣、內意有之、則差出候處、十二月十九日願之通相濟(中略)尤探信弟子沖探齋口入之事。

一、同十二月　右引越可申處支度出來兼候ニ付、金五拾兩拜借願、白杉取扱ニ而相濟候事。

一、文化四卯正月十五日　沖之助剃髪、柳雪ト改名、引移候事。

一、龍口御目見願、(中略)

私儀當正月十五日袋方ゟ引越申候處、御次御出入を茂被仰付、不相替御繪御用被仰付、難有仕合奉存候。(中略)

狩野柳雪書判

文化四年六月

(名宛略)

一、同年十二月十一日　(中略)少將様御目見(中略)同日上野學王院ゟ被召連候事。但以前度々白金ニ而御客様御席繪被仰付候事。

一、文化五辰年七月十一日　(中略)引移前數々書被相願候處、無滯出來ニ付、目錄之通相遂旨(中略)白銀二十枚、紋附單羽織(中略)別段好之書數々被相願候ニヨリ、白銀十枚、奈良晒壹疋、外ニ弟子三人ゟ金子五百疋宛。

一、文化六巳年三月廿一日　龍口御舞臺松竹相認候。一式金拾兩。支度ハ弟子ゟ茂被下、四月十一日出來。

一、文化八未年八月十五日　傳奏御馳走席繪被仰付候ニ付、龍口ゟ御紋付御熨斗目頂戴仕度相願(中略)被下(中略)

一、文化十二亥年三月　從日光裃熨斗目願繼(中略)御門主様御席繪有之趣ニ付願繼候事。

これに由りて觀れば、柳雪は初名を沖之助と云ひ、溪雲の養子としてその家を嗣ぎし後も、御次御出入として、尙細川侯に仕へしなり。雪溪、谿運亦然り。柳雪の徳川家表畫師としての閲歴は、柳雪由緒書(自記)に詳なり。即ち左の如し。

狩野柳雪匡信

高五人扶持

拜領屋敷(間口六間六尺三寸、奥行七間、坪數百拾八坪四合七夕三才、築地小田原町貳丁目當時住宅仕候

私儀文化四卯年五月十五日　部屋住ニ而初而御目見被仰付、同年八月十四日、年始、五節句、月次之出仕奉願候處、同年九月廿四日、植村駿河守殿於御宅、願之通被仰渡。

同年十月四日　父溪雲儀、近來御扶持方被下置候者ニ候間、跡式之義は御沙汰ニ不及旨、御書付を以、井伊兵部少輔殿於御宅被仰渡(狩野探信殿文書には、同年十二月廿六日以御下ゟ札御繪師被仰付候とあり)

同七午年六月十四日　家業出精ニ付、御扶持方五人扶持被下置候旨、於焚火間、植村駿河守殿被仰渡。

同八未年八月　參向之公家衆御饗應之席繪被仰付、無滯相勤。

同九申年三月　爲冥加日光御宮參詣仕度、且又爲修行御修復御場所御彩色等をも拜見仕度段、板谷桂意・桂舟一同奉願候處、同月十日願之通被仰渡、同年四月十日出立仕、同年五月十二日歸府仕、同月廿四日、此度日光御宮其外御修復ニ付、町繪方引受ニ相成候御場所之内引分、御用被仰付被下度奉願候處、同年八月十二日、右御用相勤候樣、靑山下野守殿被仰渡、御書付御作事定小屋において、下奉行金田藤七郎殿御通達有之、往來傳馬之御朱印井旅御扶持方三人扶持一倍被下置、同十四年三月三日出立仕、同年十月晦日歸府仕。

同(十年)十二月廿二日　泰姫君樣御雛屏風壹雙被仰付。

同十一戊年二月十三日　出立仕、御修復御用無滯相勤、同年五月十四日歸府仕、同年七月五日、日光御修復相勤候ニ付、爲御褒美、白銀五枚被下置旨、於焚火間植村駿河守殿被仰渡。

同年十二月晦日　來四月於日光山御法會ニ付、御樂器類御彩色御用、先格之通被仰付旨、牧野備前守殿被仰渡候御書付を以、御勘定奉行柳生主膳正殿於御城御通、往來御傳馬之御朱印井旅御扶持方五人扶持一倍先格之通被下置、同十二亥年二月五日出立仕、右御用無滯相勤、同年四月廿九日歸府仕。

同(十二)年五月　舞樂上覽ニ付從日光表相廻候御樂器御手入被仰付。

同年七月十一日　御本丸御納戸向其外御修復ニ付、膳所之間御張付御繪御取合御手入相勤候樣、御作事奉行村垣淡路守殿御通。

同年十月十五日　當四月於日光山御法會御用御樂器類御彩色之儀、元積り通よりは仕樣等相增、入用茂多分相嵩候ニ付、格別之譯を以、爲御手當銀五拾枚被下之旨、牧野備前守殿被仰渡候書付を以、柳生主膳正殿於御城御通。

同年十二月廿七日　御納戸向大廊下其外御修復御用相勤候ニ付、銀子被下置候旨、於焚火間堀田攝津守殿被仰渡、白銀貳枚拜領仕、同日膳所間御繪御手入御用相勤候ニ付、爲御手當銀三枚被下置旨、牧野備前守殿被仰渡候御書付を以、御作事奉行土屋紀伊守殿御通。

同十四丑年五月朔日　參向之公家衆御饗應之席繪被仰付、無滯相勤申候。

文政二卯年八月廿九日　參向之公家衆御饗應之席繪被仰付、無滯相勤申候。

文政二卯年閏四月二日　淺姫君樣御引移御用御衝建一脚被仰付旨、京極周防守殿御達之由、於御細工所通達有之、右御用無滯相勤申候。

文政五午年八月二日　駿河守殿被仰渡、西丸御座敷向御繪繕等御用可相勤旨、植村駿河守殿御書付を以被仰渡、眞笑一同、右御用無滯相勤。

同七申年十二月晦日　來年盛姫君樣御引移御用御衝建一脚、御居子棚付御卷物二卷御繪御用被仰付、同八酉年右御用無滯相勤。

同九戌年二月　末姫君樣御用御雛屏風被仰付相勤。

同年　文姫君樣御引移御用御屏風一雙被仰付無滯相勤。

同十亥年五月　溶姫君樣御引移御用御衝建一脚被仰付、無滯相勤。

同十一子年三月二日　相州鶴岡八幡社、其外御再建御修復ニ付御繪、御彩色等御用可相勤旨、林肥後守殿於御宅被仰渡、同四月廿五日出立之節、御傳馬之御朱印井旅御扶持方五人扶持五割增被下置、右御用無滯相勤、同九月十一日歸府仕、同十一月六日鎌倉八幡宮御再建其外御修復御用相勤候ニ付銀子被下旨、於焚火之間、林肥後守殿被仰渡、白銀十枚頂戴仕。同月、來年和姫君樣御引移御用御屏風一雙被仰付、右御用無滯相勤。

柳雪自記の由緒書はこゝに終れるを以て、以下久信記錄に依り、これを補ふ。

同十二丑年九月十八日　大納言樣御宮參(山王)之節御目見ニ罷出(柳雪の自記に係る「大納言樣御宮參之節御目見ニ罷出」東京美術學校に在り、その事蹟を詳にすることを得)

天保二卯年正月十二日　日光御宮御修復ニ付御繪、御彩色御用可相勤旨、林肥後守於御宅被仰渡、同二月十日江戸出立砌、御朱印井御扶持五人扶持

一、倍先格之通被下置、同十月七日歸府仕。同三辰年二月十四日、江戸出立、同五月十四日歸府仕、右御用無滯相勤、同七月十二日、日光御宮其外御修復御用相勤候ニ付、銀子十枚被下置旨、於焚火間、林肥後守殿被仰渡。

同(三)年十一月二日　紅葉山、御宮井御靈屋向御修復ニ付、御繪、御彩色御用可相勤旨、肥後守殿於御宅被仰渡相勤。同四巳年十二月三日、紅葉山御宮其外御修復御用相勤候ニ付、銀子十枚被下置旨、於焚火間、肥後守殿被仰渡。

同八酉年四月　御代替ニ付、同月五日自製御短冊三枚獻上仕、同九戌年慎德院様ゟ御目見。

同(九)年閏四月　増上寺有章院様、惇信院様御廟御仕切御門御天井之御繪御手入被仰付相勤。

同十亥年三月九日　西丸御普請ニ付、樓間格天井御彩色御用被仰付旨、肥後守殿於御宅御同人被仰渡、同十二月西丸御繪御用相勤候ニ付、銀子十五枚被下置旨、於焚火間、肥後守殿被仰渡、同日西丸於焚火間同様被仰渡。

十二丑年六月十一日　増上寺有章院様、惇信院様御宮御靈屋向御修復ニ付、御繪、御彩色御用可相勤旨、増山彈正少弼殿於御宅被仰付相勤、同十三年寅年六月八日、右御用ニ付、銀子三枚被下置旨、於焚火間御同人被仰渡。

其外公家衆參向之節御饗應之席繪、度々被仰付相勤。

同十四卯年閏九月廿三日　病死仕候。六十二歳死去。止都院柳雪日香。

柳雪自記の「御用扣」(東京美術學校藏原本)あり。上記に見えたる參向公家衆席畫の所作、姫君御引移御用屏風、衝立及爾餘御用の畫題、畫料等を詳にすることを得ゝ雖も、今省略に從ふ。又「文政十二丑年三月廿一日居宅類燒ニ付願書一件」と題したる柳雪の自筆本(東京美術學校藏)あり。和姫引移御用繪製作中類燒の故を以て、假繪所取建を願ひ、祐清、探信、及了承ゝ共に、四人各金三十兩を賜はりしことを詳にすべし。天保武鑑には「父(祐清)、五人扶持、給地小田原町柳雪匡信」とあり。

雪溪後信

匡信に嗣げるを雪溪俊信とす。久信記錄に「實ハ平民鈴木源藏ノ長男」とあり、同記錄に曰く。

慎德院様御代天保十三寅年七月廿八日部屋住ニ而御目見被仰付、同年九月廿七日、年始、五節句、月次出仕之儀被仰付、同年十二月七日、父柳雪跡式被下置候旨、遠藤但馬守殿被仰渡。

雪溪の自記本「天保十五年辰七月十一日より御用之初引續萬端扣」と題したるもの(東京美術學校藏)あり。その記載左の如し。

一、天保十五辰年五月九日　夜七ッ時、御本丸大奥女中部屋一之側梅谷、姉小路兩人之火元ニ而段々燒裂、翌十日之五ッ半時迄炎上。

同辰年六月十四日　御普請御用願、大岡主膳正殿ゟ差出ス。左之通リ。

以書付奉願上候。

此度御本丸御座鉢向御普請ニ付、御張付、御杉戸新規御繪何卒相勤申度奉願上候。是迄先祖柳雪御繪御用相勤候御問も有之候間、爲冥加、何レ之御場所ニ而も、相應之御繪御用被仰付被下置候様、此段偏奉願上候、以上。

辰六月十四日

此下書晴川院ゟ問合之上相認、拙者梅軒迄も未々勤初ニ付、御用も初願故、晴川院相頼いたし。

一、同辰年七月十一日　朝五ツ時、大岡主膳正殿於御宅、御本丸御普請ニ付、御給御用可相勤旨被仰渡相濟、立返リ御禮申上、夫ゟ御老中御普請掛リ阿部伊勢守殿ゟ御禮廻ル。晴川院ゟ御給様番仲間一統請取。拙者之分鄰踏上之御間被仰付。梅軒者鄰踏下次之間被仰付。此時拙者十九才也。永徳大奥御持場所之内、鴨之仕立、方目之仕立、拙者代筆致ス。爲後年記ヽ置。

一、弘化二巳年正月九日　帝鑑之間南御入側御天井被仰付、東入側梅軒相勤、西之方玉圓、北之方探龍、右四人ニ而相勤。被仰渡之趣者、主膳正殿右御書付晴川ゟ請取、此御天井永徳殿ゟ被仰付之分之所、殊之外御急キニ付、御願返ヽ相成、夫故右四人ゟ被仰付相成。

一、初度、鄰踏之間御給御用相勤候ニ付、爲御褒美白銀十五枚、別段十枚拜領致ス。

一、後度、帝鑑之間南御入側御天井御用相勤候ニ付、爲御褒美白銀十五枚、別段拾枚拜領致ス。

一、弘化二巳年八月廿四日　御衝立畳脚被仰付、裝束白鼓、裏蘇鐵ニ靈猫。御給様番主膳正殿被仰渡之趣ニ而、晴川ゟ申聞ニ相成。御本丸紅葉之間入口ニ有之。

一、同巳年九月　仁和寺御門跡御逗留之節、御席給御用被仰付相勤。

一、弘化三午年十月十一日　家業出精ニ付、御扶持方五人扶持被下置候旨、於焚火之間、大岡主膳正殿被仰渡。

一、嘉永元申年八月十二日〃　御細工所ニ於て、精姫君様御引移ニ付、御衝立一脚、唐子あそび御給、右之通御掛付を以、越中守殿被仰渡候越、與三郎ゟ被申渡。

一、嘉永二酉年三月廿九日　大岡主膳正殿於御宅、増上寺台德院様御靈屋御廟向御修復ニ付、御給、彩色御用可相勤旨被仰渡相勤。

一、同年十二月廿四日　於焚火之間、台德院様御靈屋御修復御用相勤候ニ付、爲御褒美白銀十枚被下置旨、主膳正殿被仰渡。

一、嘉永五子年七月廿三日　遠藤但馬守殿於御宅、西丸御普請ニ付、御座鋪向御給御用可相勤旨被仰渡、畳川ゟ御間付書請取、則檜之間被仰付相勤。

一、同年九月三日　大奥御對面所北御入側梅之間、東御入側堺畳間貳枚御杉戸、表雪梅鶴、裏芭蕉、右可相勤旨、但馬守殿被仰渡之趣、畳川ゟ被申越。

一、同年　西丸御道具御屏風兩面金雲箔砂子泥引片ヽ被仰付相勤。表芙蓉ニ薄、裏雪ニ檜、但馬守殿被仰渡之趣被申越、初終畳川取扱。

一、同年十二月廿五日　於焼火之間、但馬守殿被仰渡、西丸御普請ニ付、御給御用相勤ニ依而銀子被下之旨御口達、右拾五枚、別段西丸右大將様銀子被下旨御口達有、別殿之分同拾五枚拜領。

一、同年同月廿七日　西丸御普請ニ付、御給相認、格別骨折、速ニ成功相成、依而銀子被下旨被仰渡、右則拾枚、別段拾枚拜領。

一、同六丑年十一月廿九日　一條左大將殿天德寺御逗留之節、御席給御用被仰付相勤。右節者將軍宣下ニ付、參向之公家衆也。

一、安政三辰年二月廿五日　御屏風一雙、和蘭陀國王ゟ被遣候ニ付、御給可相認旨被仰付、但馬守殿被仰渡候旨、畳川殿ゟ申越し候。

久信記錄に「安政三丙辰年九月十三日、三十二才死去、一陽院雪溪日胖」とあり。雪溪の自筆本に「嘉永七寅年十月清水彌八

（二丸御留守支配同心組頭）方ハ宗三郎聟養子差遣扣壹册（大概無洩留置）と題したるもの（東京美術學校藏原本）あり。

溪雲久信

俊信に次げるを溪雲久信とす。溪雲初谿運に作れり。久信記錄（白峯）に曰く「實ハ舊幕府家人神田孫一郎之三男也。初名利三郎敏道ト云」同書記する所の閲歴左の如し。

昭德院樣御代安政六未年四月朔日　部屋住ニ而初而御目見仕、同月廿八日、年始、五節句、月次出仕之儀被仰付（谿運自筆「御目見、月次出仕備忘錄」寫冊、東京美術學校に在り、雪溪よりの丈夫届、御目見願等より、老中以下諸役人へ御禮回勤の名刺に至るまで、巨細これを錄し、添ふるに「登城日扣」を以てせり。）

萬延元申年五月三日　御本丸御普請ニ付、大奥南御入側御佛間境御杉戸一口、御白書院帝鑑間格天井井御衝立二脚御繪御用可相勤旨、遠藤但馬守殿被仰渡相勤。同年十二月日銀貳拾枚、別段銀十五枚、御本丸御表向御普請御繪御用相勤候ニ付被下之。且又（中略）銀五枚、別段銀三枚（中略）格別骨折相勤候ニ付、別段御褒美被下之。

慶應元丑年四月　日光山東照宮御法會ニ付、別參向知恩院宮天德寺御逗留之節、御饗應之席繪被仰付相勤。佛國國被遣候手鑑ノ内御繪御用相勤。（明治初年以後官吏履歴、書事に屬せざるを以て畧す）

久信は芝濱松町に住し、晩に眼疾を患ひて明を失し、明治四十年九月十四日歿す。歳六十九。長遠寺に葬り、法名を久信院法德日修居士と云ふ。（久信の女八重夫は醫、既に歿、現在）

金杉片町家、梅雲爲信

芝金杉片町の狩野家は小田原町家より出で、大學氏信の二男、柳雪秀信の弟梅雲爲信を祖とす。この家の舊記は今存否を詳にせず。唯狩野忠信藏文書中の梅軒由緒書（安永八年十月梅軒良信書上原本）を得たるのみなるを以て、小田原町家の如く詳なること能はず。爲信初名を主水（貞享四年の武鑑に「狩野主水」とあり、諸書往々梅雪に作るは非、古舊備考氏信三男梅雪と爲せるは更に非なり）と云ふ。由緒書に曰く「嚴有院ゝ御目見仕、御繪御用相勤申候。常憲院御代元祿十丑年八月廿六日、町屋敷拜領仕候（元祿十七年武鑑に「つさぢ、梅雪爲信」とあり、實、永五年武鑑にも出づ）文昭院樣御代朝鮮人來之節、被下置候御屏風御繪御用相勤申。（正德元年、續通、後編、古舊備考）文昭院樣御代正德元卯年十二月廿三日御扶持方五人分拜領仕候。正德五未年三月二日病死仕候」「年五十九」（古舊備考）とぶ店長遠寺に葬り、法名を本法院淨緣梅雲日顯と云ふ。（墓碑）寶永六年の禁裏御造營に、梅雲が「外樣御番所西之間（芥子、惣金）」及「仙洞御所公卿之間（竹虎、惣金）」を畫きしことは、禁裏仙洞院御所御繪樣附に見えたり。

梅軒富信

爲信に嗣げるを梅軒富信とす。由緒書に曰く「（惣領）狩野梅軒、有章院樣ゝ部屋住ニ而御目見仕、於御前御席繪度々相勤、其外遠國御用等數年相勤申候。惇信院御代、朝鮮來朝之節被下置候御屏風御繪御用相勤申候。惇信院樣ゝ御目見仕、度々御用相勤、二之丸ゝ被爲入候節茂、二之丸御殿向御繪御用相勤申候。（寛延元年、茶摘、後編、古舊備考）當御代御目見仕、於御前御席繪相勤、其外御用向度々相勤申候。當御代朝鮮人來朝之節被下置候御屏風御繪御用

相勤申候。（明和元年、島合藩合、藩一揆、狩野忠信藩文書）明和五子年十一月晦日、願之通隱居被仰付、悴梅壽ゟ跡式被下置候段、於躑躅之間、松平右京大夫殿被仰渡候」。古蹟備考に「寛延二年丁時年六十五」とあれば、貞享二年の生れなり。梅軒則信家系に「安永三年十二月十日死」とあり。（嘉碑亦同じ）法名を本覺院梅軒日遵と云ふ。（嘉碑）木挽町公用帳（古蹟備考）寶暦十一年十月條下、御切米御扶持被下候繪師の中に梅軒の名を列し、享保二十年の武鑑に「父梅雲、つきゝら梅軒富信」とあり。梅軒則信家系に「爲信二男梅雨」あれど、その傳明ならず。

梅雨

梅舟民信、梅有、梅壽、嵐信

富信三子あり。長子梅舟民信（古蹟備考等氏信に作る、今則信家系に從ふ）は古蹟備考に「元文五申年閏七月朔日御目見、明和三年頃病死」と見えたれど、梅軒則信家系には「寶暦八年五月廿九日死」とあり。（嘉碑亦同じ）法名を本妙院梅舟日蘊と云ふ。（嘉碑）仲を梅有、季を梅壽と云ふ。梅壽家を嗣ぐ。諱を嵐信と云ひ、內記と稱す。由緒書に曰く、「惣領梅舟病死仕、次男梅有儀者病身ニ付、御用等難相勤、三男梅壽惣領ニ仕度、明和四亥年正月廿一日奉願候所、同月廿八日願之通被仰付、明和五子年十一月晦日、父梅軒跡式被下置候段、於躑躅之間、松平右京大夫殿被仰渡候。明和六丑年七月廿八日、當御代初而御目見仕、其後於御前御席繪度々相勤、其後御用ヲ相勤申候。明和八卯年四月十一日（梅軒則信家系ニ三月十日と爲せり）病死仕候」。法名を本柳院梅壽日歸と云ふ。（嘉碑）

梅軒員信

嵐信に嗣げるを梅軒員信とす。その自筆の由緒書に曰く、「（梅壽惣領）狩野梅軒、明和八卯年七月八日、亡父梅壽跡被下置候段、於躑躅之間、板倉佐渡守殿被仰渡候。私儀未幼少ニ付、御目見不奉願候」。古蹟備考に曰く、「安永八亥年十二月十五日御目見、同十一未年十一月廿八日隱居、年三十六」。

梅雲行信

天明七年の武鑑に「日本橋大工町、梅軒員信（文化十年の武鑑に「北本所吠井町、父梅壽、五人フチ」）」とあり。梅軒則信家系には「梅舟民信孫、梅壽嵐信男」と記せり。古蹟備考に曰く、「寛政七卯年六月朔日御目見、同十一未年十一月廿八日家督、狩野探岳藏文書に「高五人扶持」、拜領町屋敷芝金杉片町（貳丁）間口拾貳間貳尺、裏行十一間、裏幅拾六間、總坪百六十三坪」とあり。又「當巳三拾歲」とあるに依れば、安永九年の生れなり。文化十年三月二日歿す。（梅壽則信家系及墓碑）法名を梅雲院行信妙輕日方と云ふ。（嘉碑）

梅後厚信

行信に嗣げるを梅俊厚信とす。狩野壽子系圖に曰く、「後改梅軒。狩野探岳藏文書に曰く、「文化八未四月朔日、部屋住ニ而初而御目見被仰付、同年十一月廿五日、父梅雲願之通隱居被仰付、跡式被下置候旨、於躑躅之間、土井大炊頭被仰渡候」。五人扶持及拜領町屋敷は梅雲に同じけれど、「當時南本所石原新町ニ住居仕候」とあり。天保七年の武鑑に「父梅後、芝金杉」梅軒厚信」とあり。天保十四年十月十四日歿すとは、梅軒則信家系の記せる所なり。長遠寺の墓に「風梅軒花日萎信士」とありて、天保十一年二月十五日歿したるは誰なるやを詳にせず。厚信の嗣を梅軒則信と云ふ。（狩野壽子系圖）明治十五年五月十九日歿し、法名を梅軒則信居士と云ふ。（嘉碑には芳信とあり）則信の妻はつ、近年まで神田北乘物町三番地に居りしが、後木更津に行きぬとかにて、この家の舊記等を尋ぬるに由なし。長遠寺の過去帳に芳信とありて、墓碑に芳信院梅香日狩居士とあるは、明治

梅香芳信

廿三年一月十日歿したる人にて、則信の嗣なりけむ。

（浅草猿屋町代地屋敷、素川信政）浅草猿屋町代地屋敷の狩野家は永徳門人狩野祖酉より出づ。祖酉の子素川信政幼名萬介、後外記と稱す。世に古外記と呼ぶ。畫を永徳に學びて、東福門院の畫師たり。（畫工譜、系圖）壽石先祖書（狩野忠信譜、安永八年十月壽石書上原本）に曰く、

（祖酉實子惣領）狩野素川

台徳院様ゟ御目見仕、御用相勤罷在候。西御丸御殿御懸リ、御座舗長廊下御杉戸御用相勤申候。右之外御用相勤候帳面類焼仕候。其後病身御座候ニ付奉願、京都ゟ能登、禁裏御用相勤。其外御所方御用相勤申候。御當地御用之節者、罷下相勤申候。

明暦四年四月十五日、歳五十二にして歿す。法恩寺（本所太平町）に葬り、法名を本源院素川日尋居士と云ふ。（畫工譜略及畫評）右近孝信の女を娶り、後又探幽の聟たり。（系圖）寛永中江戸城御本丸大廊下に濱松圖を畫けり。（御本丸御座敷并御廊下繪様之次第）その餘京都諸寺の障壁に畫けりしもの略左の如し。（古畫備考に出づ）

泉涌寺禅書花鳥　　同中之間

花頂山智恩山院大方丈菊之間メケトンボウ有　　同下段

同小方丈花鳥之間

古畫備考に素川の圖畫寶鑑序あり。その文左の如し。

元宣帝大保中、有柏子昂者、好畫能書、其子仲穆者、歴代之書格畫法名、予家傳所編著之一卷、傳在家邦、故予間秀君婁觀印、逼肇擴拾四方、印數多有差與、因茲所及、恐眼訂之、且歴代能畫筆墨知之、或校合古人事蹟、或吝之有驗、敢以和漢合運畫學全書、共六冊、相嗣我家世、而爲子孫記之、且亦此冊閲之、可續揚哲者也、慶安二龍集己亥三月日、狩野素川藤原信政、

文拙なりと雖も、その好古を考ふるに足れり。同書又古學先生文集を引いて「畫宣聖十哲像後」の文を掲げたり。その中に曰へらく、「畫工有狩野素川者、依相所摹本、以謄寫焉」亦以て信政が畫事の傳記を補ふに足れり。

（信秀、壽石敦信）信政の弟に三郎兵衛（或三郎兵衛尉）信秀あり。歳二十九にして歿す。（畫工譜、系圖）信政に嗣げるを壽石敦信とす。或は壽碩（狩野壽碩子系圖）秀信（畫工譜、貞享武鑑）に作れり。通稱を外記と云ふ。壽石由緒書の記載左の如し。

（素川實子惣領）狩野壽石

承應二巳年　素川西御丸御用ニ付罷下候節召連罷候。十一歳ニ而大猷院様、嚴有院様ゟ初而御目見仕、其後度々能下リ御目見仕、御用等度々相勤申候。常憲院様御代替之節、京都ゟ能下リ、御目見仕、能登申候。

元禄十丑年十二月五日　從京都能下リ、同廿八日御目見仕、夫ゟ御當地罷在。

同十三辰年八月廿三日　浅草猿屋町ニ而屋敷拝領仕候。

文昭院様御代正徳元卯年十二月廿三日　御扶持方五人扶持被下置、御用等度々相勤申候。其外御用相勤分、西御丸御杉戸四枚、右者幼年之時分相勤

申候。

一、御本丸御殿御繪、万治二亥年相勤申候。

一、禁裏御殿御繪、明暦二申年、寛文三卯年、延寶三卯年、右三度相勤申候。

一、法皇御所御殿御繪、延寶二寅年相勤申候。

一、東福門院御所御殿御繪、延寶六午年相勤申候。

一、春宮御所御殿御繪、貞享二丑年相勤申候。

一、仙洞御所、本院御所、新院御所、中宮御所。

右御殿御繪、數度相勤申候。

一、右御所様方御用御掛物、御屏風、御巻物、御押繪、諸品年々相勤申候。

一、大坂御城御本丸御殿御修復御繪、寛文元丑年、元祿三午年、元祿十丑年、右三度相勤申候。

一、二條御城御本丸御殿御修復御繪、寛文八申年、元祿三午年、兩度相勤申候。

一、御本丸御用御屏風壹雙、元祿十一寅年相勤申候。

右者元祿十丑年十二月、當地ゟ罷下り候以後、御用相勤申候。

一、禁裏、仙洞御所、院御所御殿御繪、寶永六丑年相勤申候。

一、朝鮮人被下候御屏風壹雙、寶永八卯年相勤申候(住吉、玉津島一雙、備考)

上記の中、延寶二年乃至四年禁裏御造營の時、外記の畫けるは左の如し。(禁裏御造營記事に出づ)

清涼殿朝餉之間花鳥

常之御殿夜御殿申口鶴図

御學問所下段牧馬

女御御殿下段宮島

内侍所殿上之間獅子

寶永六年禁裏御造營の時、羇碩の畫けるは左の如し。(禁裏仙洞院御所御繪様附)

外様御番所東之間柳鷺、忠金

本院御所御幸之間次龍田

同御持佛堂、上段文殊菩賢、御次柳鶴四枚万歳節季候

同東御縁側御杉戸北花鳥、南青柳

同御幸之間長取付御杉戸北宇治橋武者繪、南岩燈子

仙洞御所常御所東御座之間三之間大和物語、雲箔砂子、小壁落雁

貞享四年の武鑑には「外記秀信」とあり。享保三年七月十七日歿す。法名本是院壽石日空居士。(法泉寺墓碑)享年八十。(狩野海子系圖に依る、或曰七十九)敦信の弟に洞元邦信あり、別に家を成せり。(後に出づ)敦信の子に外記(系圖)あり。その傳記明ならず。養子武信後を嗣ぐ。

伯壽武信

伯壽武信は初め岡之丞と稱し、後外記と云ふ。（書工備考）壽石由緒書の記載左の如し。

（養父狩野壽石、實父狩野休山二男）

狩野伯壽

常憲院樣御代元祿十六未年六月十三日、壽石養子被仰付候。

文昭院樣御代寶永八卯年三月十五日　初而御目見仕候。

有德院樣御代享保元申年八月　御本丸ゟ被召出、御前ニ而御繪被仰付。

享保三戌年閏十月九日　養父壽石家督被仰付候。

一、西御丸御疱瘡被遊候節、御掛物、御卷物、享保年中被仰付相勤申候。

惇信院樣御代、朝鮮人被下候御屏風壹雙、延享三寅年相勤申候。（寛延元年朝鮮屏風蘆、杜若、桔梗、蓮、ばん其外小鳥一雙、古畫備考）

一、御扇子御繪、寶曆元未年四月、被仰付相勤申候。

一、御掛物御繪、寶曆元未年六月被仰付相勤申候。

公方樣御疱瘡被遊候節、御卷物繪被仰付相勤申候。

明和三年六月九日歿す。法名本性院伯壽日光。（法華寺過去帳及墓碑）享年八十九。（狩野壽子系圖）享保二十年の武鑑に「父壽石、かやば町伯壽武信」と記せり。

壽石賢信

伯壽に嗣げるを壽石賢信とす。外記と稱せり。その自記（安永八亥年十月）の由緒書に曰く。

伯壽實子惣領

狩野壽石

有德院樣御代寛保二戌年五月朔日　部屋住ニ而初而御目見仕候。

當御代寶曆十辰年九月　伯壽隱居、壽石家督願差上候處、同十二月廿九日、願之通隱居、家督、於御廊之間、松平右近將監殿被仰付候。

寶曆十二午年三月廿八日　於御前御席繪被爲仰付候。右ニ付其後御褒美銀子貳枚頂戴仕候。

安永九年十月二十日歿し、法名を本光院壽石日性と云ふ。（法華寺過去帳及墓碑）享年四十二。（狩野壽子系圖）木挽町公用帳寶曆十一年十月條下、御切米御扶持被下候御繪師の中に狩野壽石と記せり。

素川章信

賢信に嗣げるを素川章信（初彰信）とす。初め仙次郎と稱し、後外記と改む。大玄齋と號す。（狩野壽子系圖、墓碑）安永九庚子年三月一日御目見、同年十二月廿七日家督、寛政十二申年三月晦日隱居、年三十五。（古畫備考）文政九年十月二日歿し、法名を中國院是橋素川日眼と云ふ。（法華寺過去帳及墓碑）享年六十二。（狩野壽子系圖）天明七年の武鑑には「うら八丁堀、父壽石、五人ブチ」素川と記せり。古畫備考章信の條に宇多川徳元、その子素川及源五郎を記したる系圖を掲げたり。蓋し章信實は宇多川徳元の子ならむ。同書に曰く。

「五十歳以後、狩野章信ト署シテ素川ト書セズ。六十四歳ニテ歿ス」「素川筆意老硬、粉本ニ倚ラズ揮毫スルニ、其得意ノ畫アリ。常ニ巾ヲ以テ頂ヲ包、客至